

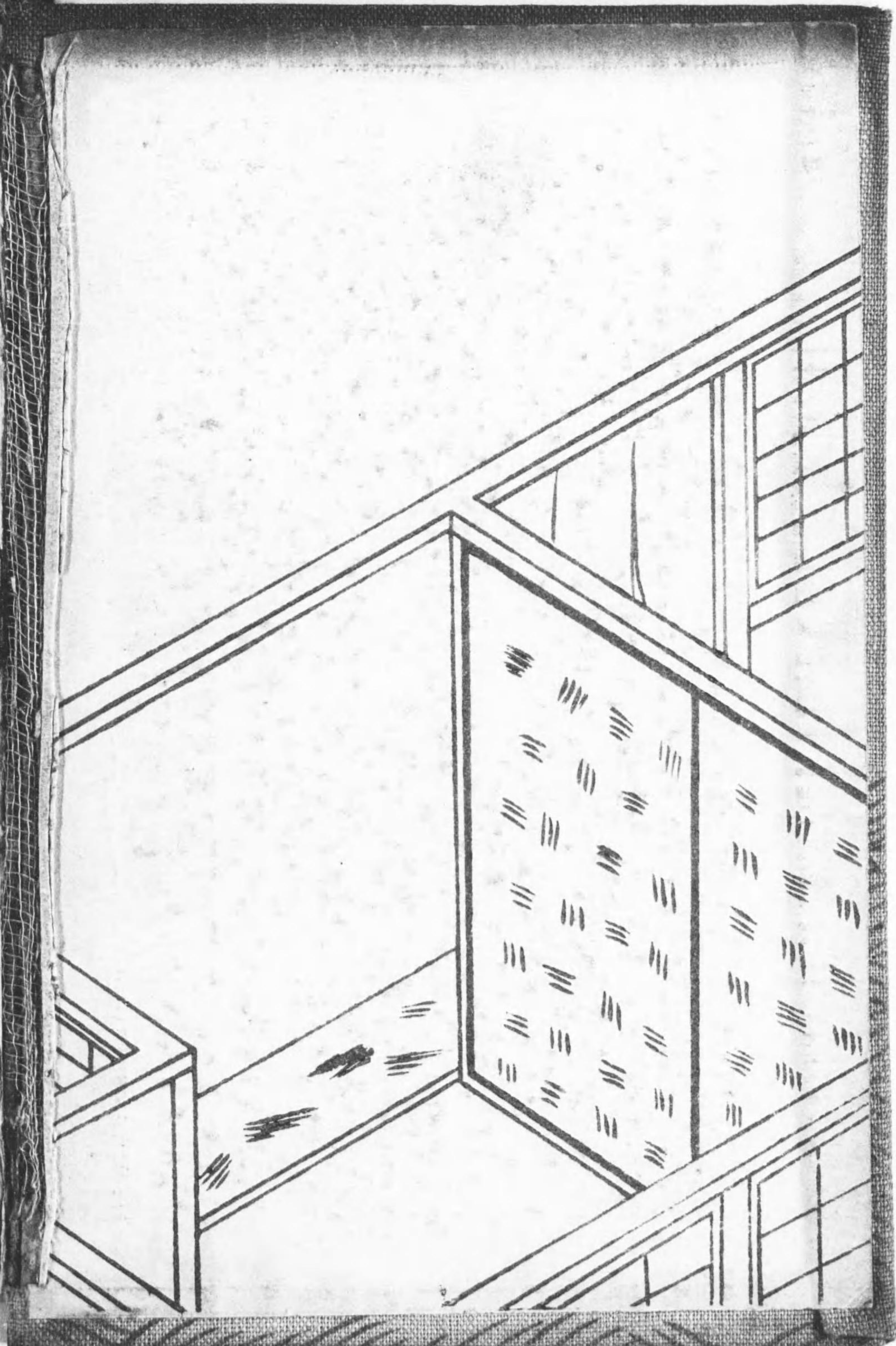
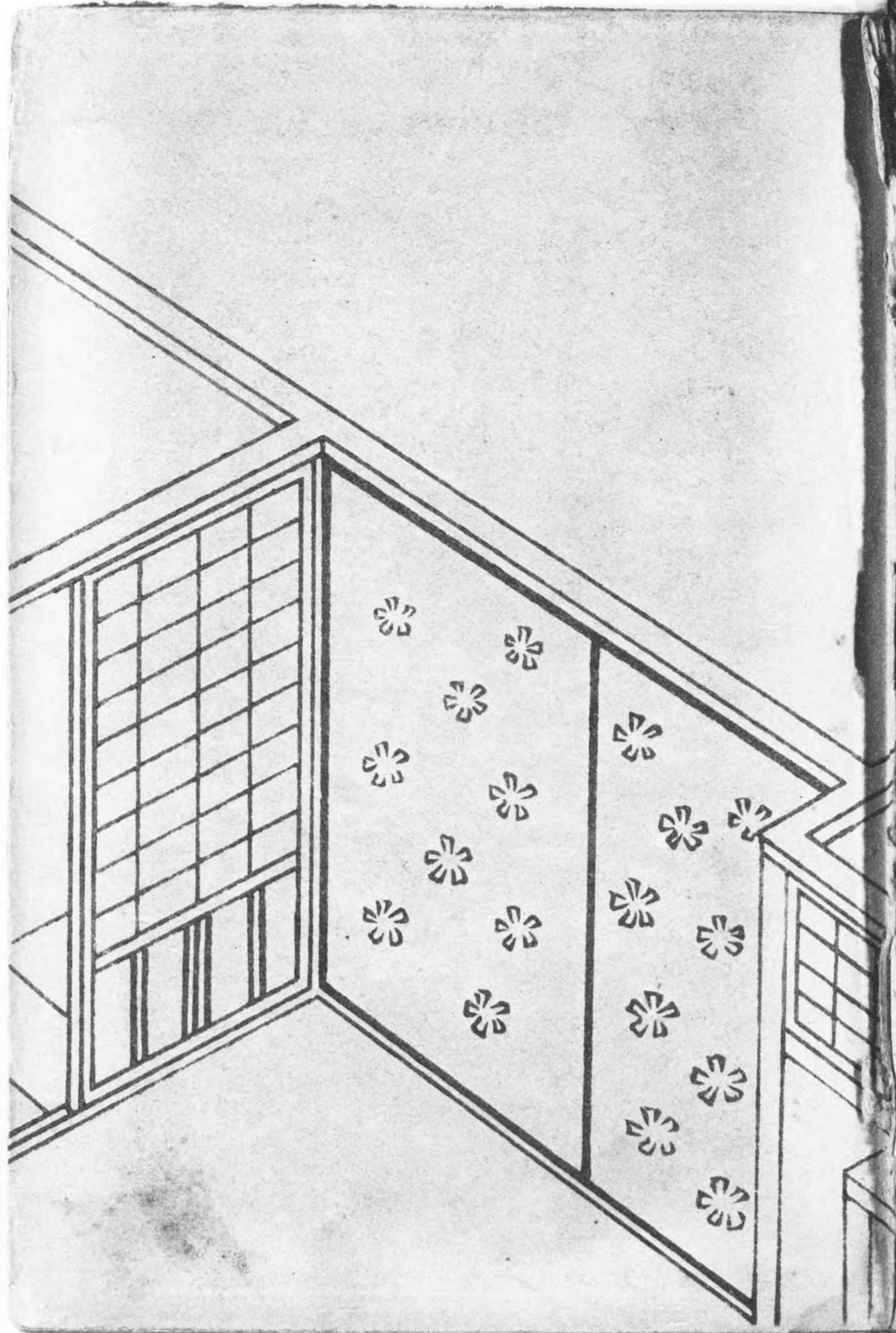
539

8



始







大南
小宣集

第三卷

大正
14. 4. 8
四父



539-8



博文學

坪

内

道

遙

共編

渥美

清太郎

大南北全集 第三卷

東京 春陽堂 刊行

Faint, illegible markings or bleed-through on the reverse side of the page.



大南北全集 第三卷目次

解説及年表……………

南北の書替へ狂言……………

口繪解説……………

狂見世まどろ 辰橋脊御せなは攝しりき……………自一頁至三七頁

頼光四天王と暫
切の見世お綱と山姥

春狂言はる 二番目にばんめ 心謎こころ 解色とくしき 絲いと……………自三〇九頁至五三三頁

本町絲屋娘と綱五郎
お祭り左七と小糸

彌生狂言やよひ 二番目にばんめ 勝相撲かちま 浮名花觸うきなはなふれ……………自五三三頁至六九四頁

白藤源太と藝者お俊
足駄の齒入れ權助

挿繪目次

◎心 謎 解 色 絲 (三幕目の錦繪。色摺り木版。初世豊國筆)……………卷頭

◎辰 橋 脊 御 攝 (三建目だんまり場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………五頁の前

◎心 謎 解 色 絲 (序幕、松本の場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………三七頁の前

◎心 謎 解 色 絲 (序幕、雪降り場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………三九頁の前

◎心 謎 解 色 絲 (三幕目、墓所の場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………四三頁の前

◎勝 相 撲 浮 名 花 觸 (發端、柳橋の場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………四五頁の前

◎勝 相 撲 浮 名 花 觸 (發端、柳橋の場錦繪。コロタイプ版。長谷川貞信筆)……………五九頁の前

◎勝 相 撲 浮 名 花 觸 (序幕、本所の場錦繪。コロタイプ版。初世豊國筆)……………五七頁の前

◎辰 橋 脊 御 攝 (繪番附全部。亞鉛版)……………解説挿入

◎心 謎 解 色 絲 (繪番附全部。亞鉛版)……………解説挿入

◎勝 相 撲 浮 名 花 觸 (繪番附全部。亞鉛版)……………解説挿入

挿繪解説

■卷頭を飾つた色刷り木版の濃艶な錦繪は、「心謎解色絲」三幕目、大通寺墓所の場で、お房が蘇生した所である。この頃は初代豊國の筆致未だ墮落せぬ時代であるから、場面は艶ながら一種の氣品がある。味ひが深い。

■「辰橋脊御攝」の中へ入れた錦繪は、三建目の返し、古御所の場、だんまりの舞臺面である。幸四郎の物凄い盜賊、半四郎の美しい蜘蛛の精、團十郎の凛々しい殿様、これ等は化政度のだんまりに現はれる人物の標本で、姿や色彩の配合が歌舞伎劇技巧の極致を盡してある。この場のだんまりは非常に有名なものであつた。「だんまり史」を書けば、特筆されるべき傑作であつた。

■「心謎解色絲」の中へは、コロタイプ版で三種の錦繪を挿入しておいた。いづれも原畫は二枚續きである。一つは左七小絲の濡れ場、一つは返しの雪降り場、この錦繪などは實に色彩が面白い。今一つは三幕目の墓所で、卷頭の木版と同じ場面である。筆者は何れも初世豊國である。

■「勝相撲浮名花觸」の中へは、初世豊國の筆として、柳橋の場と、割り下水の場との錦繪二種を収めた。最近本郷座でこの狂言を復活上演する際には、これ等の錦繪が何れも役に立つたのである。

■同じ狂言の中に、見馴れぬ錦繪が一種ある事に氣づかれるであらう。これは珍らしい大阪の錦繪で、長谷川貞信といふ畫師が描いた三枚續きである。天保九年八月大阪中座で、この狂言を上演した時に出來たもので、繪としては悪いが、珍らしいから入れて置く事にした。

■この外、以上の三脚本初演當時の繪番附を全部凸版にとつて、解説の中に入れて置いた。本卷には錦繪が豫定よりも多くなつたので、番附は本文へ共刷りにする事とした。

岩井半四郎
あやかしふたつ



坂東三津五郎
本名のちね

岩井半四郎
本名のちね



豊國丸



解説及年表

辰橋脊御攝しせなごひい



以下十二頁迄「辰橋脊御攝」初演繪番附

この狂言は、文化十年十一月、市村座に上演された顔見世狂言で、南北が五十九歳の時の作である。顔見世狂言の事は、第一巻の解説に詳述したから云はないが、南北の筆に油が乗つて、大活躍を始めた頃の作であるから、全篇にその活気が溢れ切つてゐる。丁度この時、江戸人が江戸役者根生ひの家筋と崇めた市川家七世の團十郎が、初めて座頭になつたので、その事は狂言の中でも盛んに諷つてはあるが、何といつても江戸文化の頂上期、江戸芝居の爛熟時代で、役

者の改名とか名題昇進とかには狂はしいばかりに謳歌後援する頃であつたから、この興行は非常な大入りをしめてゐたところ、十一月二十九日に高砂町からの出火で、中村座と共に市村座も焼けてしまった。江戸三座のうち、木挽町の森田座は、離れてゐるので残つたが、丁度同座でも、その年の顔見世には、「御最眞繫馬」といふ名題で、市村座と同じく「前太平記」の世界の狂言をしてゐたし、その上、市村座

から、尾上松緑、關三十郎、市川團之助等の役者も掛持ち出勤してゐた關係さへあつたので、市村座焼失後は、同座の役者は全部森田座に加入し、狂言は「辰橋脊御攝」の重要部分を残してこれに「御最眞繫馬」の一部を加へ、「辰橋閨顔鏡」といふ名題に改めて、翌閏十一月七日から興行したところ（この年は閏があつたので、十一月は二度重なつた）これ又非常な大入りであつた。

三建目には、顔見世狂言の吉例に依つて「暫



大南北全集

が附いてゐる。岩窟の舞臺で、ウケを酒吞童子の姿にしたのは珍らしいとて、大いに受けた。七世市川團十郎は碓井貞光でお家の荒事を演じ、初座頭の貫目を見せた。團十郎この時僅かに二十三歳であつた。四建目、栗の木村の場は、斯種の狂言には珍らしくない、前後と離れた挿話的的一幕であるが、面白いのは、この幕が當時の稗史小説と關係のある事である。幕中、茶屋娘お浦が、護摩の灰に見込まれた



二の瀬の源六から二百兩預かつて、その證據に笄を渡すといふ筋は、同じ文化度に發行された曲亭馬琴作の讀本、「青砥藤綱摸稜案」で、木曾のお六が貝屋善吉から金を預かつて、代りに櫛を渡すといふ趣向を明らかに借りたものである。また、道具替つて、春波しの場、春で谷へ下りた源六と御厨七郎が争ふのは、矢張り當時發行された馬琴の小説、「四天王剽盜異録」から思ひ附いた趣向である。戯曲と小説との間に、双方相犯さなれないといふ不文律が厳しかつた當時

解説及年表

の江戸文藝界としては、斯ういふ事實は特異の部に属するのである。

二番目の世話場は、「羅生門河岸切り見世の場」といふので、場所は京都の體になつてはゐるが、勿論當時の私娼窟をソックリ描寫で行つた場面である。顔見世狂言には好んで、この「切り見世」の場が使はれるのは、當時の民衆に受けたからであらう。この中に三日月お仙といふ役がある。これは四世岩井半四郎が始めた型で、有名な役であるが、この狂言では大して活動してゐない。本來なれば大役なのであるが、この時は五世岩井半四郎の子岩井糸三郎が勤めたので役を軽くしてある。さうして、五世半四郎のお綱が糸三郎に、舞臺で三日月お仙の役柄を教へるやうな趣向にしてある。三日月お仙は、岩井家の大切なお家藝なのである。又、團十郎の演じてゐる海老さこの十といふ役名も度々現はれ、いなせな魚賣りの姿が、市川家特有の一種の型になつてゐるのである。



る。

大切り淨瑠璃としては、半四郎の「山姥」の所作事が附いてゐる。「山姥」の所作事は、寶曆十二年七月市村座上演「織殿軒漏月」を最初として、顔見世狂言には折々演じられ、その度毎に臺本も書き替へられるのであるが、この狂言の「親子連枝鷲」は、近松の「嬭山姥」から、しやべりの趣向を取つて入れ

てあるが面白く、その曲調こそ傳はつてゐないが、現時流行する「市川山姥」と、同一文句が多くある所から見ても、詞曲とも今日の「山姥」の土臺となつた淨瑠璃である事は疑ひもない。殊に山賤が二人出るのは、この曲に限つた趣向で、珍らしい。

「山姥」の前に、頼光と花園姫の、色模様の淨瑠璃を付けてあるが、これは當時の慣習で、「山姥」の前には、必ず斯うした色つほしい場面を添へたものである。「山姥」ばかりを演じないで



斯ういふ前曲を添へるのが例だつたのである。なぜさうしたかといふと、「山姥」の所作は配合上、どうしても一日の狂言の大切に持つて来なければならぬが、その場面と扮装とが、打出し前としては稍色彩の華美を缺くので、その前に派手な場面を一つ附けて變り目を引立たせ、同時に山姥の役者にも美しい役を演じさせて、扮装の變化に多分の興味を持たせたのである。

役割は左の通りであつた。

毘黒大臣(尾上松緑)又次娘お浦、園生の前實ハ能
 勢判官娘三崎(ニヤク市川團之助)常俊息女鶴の前、
 又次娘お栗實ハ鶴の前、池田息女花園姫(ニヤク松
 本よれ三)大江郡領政平(中村歌藏)栗の木又次
 (澤村金平)伊豫太郎有信、醫者張臂道庵、馬士朋
 六實ハ瀧夜又(ニヤク澤村四郎五郎)猪熊入道雷雲、
 切り見せ女郎お蝶(ニヤク市川栗藏)快童丸(岩井松
 之助)築島左少辨長連、見世物師善好、路地番喜之
 助(ニヤク坂東善次)加藤豊後次郎忠正、尊國君實ハ



秦正文、賤の女白梅(ニヤク坂東鶴十郎)物部平太有國、貸し物屋金助(ニヤク嵐新平)丹波太郎鬼住(大谷門三)多田
 満仲、武藏五郎興世(ニヤク市川門三郎)東條五郎景道、飛脚よい助(ニヤク桐島儀右衛門)侍女關屋(山下萬作)平常
 陸介正盛、山鯨の權助(ニヤク松本小次郎)河内守頼信、賤の女紅梅(ニヤク吾妻藤藏)御厨七郎俊連、大宅太郎光任
 (ニヤク關三十郎)頼信弟美女丸實ハ保昌娘小式部、切り見世女郎三日月お仙實ハ純友娘九重姫(ニヤク岩井糸三郎)野



伏りつゞれの次郎實ハ藤原保輔、茨木屋鬼の七五郎實ハ
 伊賀壽太郎、山賤鐵藏實ハ鬼同丸(ニヤク松本幸四郎)田
 舎娘お岩實ハ將門娘七綾姫、鬼七女房お綱實ハ侍女苦
 屋、頼光侍女此糸、足柄山の山姥(ニヤク岩井半四郎)碓
 井荒太郎貞光、二の瀬源六近忠、煙草賣り酒むしのお
 芳、三田源太廣綱實ハ將軍太郎良門、看賣り海老さ、
 の十實ハ渡邊源次綱、源攝津守頼光、山賤斧右衛門實ハ
 三田仕(ニヤク市川團十郎)

「心謎解色絲」

この狂言は、文化七年一月、市村座

八
 上演された世話狂言で、新春だけに一番目は「春榮松會我」といふ名題の會我狂言で、二番目へこの狂言が、仕組まれたのである。そして「本町絲屋娘」の書替へ狂言である。書替へ狂言に就いては、別項の「南北の書替へ狂言」に詳述してあるから爰には云はない。

本町絲屋娘といふ詞は、餘程古くからある。南茂樹氏の説に従ふと、本町といふのは大阪だらうといふ事であるが、兎に角、寶永七年の「松の落葉」には、既に絲屋娘を唄つた歌詞が出てゐる所を見ても、淵源は古いに違ひない。併しこれを戯曲に脚色したのは、ズツと後で、寶曆四年の一月、市村座で、「本町絲屋娘」と題し、姉娘お房（瀬川菊次郎）妹娘小絲（中村糸太郎）聳左七（尾上菊五郎）で演じたのが最初らしく思はれる。この狂言は、さして評判にもならなかつたが、その後、安永六年一月に至つて、中村座で、塚越一三治、増山金八が合作の「本町育浮名花婿」



大南北全集

といふ狂言を演じたが、これは大評判になつて、後の「本町絲屋娘」の世界の土臺になつた。この時の役割は、本町綱五郎（大谷廣次）絲屋婿左七（嵐三五郎）半時九郎兵衛（山下又太郎）姉娘お房（尾上多見藏）妹娘小絲（芳澤いろは）母妙閑（坂東三津五郎）傾城花咲（嵐松之丞）局岩藤（三國富士五郎）山住五平太（坂東津多右衛門）阿野屋十兵衛（澤村長十郎）石塚彌三兵衛（市川團藏）等で、即ち後世屢々使はれる役名がこの時一定したのである。



「本町育浮名花婿」の脚本は傳はつてゐないから、如何なる筋か不明ではあるが、大體は想像が出来るといふのは、この狂言が非常な評判であつたため、これが操り狂言にかけられ、その臺本即ち義太夫は今に傳はり、しかも曲節さへ残つてゐるからである。「本町育浮名花婿」が大當りだつたといふのは、この義太夫がしかも二種まで出来てゐるので解る。即ち同年三月になると、肥前座では「江戸自慢戀商人」と題し

解説及年表

て、友三郎鬼眼合作の義太夫が出来た。と同じ月に外記座の方には、紀上太郎の作で「いとくろ。ほんちやうせじら絲櫻本町育」がかつた。兩者の院本は今に傳はり、殊に「絲櫻本町育」の方は活字にまでなつてゐるが、讀み比べで見ると大同小異で、實によく似てゐる所から見ると、兩者とも「本町育浮名花婿」を題材にして、多少の添削をしたに過ぎぬものであらう。であるから筋も解る。役名などは勿論同じことである。

この二つの淨瑠璃も、双方負けず劣らずの評判になつた。本町育の筋書に鳥居清經が繪を加へた同題の黄表紙が発行されると、戀商人も同じく清經の繪で黄表紙になつた位である。併し義太夫の節附は本町育の方が優れ、殊に「小石川の段」の節附が妙を極めて、義太夫流行りであつた當時の江戸民衆の口にのほつたので、遂に本町育の方が勝利を得てしまつた。「絲櫻本町育」といふ同名題で別な内容の脚本まで出来た。義太夫はその後も流行し、「小石川の段」は



曲が今日まで傳はつてゐるのである。この義太夫の流行は、本町絲屋娘の書替へ狂言を盛んにさせた一つの原因でもあらう。戯曲のみでなく、小説にも盛んに作られてゐる。

「心謎解色絲」は、元より書替へ狂言であるから、原作と筋に於て關係は無い。俠客の本町丸綱五郎を、侍ひの本庄綱五郎としたり、絲屋の娘小糸を、藝者の姿に直したり、二枚目の左七を、お祭り左七といふ鳶の者に直したりしてゐる。このうちでも、鳶の者になつたお祭り左七が、俳優の技倆から役名が喧傳されたので、本家の婿左七は人に忘れられ、「お祭り左七」といふ講談まで創作されるほど有名になつた。

この時のお祭り左七に就いては、面白い話が残つてゐる、それは、尾上松助の左七も好評であつたが、澤村田之助の小糸も非常な出来と賞讃された。元來この二世澤村田之助は、内氣な俳優で、「朝顔日記」の朝顔などを最も得意とす



る人であつたから、どちらかといへば傳法な藝者などは柄にない役だつたのであるが、この時の小糸は減法よかつた。そして、凝り性の田之助は、左七に殺されるとき、血綿では情がうつらぬといつて、淺黄縮緬の着附を毎日蘇袍の血でよごし、興行中日々新しい着附に取替へて出たといふのである。血糊を毒々しく使ふことは、この時代の頽廢した江戸人へ媚びる刺戟的な風習ではあつたが、そのために小袖を毎日着替へるといふ事は前例に無かつたので、非常な評判になつた。その又血糊によごれた小袖を、物好きな藝者達は買ひ求めて、座敷へ着て出るのを見得としたので、評判は一層高くなつたといふのである。

「心謎解色絲」は、南北と、二世櫻田治助との合作脚本である。南北は主としてお房綱五郎の件りを書いた。一旦死んだお房が蘇生して、婚禮の白装束のまま、棺桶から出る趣向や、小石川の場でお房とお時を變らせる技巧などは、南北



大南北全集

專賣の手法である。この蘇生の件は、後に二世瀬川如臯が小さん金五郎に借りて「盟結艶立額」を作り、小石川の場はソツクリ黙阿彌が眞似て、「升鯉瀧白旗」の大詰に使つてゐる。

二幕目、「絲屋の場」が廻つた臺所で、番頭佐五兵衛と丁稚與茂吉が、鮭の頭を枷に階子段で立廻りをする件りがある。讀んだだけでは要領を得ないが、あれは前年の市村座顔見世狂言が「貞操花鳥羽戀塚」

即ち袈裟御前の筋であるから、幸四郎の盛遠と三津五郎の互が、高雄山神護寺で石段のタテがある。これが非常な評判になつた所から、それをそつくり茶番で行つたのである。「貞操花鳥羽戀塚」は別冊に收容するから御参照を願ひたい。初演の折の役割は左の通りであつた。

鳶の者、お祭り左七(尾上松助後の三世尾上菊五郎)
 半時九郎兵衛(松本幸四郎)本庄綱五郎(坂東三津五郎)
 九郎兵衛女房、お時實ハ絲尾娘小糸、絲屋娘お房(ニヤク岩井半四郎)安野屋十兵衛(助高屋

以下十七頁迄「心謎解色絲」初演繪番附



解説及年表

高助、藝者、中根屋お糸(澤村田之助) 神原屋左五郎(市川團十郎) 薦の者風の神喜左衛門(尾上松緑) 絲屋番頭、佐五兵衛(澤村四郎五郎) 山住五平太(市川宗三郎) 石塚彌三兵衛(市川門三郎) 家主、栗島權兵衛(坂東善次) 後家おりの(芳澤いろは) 松本女房、お蔭(小佐川七藏) 醫者、百川東林(松小次郎) 質屋手代、金六(市川栗藏) 廻し男、儀助(澤村次郎三) 十兵衛女房、おらい(市川團之助) 信濃者、李助(嵐新平) 赤城光若(坂東義助) 乳人、竹川(岩井梅藏) 烏追ひ娘、お君(岩井松之助) 肴屋、勝(花井才三郎) 丁稚、與茂吉(坂東鶴十郎)

二度目の上演は、文政十二年一月市村座で、名題は「色一座會我大寄」であつた。役割は

佐七(尾上菊五郎この時から佐七の字に直つた) 綱五郎(坂東三津五郎) 十兵衛、髪結ひ仁三郎(ニヤク坂東義助) おりの、おらい(小佐川常世) 竹川(山下龜三郎) 儀助(坂東三津右衛門) お房(岩井半四郎) 權兵衛(坂東彦左衛門) 佐五兵衛(淺尾爲十郎) 五平太(山下京四郎) 彌三兵衛(藤川八藏) 九郎兵衛(澤村四郎五郎) 左五郎(尾上松助) お糸(岩井衆三郎)



郎)

この時は、大切「小石川の場」を少し書替へ、風の神喜左衛門と、九郎兵衛女房お時の二役を抹殺しこの代りに髪結ひ仁三郎といふ役を作つて、綱五郎を強請る筋に訂正した。

三度目の上演は、天保十一年一月の河崎原座で、名題は「梅咲若木場會我」であつた。役割は、

佐七、清兵衛女房お松(ニヤク尾上菊五郎) 九郎兵衛、福島屋清兵衛質、本庄綱五郎(ニヤク市川海老藏) 神原佐五郎(市川九藏) 小糸(尾上榮三郎) 十兵衛(片岡市藏) おらい(市川鯉之助) お蔭(尾上伊三郎) 佐五兵衛(市川三藏) 彌三兵衛(市川黒猿) 東林(市川箱猿) 五平太(尾上菊四郎)

この時は全然お房の件を除去し、佐七の件のみにして、大切に「福島屋清兵衛内の場」といふのを附けた。これは三世並木五瓶が補修したもので、糸を殺した佐七は、福島屋清兵衛の内



に隠まはれる。また半時九郎兵衛も爰へ飛び込んで、清兵衛の女房お松に隠まはれる。結局、お松は佐七の舊臣とわかつて、九郎兵衛から色紙を取返すといふやうな筋で、海老藏と菊五郎が、互ひに早替りで勤めた。この場で九郎兵衛が逃げようとする時、お松が晒しをやらうとすると「なんだ晒しだ、縁起でもねえ」それでは三尺をと云ふと「三尺高え木の空、聞いてもゾツとする」最後に引廻し合羽をやらうとすると「なんだ引廻しだ。引廻されてたまるものか」と禁句だらけの臺詞が評判になつたさうである。又この時の初日に、小糸殺しの場で佐七が、型の如く書置を辻行燈で讀まうとしたが、菊五郎は假名がやう／＼讀める程度の知識だつたので、狂言作者が細字で書いた手紙は讀めない。癪癪を起して「誰哉行燈が薄ツくれえや」と出刃で行燈を叩き毀して無理に幕にしてしまつたが、その有様が眞に迫つて非常によかつたので、翌日から書置は大きな字に直つたが、



矢張り行燈は叩き毀すことにしてしまつたといふ。

四度目の上演は、弘化元年九月の中村座で、名題は「誰噂色菊月」といつた。役割は

佐七(尾上菊五郎)九郎兵衛(松本幸四郎)小糸(岩井半四郎)本町丸綱五郎(市川團十郎)佐五郎、十兵衛(二ヤク市川九藏)おらい(岩井松之助)お蔭(岩井辰之助)彌三兵衛(嵐猪三郎)五平太(中山現十郎)佐五兵衛(中村鶴藏)儀助

(市川宗三郎)東林(市川森五郎)

この時は序幕へ新たに本町丸綱五郎といふ役を設け、これと九郎兵衛が喧嘩の中へ、佐七が留めに入る趣向に直した。そして、小糸殺しで終ひにしたから、二幕で済んでしまつた。昔も脚本のカットは盛んに行はれてゐたのである。

五度目の上演は、明治四年一月の中村座で、名題は「本調糸音色」であつた。役割は、

佐七(五世尾上菊五郎)小糸(三世澤村田之助)九郎兵衛、十兵衛(二ヤク坂東彦三郎)綱五郎(中村



壽三郎(佐五郎(尾上芙蓉)彌三兵衛(坂東龜藏)おらい(市川門之助)お蔭(嵐榮三郎)五平太(中村仲太郎)東林(坂東新左衛門)佐五兵衛(中村相藏)儀助(尾上梅五郎現今の尾上松助)

五世尾上菊五郎が、祖父の三代目張りで見せたのであつたが、どういふ譯か非常な不評であつたので大芝居ではこれぎり上演されなくなつてしまつた。小芝居では、それでも最近まで上演してゐた。

明治三十一年五月になると「江戸育御祭佐七」といふ三世河竹新七の作が歌舞伎座に上場され五世尾上菊五郎が佐七を勤めた。これが今日行はれるお祭り佐七である。小糸の縁切り、喧嘩かぶりの殺しの姿、小糸の長褌袴姿等を原作に似せた外は、全く新作であるが、歌舞伎劇としての味はひは可成り稀薄になつてゐる。

『勝相撲浮名花觸』

これは文化七年三月の市村座に上演された世



以下二十三頁迄「勝相撲浮名花觸」初演繪番附

話狂言で、即ち前の「心謎解色糸」の次狂言である。一番目は「樓門五三桐」で、幸四郎の五右衛門に三津之助は高景一役だつたので、二番目にこの新作を附けて、三津五郎半四郎を中心に、幸四郎をワキへ働らかしたのである。

本篇は白藤源太とお俊の情話、即ち「河原の達引」の世界の書替へ狂言である。お俊傳兵衛の名が戯



曲に現はれたのは、いつの頃よりであるか判然せぬが、例の爲永宗輔の「近頃河原の達引」は、お俊傳兵衛の開祖とも思はれるが、この淨瑠璃は今日では天明五年五月の作といふ事になつてゐるけれども、疑はしい點があり、天明二年の春には市村座で、既にお俊傳兵衛の狂言も上場されてゐる。白藤源太といふ名も、天明三年春の中村座に見えてゐる。これは今も曲が残つてゐる。富本の「花川戸身替の段」で、市川門之助が力士白藤源太を勤めてゐるが、白藤は當時

の名力士小野川喜三郎に擬した役だつたさうである。その後も源太お俊の書替へは度々上場されたが、この「勝相撲浮名花觸」が出来てからは、これが有名になつたので、以後新しい書替へ狂言は出なくなつた。

この狂言の主人公は、無論白藤源太であるが、南北は寧ろ足駄の齒入れ權助に力を入れて書いてゐる。幸四郎獨得の役で、これが評判になつて大入りをしたのである。以後、數回復演はされてゐるが、いつも權助の役者を中心にして上演したやうである。一體南北は、深川に住んでゐた所爲か、本所邊を好んで作中へ使ふ。岩淵といふのは何處であるか知らぬが、外の作にも度々出てくると權助といふ名も南北は好きだつたと見えて、いろいろな狂言にいろいろな役柄で利用してゐる。それだけ、この岩淵の齒入れ屋權助といふ人物は、南北が會心の役だつたのであらう。



大南北全集

初演の折の役割は左の通りであつた。

角力取り、白藤源太(坂東三津五郎)藝者、お俊(岩井半四郎)足駄齒入れ 岩淵の權助、坂間傳兵衛(ニヤク松本幸四郎)津川勝次郎(市川團十郎)津川主水(尾上松助)云ひ號け、お澤(小佐川七藏)姉、お富(山下萬作)潮田伴之進(澤村四郎五郎)權助女房、おとり(市川宗三郎)母、おかや(市川門三郎)若徒、左五平(市川栗藏)大のしの富八

(花井才三郎)

第二回の上演は、文政四年五月、京都北側の芝居へ、三津五郎半四郎幸四郎の三優が上つて行つたとき、この狂言を出した。三優の持ち役は初演通りであつたが、その外は今不明である。

この時も非常な評判だつたので、京阪人の間にこの狂言の話が残り、天保九年八月の大阪中座では「紅筆戀取組」といふ名題でこの狂言を上場した。角書には「仇なほしのちらし書、いとしかけた謎々に、角力とらせて白藤源太」



解説及年表

とあつた。役割は、白藤源太(三桝源之助)藝子(中村富士郎)梶の長兵衛(浅尾與六)で、お俊を(中村富十郎)権助を長兵衛と、役名を変更したのは、その方が大阪人の耳に馴染みのある爲である。

江戸での第二回上演は、天保五年五月の森田座で、名題は「花菖蒲浮名顔觸」と改め、源太とお俊は何れも初演俳優の息子が勤めた。権助だけは初演通り幸四郎が、後見格で勤めてゐた。役割は

- 源太(四世坂東三津五郎)お俊(六世岩井半四郎)権助(五世松本幸四郎)傳兵衛(關三十郎)お澤(嵐龜之丞)伴之進(大谷友右衛門)佐五平(澤村四郎五郎)おとり(惣領甚六)勝次郎(浅尾一友)お富(關三之助)主水(嵐七五郎)

大切、道行の富本は「二世三世角力盟」といふ名題に變つた。

三度目の上演は、弘化二年一月の市村座で、大名題は「會我風流家春駒」。道行は「戀綾瀬流派」といふ常磐津にして、文句も大分増補した。こ



の時の役割は、

- 源太(十二世市村羽左衛門)お俊(坂東しうか)権助(六世松本幸四郎)傳兵衛(坂東三津五郎)お澤(岩井杜若)おかや(片岡市藏)伴之進(中村芝十郎)おとり(尾上菊四郎)主水(浅尾工左衛門)勝次郎(松本小次郎)お富(尾上民三郎)



これぎり打絶えてゐたのを、大正十四年二月本郷座で、大南北研究を看板に、久し振りで復活上演された。道行は初演と同じ名題で、清元に改調した。役割は

- 源太(實川延若)お俊(市川松蔭)権助(市川左團次)傳兵衛、おとり(ニヤク澤村源之助)勝次郎、主水(ニヤク市川壽美藏)伴之進(市川荒次郎)おかや(中村竹若)

渥美清太郎識

南北の「書替へ狂言」

むかしは、「書替へ狂言」が、芝居に大變流行つた。文化文政度に一番多かつた。そして、その流行らした親玉といふのは、大南北、即ち鶴屋南北だつた。

「書替へ」即ち「改作」といふ事であるが、今日でいふ改作とは、いくらか意味が違つてゐる。

狂言作者が、或る戯曲を創作する。それを上演するに當つて、篇中の役名は、勝手に附けるのが當然だが、附けない。事實から材を得たものでも、事實の名を使はない。全く架空から絞り出したものでも、架空な役名を與へない。どうするかといふと、或る有名な戯曲から、役名だけ拾ひ出して來て、これを新作の役柄にあてはめて、適當に名を附ける。南北あたりの探つた手法の十中八九はこれである。結局、役名を借りてくるだ

大正四年二月本月郷座上演「勝相撲浮名花觸大詰舞の臺面



大南北全集

けの事なのだ。これを、彼れ等の術語で「世界を借りる」といふ。そして、Aの世界を借りた新狂言を、Aの「書替へ狂言」と稱したのである。

勿論、例外はある。「四谷怪談」は、忠臣蔵の世界を借りて來たから、佐藤與茂七や直助權兵衛といふ名が出てくる。併し、お岩や伊右衛門といふ役は、南北が附けたのである。南北以前にお岩や伊右衛門は無い。史實の有無は別にしても、これ等の役名は南北の創作だ。また、小幡小平次といふ役は、南北の脚本に初めて現はれる。南北以前、小幡小平次は芝居國に存在しない。これも南北の創作である。新狂言の全部が書替へ狂言であるといふのでは決してない。只、大部分がそれなのである。

昔の歌舞伎道には、今から考へると、譯のわからぬ事が随分澤山ある。この、「書替へ」といふ事も、わからない中の一つである。

文化七年の春の宵、或る風鈴蕎麥屋の悪黨が、大きな商家の娘を誘拐し、縊り殺して金を盗んだ。その悪黨は忽ち捕へられた。江戸中の大評判になつた。南北は早速この三面記事を、一日の通し狂言に作りあげた。さて、例の如く世界を借りて來なければならぬ。南北は、その悪黨を、駕籠屋の甚兵衛と附けた。殺される娘を、山崎屋の娘お照と附けた。甚兵衛とお照、これは出雲の「双蝶々曲輪日記」にある名前だ。南北は世界を「双蝶々」から借りて來たのだ。そこで、南方十次兵衛とかいふ役名が脚本の中

に生れて来た。名題も「當糰八幡祭」となつた。八幡といふのも、「双蝶々」の「八幡場」から來てゐるのである。

二六

なぜ南北は、甚兵衛だの、お照だのといふ名を附けたのか。なぜ「双蝶々」の世界などを借りて來たのか。甚兵衛が頼兵衛でも八兵衛でも一向に構はないわけだ。お照がお花にならうがお梅にならうが、劇的效果に何の影響もありはしない。何も苦しんで紛らほしい同じやうな役名を使つたのだらう。この時には薄弱ながら、たつた一つの理由があつた。

風鈴蕎麥屋の悪黨は、友達の駕籠屋へ、その娘を連れ込んで殺したのだつた。駕籠屋といふ事が世間の人に強い印象を残してゐた。南北は駕籠屋を使ひたかつた。駕籠といふと、まづ甚兵衛といふ名が響く。「双蝶々曲輪日記」の駕籠屋の甚兵衛が、見物の頭に浸み込んでゐるからである。「双蝶々」では、ほんのワキ役の親仁である甚兵衛といふ役を、こんな都合から南北は、重要な敵役として扱ふことに決めた。そこで世界は「双蝶々」を借りる事になつた。その餘の役は、みんな双蝶々の役名を附けられた。即ち、若旦那は山崎屋與五郎であり、その戀女の藝者は吾妻であり、實悪は倉岡丈左衛門である。「双蝶々」の世界は、單に駕籠屋を使ひたい爲から、引張り出されて來たのである。「双蝶々」

「書替へ」狂言といふのは、見物の頭に浸み込んでゐる慣習的の意識を利用して、或る事を暗示したい

必要から生れるものである。

今云つた「當糰八幡祭」がそれである。頗る貧弱ではあるが、これなどは「書替へ」狂言の存在を認めさせる理由の一つだ。

これは南北ではない、西澤一凰の話であるが、天保の或る年、例の仙石騒動が起つた。これを芝居に脚色したい。勿論當時の其筋と雖もそれは許可しない。そこで世界を「戀女房」から借りて來た。「戀女房染分手綱」には、鷺坂左内といふ役がある。仙石騒動の大立者は仙石左京である。左内と左京、似た名を利用し、鷺坂左内を立敵に使つて、その外の役には何れも「戀女房」の世界の役名を附けて、爰に「いせい繻幕湯」といふ仙石騒動の狂言が出來上つた。單に、左内といふ名を使ひたい爲から、世界は「戀女房」と定まつたのだ。前と同じ理由の例である。

文化の末頃、品川の女郎でありながら、日野中納言といふ公卿の息女だと名乗る、お琴といふ女が現はれて、裁判沙汰になつた珍事件があつた。それがひどく江戸の評判になつた。南北の熊鷹眼から、この事件が遁れる譯がない。忽ちこれを種に出來上つた狂言が、文化十四年三月に河原崎座の舞臺へかけられた。「櫻姫東文章」である。日野中納言の息女お琴を脚色したい爲に、南北は「清立櫻姫」の世界を借りて來た。お琴は、「吉田の少將惟房の息女櫻姫、後に千住の女郎風鈴お姫」といふ役名で發表された。

二七

目千兩といふ美貌の五代目半四郎が其役に扮して素晴らしい喝采を得た。品川の女郎事件は餘計江戸人の口にのほるやうになつた。

斯ういふ風な、三面記事などを脚色した場合可なり嚴重な當時の其筋の目をくゞりながら、しかも事實の筋と似通つた世界を選ぶ事に於て、書替へ狂言の必要だつた事も亦認められる。

入谷田圃に女殺しがあつた。南北はこれを早速脚色した。文化八年七月、市村座上演の「謎帯一寸徳兵衛」がそれだ。最近、左團次や延若が復活させた狂言だから、どなたも御存じであらう。御家人の大島團七、女房お梶、徳兵衛、お辰——則ち「夏祭の世界」を借りて來たのだ。世界を「夏祭」にした理由は、田圃の人殺し、といふ情景が、南北に「夏祭浪花鑑」の長町裏殺しを思ひ出させ、同時に見物にも聯想を助けさせる爲に過ぎない。

斯うした、際物を脚色する場合には、兎に角「書替へ」狂言にするのも尤もだとは思はれる。然し、大部分は際物ではないのだ。無意味の他の世界の役名を借りて來たものが多いのだからわからない。

併し、書替へ狂言の抑々の初めは、矢張り際物を脚色する必要から起つたのであらう。それが屢々行はれ続けると、見物の方にもその習慣が浸み込んでしまつて、新狂言でも、耳馴れない新しい役名よりは、馴染みの深い役名を舞臺で呼ばれる方が、心持ちがよくなつたのであらう。更に進んではそれで

無くては氣が濟まなくなつたのであらう。そして、しまひには、今度の何々の書替へ狂言には、何の役を、どういふ風な役柄に替へてあるかといふやうな、變態的な興味を持つやうになつたので、作者も圖に乗つて、必要でもない書替へ狂言を、無暗と發表するやうになつたのだ、と思はれる。さうとでも推測するより外に仕様はない。

役者の註文で、書替へを餘儀なくされる場合もあつたかは知れない。

たとへば、いつもの「梅の由兵衛」の長吉は女形のやる優しい役だが、あれを一つ、表は優形の丁稚にして、實は敵役といふ、前髪の悪黨をやつて見たいから、是非書いて下さい——今度は不破伴左衛門を盲目の白髪にしてやつて見たい、一つ書き直して下さい——といふ風に、役者から希望が出たとすると、作者は早速執筆しなければならぬ。そこで、梅由の書替へなり、不破名古屋の書替へなりの一篇が出来上る。化政度の役者にさういふ註文を出す人は随分あつたから、この順序で書替へ狂言の出來上る事も度々あつたらうと思はれる。尤も南北の全盛時代は、一人で江戸劇壇を脊負つて立つてゐる力を認められても居たから、役者の註文を無條件に呑み込んで、云ひなり次第の狂言を書く程でもなかつたらうが、役者の勢力も可なりに強かつた時代だから、南北の書替へ狂言の中にも、役者の註文で書いた物が屹度あるに違ひない。

南北の書替へ狂言を並べて見ると、流石にこの人らしい、面白い所や滑稽な點がいくらかも出てくる。南北は「双蝶々」の書替へ狂言を四つ書いてゐる。

「春商戀山崎」(文化五年一月、市村座)では、主人公が八幡屋與次兵衛といふ町人になつてゐる。原作の「双蝶々曲輪日記」では、濡髪長五郎、放駒長吉の二人が先づ中心人物であらうが、南北はさういふものは蹴散らかして、原作では吝嗇な親仁である與次兵衛といふ名を持つて来て、シテ役に据ゑてしまつた。原作に氣兼ねなんかせず、ビシ／＼と自由に名を附ける所が南北らしくつて面白い。それは、いくら原作では中心人物でも、南北が創作した新狂言の主人公には、長五郎といふ名も長吉といふ名も、ふさはしくなかつたのだ。見渡したところ、原作では親仁であつても、與次兵衛といふ名が一番適當だと思はれたので、南北はそれを主人公の名に極めてしまつたのだ。與次兵衛は今も町人であるが、以前は山崎與五郎の若黨、進藤徳次郎だ。與五郎が、お家の重寶放駒の香合を紛失し、詮議のため町家へ下つたので自分も共に町人になるといふ、お定まりの筋であるが、天明時代の盜賊だつた、進藤徳次郎といふ名前を、無造作に持つて来て附けた所が、いかにも南北の香氣さを發揮してゐて面白い。

與次兵衛の探してゐる香合を、盗んで持つてゐるのが、引窓與兵衛といふ泥坊である。原作の與兵衛は勿論立役で、例の「引窓の幕」で活躍するが、その引窓から思ひついたのであらう。それを肩書にし

た悪黨に變へてしまつた。この悪黨は南北から獨得の「悪」を與へられた役で、極端にその憎ツ振りを發揮して最後に與次兵衛に殺されて死んでしまふ。演じた役者は鼻の高い松本幸四郎である。幸四郎は、南北が好んで書く悪黨を、最も巧みに演じる事の出來た人だつた。引窓與兵衛の役は、幸四郎が生涯の傑作の一に數へられて、後世までも喧傳された。江戸の好劇家は原作の南與兵衛よりも、引窓與兵衛の方をよく知つてゐる。その名を利用して、圓朝が「三人與兵衛」といふ人情噺を書いた位である。

原作では大活躍の長五郎長吉も、この狂言では南北に虐待されてゐる。長五郎は金神長五郎といふ名で鳶の者にされ、長吉は鷲の長吉といふ名の船頭に變へられ、共に端役で僅かしか顔を出さない。その代りに、濡髪の肩書を持つた小靜といふ女伊達と、放駒の肩書を持つた四郎兵衛といふ俠客が出て活躍する。濡髪小靜に放駒四郎兵衛、肩書を利用して、斯ういふ有名な役を引き出す趣向も、南北らしい枯れたやり方だ。

「春商戀山崎」で安く扱はれた代りに「蝶鵜山崎踊」(文政二年七月、中村座)では、長五郎長吉は對等の立派な主人公になつてゐる。二人は元が菊池家の小姓といふので、最初に美しい侍ひ姿に深編笠の形で、鞘當のやうな立廻りを見せておいて、すぐに二人ともいなせな鳶の者の姿に變る。型の如く紛失の寶物の詮議で、二人は町人に身をやつしてゐる筋である。五幕の間、寶物の奪ひ合ひで、複雑極まる筋

が次から次へと開展してゆくが、結局二人は双兒とわかつて仇討になる。争ひを續けた二人が、後に和解になるのは、これを演じる團十郎菊五郎が、長年の喧嘩をこの時和解したのを、當て込んだものだ。南北は長五郎長吉を、侍ひに出世させてしまった。出世したのは一人ばかりではない、「双蝶々曲輪日記」の米屋の場で、ほんの端役に出る、野手の三に下駄の市といふ遊び人を、百姓野手の三作、中間下駄の市助といふ、重要な役に引き直して、團十郎菊五郎に勤めさせた。原作ではほんの名前が出るか出ないの端役でも、素晴らしい大役に化けて、目覚ましい働きをする事が、南北の書替へ狂言にはよくある。

原作では駕籠屋の親仁甚兵衛、この狂言でも、駕籠屋の親仁甚兵衛で、これが大事な狂言廻しの役になつてゐる。南北ばかりでなく、どの作者でも、双蝶々の世界を借りる時は、年の若い若くないの違ひはあるが、甚兵衛だけは必ず商賣を駕籠屋にしておく。つまり双蝶々の書替へ狂言には、駕籠屋が必ず出る譯だ。そして、駕籠屋甚兵衛内の場合は、その狂言中の愁嘆場と極つてゐる。しかも道具に、「引窓」をきつと使ふ。これは勿論原作のお名残である。たしかに「双蝶々曲輪日記」の書替へでございませといふ證據に、原作に義理を立て、その佛を残しておくのである。どんな作者でも、「双蝶々」を書替へる時は、必ず「引窓」の件だけ、趣向は種々と變へても残しておく。默阿彌の「雪駄直しの長五郎」は、矢張り

「双蝶々」の書替へだが、熊坂お長の隠れ家の場で、小手柄半次を殺す所に巧く引窓の使つてあるやうなものである。

斯ういふ義理立ては、書替へ狂言には原則として必ず守られてゐる。つまり一二ヶ所に、原作の形を留めておく事である。「夏祭」の書替へには、長町裏に似やたうな舞臺で人殺しがあり向うを屹度花車が通る。「權八小紫」の書替へには、鈴ヶ森が付き物で、「累」の書替へには、土橋の殺しが無くてはならぬやうなものだ。この義理立てが書替へ狂言の特徴で、また作者は、この義理立ての趣向を目新らしく使はうとして苦心したものである。

前に云つた「當糰八幡祭」になると、今度は長五郎長吉がひどい端役に廻り、駕籠屋の甚兵衛が中心の役になつてゐる。甚兵衛は悪黨ではあるが、主筋の山崎屋與五郎のため、金の工面に困つた末が、お照といふ娘を拐はかして殺し、持つてゐた金を盗んだが、お照は與五郎の許嫁であつた事がわかるので、悔悟して自殺するといふ大役、それも親仁ではない。若い役で、矢張り鼻の高い幸四郎が大當てに當てたものである。「春商戀山崎」では、引窓と肩書の附いた與兵衛も、この狂言では南與兵衛といふ侍ひの立役に戻つて、兄の南方十次兵衛の身替りに切腹する。原作では同一の人物である與兵衛と十次兵衛を、兄弟にした所などに、南北の巧い書替へ振りが見える。

「蝶々仔梅菊」(文政十一年一月、河原崎座)では、長五郎長吉を双子にして、三代目の菊五郎に早變りで勤めさせてゐる。長吉は引窓小僧といふ泥坊で、長五郎は濡髪と仇名の髪結ひである。長吉の盗んだ放駒の香合を、長五郎が頻りに詮議してゐる。二人の親の駕籠屋甚兵衛の懺悔で、萬事は解決するといつた筋である。「當糴八幡祭」で侍ひだつた南與兵衛は、この狂言では駕籠屋の手傳ひに成り下りいつも若旦那ときまつてゐる與五郎が、これでは八幡山與五郎といふ相撲になつてゐるのも面白い。

もう一つ面白い事がある。當り外さぬ南北の新作も、この狂言だけはひどい不入りだつた。それは芝居が面白くないのではなくて、開演中に菊五郎が、見物の一人と喧嘩したのが原因で人氣を失つてしまつたのだ。そこでこの狂言は撤回し、代りに本物の「双蝶々曲輪日記」を出した。その時は菊五郎が退座したので、この双蝶々が利いて、今度は大入りだつたといふ話である。てもなく書替へ狂言が原作に敗けた事になる。斯うなると南北も往生である。

南北は「權八小紫」の書替へ狂言を五つ書いてゐる。

第一は「靈驗會我籬」(文化六年四月、市村座)といふので、これは寧ろ原作といつてもいい。今日の鈴ヶ森は、この時初めて完成されたものだし、組板の長兵衛もこの狂言が初めてあり、そのほかの筋も大體この頃のと變りはない。第二の「浮世柄比翼稻妻」(文政六年三月、市村座)も、鈴ヶ森がそつくり有

り、組板の長兵衛も附いてゐるが、只、汐入堤の彌市といふ新しい幕が附加されて、今に残つた。第三の「松梅鶯會我」(文政五年一月、河原崎座)になると大分變つてくる。白井權八が鈴ヶ森で網乗り物を破つたり、小紫が早桶の中から出たりする上に、もう一幕、平井村の百姓權八といふ役が現はれて白井權八と名前の間違ひから葛藤が起るといふ筋が附いてゐる。おまけに累與右衛門まで混入されてあつて、頗る複雑した仕組みである。それが第四の「御國入會我中村」(文政八年一月、中村座)となると、一層混亂してくる。權八は笹野權三と双子の兄弟であることを知らずに、二人は始終寶物を枷に争つてゐる。權八が女の姿をして吉原へゆき、三浦屋の小紫に變るかと思へば、八重梅が男の姿をして權八の身替りになる。しまひには權三權八が双子と判つて、共力して親の敵を討つといふ筋である。第五の「獨道中五十三驛」(文政十一年六月、河原崎座)になると更に奇抜だ。權八はいきなり磔柱にかゝつたまゝで現はれる。それが、二十四刻たつて天水が咽喉に通つたといふので蘇生する所から始まるのだ。木鼠の次郎吉といふ泥坊が、女を殺して逃げようとするのを、磔柱の上から呼び留めて、ちよつと鈴ヶ森の當込みになり、後に次郎吉が切腹した血汐で、權八の金瘡が治し、寶物を取り得るといふ仕組みである。「双蝶々」の世界と「權八小紫」の世界とを比べて見ると、同じ書替へ狂言でも、そこに相違のある事がわかる。「双蝶々」の書替へは、只單に役名を借りてくるばかりで、その使ひ方は頗る自由であるが、

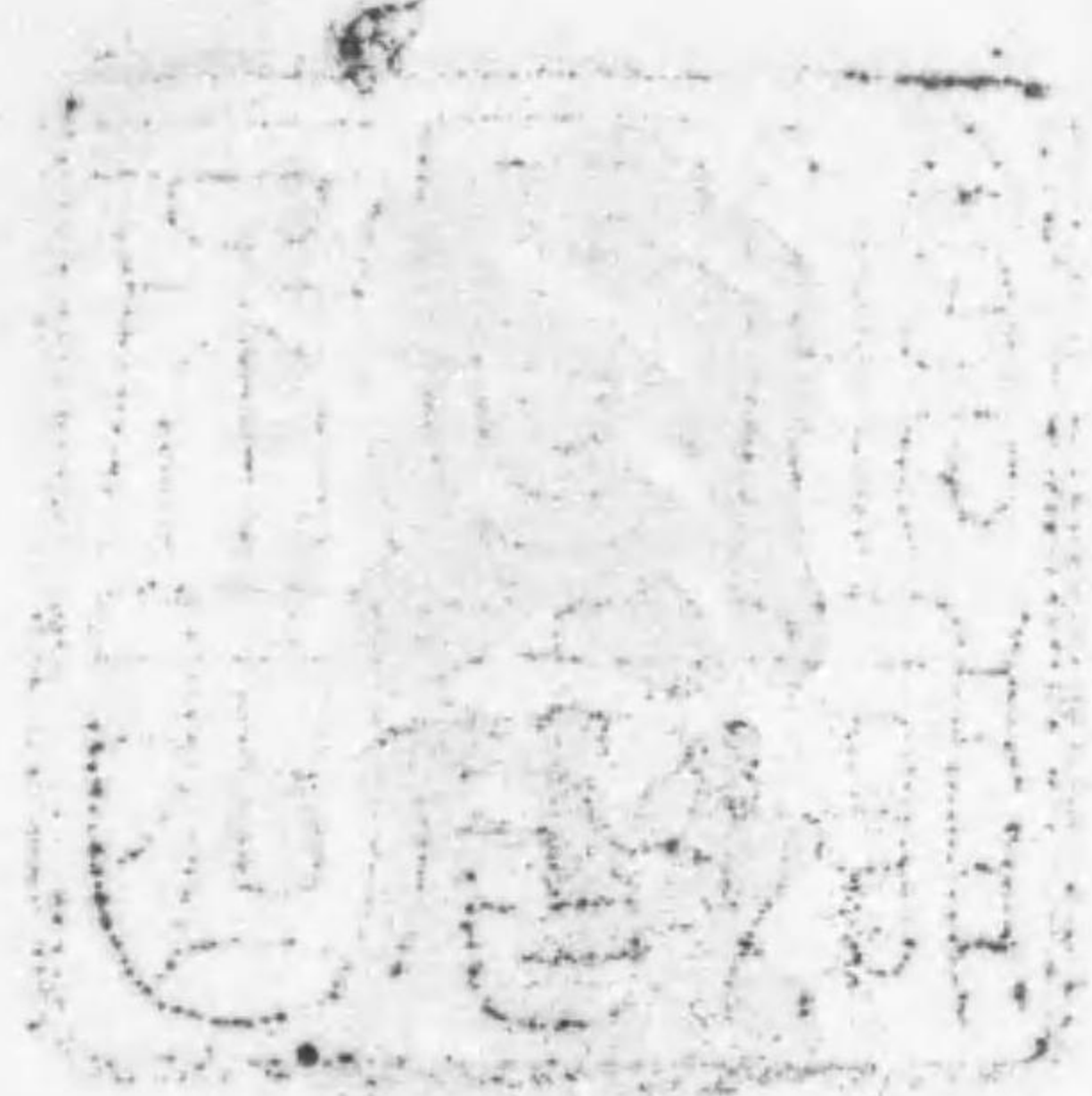
「權八小紫」の書替へは、幾らか窮屈になつてゐる。即ち、白井權八といふ主人公は、どの狂言でも同じ前髪の美しい侍ひで、人殺しの罪から世を狭める役になつてゐる。五つとも同じ事である。權八は「双蝶々」の書替へのやうに、髪結ひになつたり、鳶の者に化けたりしない。筋だけは變つても、役柄に變化はない。幡隨院長兵衛は、矢張りいつまで経つても同じく俠客である。小紫は、いつまで経つても、同じく吉原の遊女である。

大南北全集

つまり、「双蝶々」や「夏祭」の世界は、筋が中心で、役名は従であり、「權八小紫」の世界などは、役柄が中心で、そこから筋が生れてくるだけの相違である。前者が、歌舞伎道でいふ本當の「書替へ」狂言なので、後者は、所謂の改作である。奔放自在な、大膽な趣向を立てる鶴屋南北は、勿論本當の「書替へ」狂言の方が得意だつた。評判記は折々「ほんにこの狂言はよく書替へた事ぢや」と南北を褒めてゐる。南北の作の大部分は、書替へ狂言だといつていい。さうして、南北のすぐれた點は、要するにその書替へ振りの、巧みさにあるといつてもいい。

（渥美清太郎識——「早稻田文學」大正十三年十月號所載）

もどりばこせむのどひるま
疾禍脊御攝



辰橋脊御攝

第壹番目 三立目

諸羽社の場
しばらくの場
花山古御所の場



役名。碓井貞光。將軍太郎良門。伊豫太郎有信。袴垂保輔。髭黒ノ左大將、藤原道包。多田滿仲。河内冠者、頼信。右少辨、長連。猪熊入道雷雲。三郎勝俊實ハ樋爪九郎國連。常陸介正盛。壬生ノ五郎文。鬼住山平實ハ辻風さぶ六。頼信家來、成春。舍人、當作。常俊悱、藤若。仲光悱、宇佐次郎。加藤豊後次郎忠正。二ノ瀬近忠妹、深雪。仲光女房、關屋。ト部季武妹、照葉。豊田小文次妹、初瀬。常俊妹、鶴の前。蜘蛛の精靈實ハ將門娘、七綾姫。

本舞臺、三間の前、末塗りの廻廊。上下紅葉の立ち樹、一面に紅葉の吊り枝、上方御手洗、側に建て札。下の方立ち樹、後に振出し、真中に曳き捨てし御所車、すべて諸羽の社、神垣の模様よろしく、こゝに瀧夜叉、つかみ立て前髪、廣袖やつし、黒股引、手ツ甲、丸ぐけにて、袋入りの劍を持ち、立ち身。これを三郎勝俊、上下、剃り立て、衣裳大小にて、袴の股立ちを取り、右の劍を引合

ひ居る。上の方に女仕丁三人、いづれも着流しの上へ、白張の肩を引つ掛けたる形にて取巻き、下の方に捻切り奴四人、取巻き居る。この見得、幕のうち、バタ／＼。「アリヤ」の聲勇ましく、早神樂にて幕明く。

皆々どつこい。

女一 この神垣も髭黒の、御所と唱ふる諸羽の社。

女二 殊にお勅使様のお入りといひ

女三 斯くわたしが、尊敬いたす神の庭、怪しき出立の其をのこ。

勝俊 御主君頼光公、やまうの難を避けん爲、當神前に納め置く、源家重寶蜘蛛切りの一腰、盗んで駈け出す向う面、三郎勝俊の目にかゝつたる上からは

奴一 御劍渡して

奴四 繩にかゝれ。

瀧夜 へ、甘口にも並べたな。聊か望みあるゆゑに、向ひ町から遙々と、忍び今度の顔見世に、出世の蔓と物した劍、うぬらに渡していゝものか。邪魔だてせずと速かに、道おッ開いて通すまいか。

勝俊 小頼な一言、一腰渡せ。

瀧夜 その廣言を。

勝俊 渡せ。

瀧夜 そこ退け。

勝俊 エ、面倒な。ソレ。

ト早めたる大拍子になり、奴四人かゝる。瀧夜又ちよつと立廻り、奴等を一々殿りのける。これにて四人下座へ逃げこむ。勝俊、刀を抜いて切り附ける。兩人立廻り。瀧夜又、勝俊を當て、劍を持つて花道へ入る。勝俊、心付き、こなしあつて

おのれ曲者、いづくまでも。

ト早神樂にて、瀧夜又を追つて向うへ入る。かすめたる大拍子にて、三人思ひ入れ。

女一 ほんにマア、油断のならぬあの曲者。それはさうとお二人さん、あの髭黒の左大將様が、この岩倉に閉ぢ籠り、明神様の庭先へ、假の内裏と唱へ、しかも、今日は周の正月とやら、日もよいゆゑに位に昇るとは、ありやマア、謀叛とやらぢやないかいなア。

女二 知れた事いなア。日頃から我儘もの、京内の女子を捕へて来て、此やうなあられぬ形。(ト側にある竹熊手を取つて) 高砂の尉を見たやうな、箒、熊手の朝清めも、はつとするではござんせぬか。

女三 オ、また其やうな事言うて、お目玉を貰はぬやうにさんせ。そして、今日はまた頼信様の御参詣、お勅使様のお入りといひ、必ず粗相をせぬやうに、氣を附けなさんせいなア。

女一 それく、心附けるにしくはないなア。(ト向うを見て)アレく、向うへ見えるは、噂のある萬歳ちやござんせぬか。

女三 オ、ほんに、それでございます。早うこゝへ呼ばうぢやござんせぬか。

女二 それがようござんせうわいなア。

三人 オ、イく。

ト出の鳴り物になり、花道より宇佐次郎、着流し、蔓柏の紋附いたる素袍の上を着、萬歳烏帽子をかぶり、中啓を持ち、後より藤若、袖なし羽織、白股引、才若のこしらへ。淺黄頭巾の上へ懸け烏帽子を着て、鼓を持ち、出て來り、兩人直に本舞臺へ來て

宇佐 徳若に御萬歳とは、市村の芝居も榮えてまします。

藤若 御免の受けて才若と、ちよつと出船寶船。

宇佐 帆も十分に顔見世の、替らぬ未熟を皆様へ

藤若 ともく願ふ神の庭、愛敬を新玉の

宇佐 年立ちかへる朝より

藤若 寶の風がふきや町。

宇佐 誠にめでたう

兩人 さむらひける。

トこれより地へ取り、兩人所作あつて、「目出たけれ」と納まる。向うにて

當作 下がれく。

トてんつゝになり、花道より當作、白張の上ばかり、六尺棒を持ち出て來る。後より壬生の五郎又、襦袍、山岡頭巾、芋の脚絆をばき、花盗人の形、紅梅の枝へ壬生の面を附け、出て來る。後より深雪、やつしの形、手甲、脚絆、草鞋がけにて、梅の花を挿したる藁苞を脊負ひ、女菅笠を持ち出て、花道にて

當作 ヤイく、こいつらは、これ程下がれと云ふに聞き入れず通るが、コリヤヤイ、爰を何處だと思ふ。諸羽の社とばかり思つたら當てが違ふぞ。今日よりは髭黒公の御所だ。見苦しいさまをして、通すことはならぬぞ。

五郎 エ、やかましいわえ。かす舍人め。

當作 なんと。

六

五郎 今こそ壬生の五郎又といつて、かういう形になつてはるれど、以前は樋爪の九郎國連といふ大名だ。下がれ〜と追ひ下けられて、下がるものか。正盛どのに逢はぬうちは歸らぬ。構ふ事はない、通せ〜。

深雪 ハイ、私も、今日この處へ頼信様がお入りと承はりました、お目にかゝらねばならぬ事がござりました、やう〜と参りました者。お通しなされて下さりませ。

當作 イ、ヤ、ならぬ。お二人共に御大身、ナニ、わいらがやうな者に御用があるものだ。通る事はならぬ。きり〜下がれ〜。(ト立ちかゝる。)

五郎 イヤ、どうあつても、上がる〜。

深雪 さうぢや、上がりませう〜。

當作 エ、下がれといふに。下がれ〜。

ト三人せりあひながら、舞臺へ押して来る。女形三人立ちかゝり

三人 騒がしい。こりや何事ぢやぞいな。

當作 只今お鳥居先に相詰め居つたら、この二人の者が、見苦しいさまをして、たつて推参いたします

ゆゑ、通すことはならぬと、それゆゑの儀でございます。

女一 女は格別、見れば怪しき賤の男が

女二 様子は知らねど取分けて、清めに清むるこの神垣。

女三 お勅使様のお入りといひ、この場へは叶ふまいわいな。

當作 あれ聞いたか。お大名の妹御でさへ、あの通りに衛士のお役目。ましてわいらがやうな匹夫下賤、この處へは叶はない〜。サア〜、きり〜立ちやアがれ〜。

五郎 イ、ヤ、どうあつても、正盛どのに逢はにやアならねえ。

深雪 ソレ〜、頼信様に。

ト行きかゝる二人を、當作引退ける立廻り。五郎又、懷中より密書を落す。深雪、これを見て取上げ

正盛どのへ、袴垂

五郎 それを。(ト引つたくつて懷中する。)

深雪 怪しき名宛のその密書、そつとわたしが

ト五郎又へかゝる。當作、邪魔をする。五郎又、深雪が薬苞へ手を掛け、中より文を引出し

五郎 ドッコイ〜、それとは、勝手なとちあまめ。密書をわれが詮議すりやア、覽書の詮議はおれ

七

がするワ。

深雪 サ、それは (ト思ひ入れ。)

當作 艶書も密書も五分々々だ。双方ともに當作が

ト五郎又が懐より密書を引出す。深雪「ソレ」とかゝる。三人二通を奪ひ合ふ立廻り。よき所にて、
どろんになり、車の中より手を出して、二通を引ッたくる。

三人 ヤ、ヤ、ヤ、ヤ。(ト恠りする。)

五郎 イヤア。待て、折角手に入る今の艶書。

深雪 詮議の種の密書もろとも

當作 この車の物見から、例のどろんで引摺り込んだは

深雪 何は兎もあれ

三人 車の内を。

トかゝらうとする。三人の女形、車を圍ふ。此うち以前の奴四人出て来て、三人をさゝへる。ちよつ
と立廻り。

女三 お勅使様のこの御車。

女二 粗相があるとわたしら

女一 仰せを蒙むる役目の越度。

深雪 すりや、この御車が

宇佐 藤若 お勅使様とや。

五郎 お勅使でも、杓子でも大事な。

深雪 大切なる二封のあの文。

舍人 おれが出世の蔓にする。(ト女形三人を振切る。)

五郎 ドリヤ。

ト車へかゝる、内にて

雷雲 待て、え。

皆々 なんと。

雷雲 待ちやアがれ、え。

ト流しになり、車の中より猪熊入道雷雲、鯨にて出て来り、舞臺へ飛び下り、きつと見得。
皆々 ヤア、お勅使様と思ひの外

字佐 猪熊入道雷雲様。

舍人 今の二通の手紙といひ

五郎 何故あつて留めたのだ。

雷雲 へ、ん、古めかしくも留めて出でたる御不審を、申し開くや梅が香を、留めるも花の顔見世に、大入り木戸に客留める、敵役なら息の根を、留袖新造わかちなく、色ならござれ抱き留めて、吸ひ付け煙草の前留めに、現ぬかして通ふ神、めでたくは文の留め。瓢箪かしくは鯨の留め。扇の留めの要石、ゆるく大地をおッ留めた、鹿島の神の御前立ち、猪熊明神の御託宣と、ホ、敬つて白す。

奴四 どつこい。

五郎 おきやアがれ。おれにやア根ツから解らねえ。

雷雲 オ、誰だと思つたら、樋爪の九郎か。おれも返り新参ゆゑ、早く出たくつてならなんだが、桃栗三年くり藏も、これで三度目、出汐に困つてゐる所へ、互ひに争ふ密書と艶書。して、國連のその形は。

雷雲 聞いてくりやれ。人間は、七轉び八起きと云ふが、この國連は十度も轉んで、提灯屋とまで成り

下がり、闇を歩いた事はないが轉び通し、まだ一度も起きた事がない。併し出世の手蔓にもなるその密書、サア、早く返してくりやれ。

深雪 ハイ、私しも、どうぞそのお文を、お返しなされて下されませうならば、有り難うござりま

雷雲 オ、さう云ふはたしか、忠昌が妹だな。鶴の前と頼信が戀を取り持つて、だりむくつたといふ事だが、それにも懲りず、また文の使ひか。エ、こゝな情知りめ。

五助 コレ、入道、なんほおぬしが立役ぶつても、戀には疎き御面相、五百羅漢にある顔だけ。

雷雲 おきやアがれ。

女一 左様なら、あのお二人は、入道様のお近付き。

女二 樋爪の九郎國連様。

女三 二の瀬様の妹御、深雪さんで

三人 ござんしたかいなア。

當作 さうとは知らず、最前から、大きに無禮を致しました。眞平御免下さりませう。

トこの時向う揚幕にて

呼び 正盛参詣。

五郎 ナニ、正盛の参詣とや。

深雪 正盛様がお入りあつては、猶々今のお文。

五郎 おれも届ける大事の密書。

深雪 早うこの場で、入道どの。

ト取りにかゝる。雷雲振り切り

雷雲 ドツコイ、頼信めを罪に取つて落す大事の艶書、われに渡して詰るものか。

深雪 イ、ヤ、是非とも私しが。

ト深雪、五郎又、雷雲が懐へかゝる立廻り。この中へ當作交り、ごつちやになりて、深雪、一通を間

違へ取つて

さうぢや。

トつかくと花道へ行きかゝる。五郎又これを留める。また向うにて

呼び 正盛参詣。

ト三味線入りの大拍子になり、花道より正盛、撥鬘、上下衣裳にて出て来る。後より鬼住山平、菖蒲

革、羽織袴、足輕の拵へにて出て来る。後より關屋、襦袢衣裳にて、梅の枝に短冊を付け、三方に載せ持ち出る。後より照葉、襦袢にて、長柄の鉋子。次に初瀬、同じく襦袢にて、三方に土器を載せ持ちて、花道にて行きあふ。深雪、正盛と入れ替り、正盛「ソレ」と思ひ入れ。山平、深雪を片手に引据ゑ、きつとなる。

五郎 ヤア、いゝ所へ正盛どの。

雷雲 これはく、常陸之介どの、お早い御出仕、御苦勞千萬。

正盛 その挨拶は私事、今日お髭黒様より上使の其許、兼ねて御存じある如く、二心なきこの正盛、願ひも叶ふ今日のお目見得、出仕の路次に砂踏み立て、慮外はたらくこの女。

山平 引据ゑました、下郎めも、二合半から仕出した謀叛、一六勝負の菖蒲革、涙氣のない鬼住山平。

關屋 兄仲光が名代に、不束なる身も顧みず、今日青陽の御儀式に、お役目受けしこの關屋。

照葉 お許しうけて道すがら、お供いたせし私しは、ト部季武が妹 照葉。

初瀬 豊田小文次が妹の、初瀬も供に有り難い、列につらなる身の冥加、お嬉しう存じまする。

藤若 正盛様を始め

宇佐 何れも様には、まづくこれへ

三人 お通りあられませう。

正盛 山平参れ。

ト矢張り鳴り物にて、正盛先に、皆々舞臺へ來り、上の方に雷雲、正盛、關屋、その外よろしく住ふ。

五郎 イヤナニ、正盛どの、兼ねて貴殿と

正盛 ア、コレ。(ト思ひ入れ) 誰かと思つたら常俊が悴藤若、宇佐次郎を始め女ども、この體は。

藤若 私しことは、此たび髭黒公、この北岩倉へ御所をしつらひ、めでたき周の禮にならひ

宇佐 御儀式ありと承はり、藤若どののは才若、また拙者が萬歳も、髭黒公の齡ひ萬歳と、祝しまする

その印。

女一 私しども、朝清めやら、お焚き木を運びますやら、仕附けも致さぬ衛士の役。

女二 御垣守りの簀、子の日の松も楠を替へる。

女三 白馬の節會のその時は、大方口取りにも、出ますでござりませうわいなア。

藤若 父の申し附けとは云ひながら

宇佐 あられぬ體にてお目にかゝり、面目次第もござりませぬ。

正盛 なにサ、髭黒様へ御味方の拙者、心遣ひ必ず無用。

宇佐 然らば、髭黒公の御前

藤若 偏へによろしく

正盛 執成し致すでござらう。

藤若 左様なれば何れも様

宇佐 後ほどお目にかゝりませう。

ト管絃になり、藤若先に宇佐次郎、女仕丁三人、下座へ入る。

五郎 もう四文と出てもようござらう。ナニ、正盛どの、あの袴垂(ト云はうとする。)

關屋 ヤア。(ト思ひ入れ。)

正盛 ア、コレ、又しても、づばらくと、嗜み召され。

五郎 ア、まだ悪いのか。おきやアがれ。イヤナニ、ものでござる。鶴の前より頼信へ送る艶書、この女が持つてゐまするて。

關屋 すりや、鶴の前様の

照葉 アノ、艶書を。

初瀬 頼信様へお手渡しと、姿を變へて此ところへ。

當作 頼信様へお手渡しと、姿を變へて此ところへ。

初瀬（深雪を見て）ヤア、お前は忠正さんの妹御。
照葉 ほんに、深雪さんぢやござんせぬか。

深雪 ア、モシ。（ト思ひ入れ。）

雷雲 なんと、慥かに取り持ちであらうがな。

深雪 アイヤ、左様な事は

山平 ナニサ、隠しても、もう叶はない。ドレ、山平が

ト深雪を引附け、懐の艶書を引出す。此うち關屋立寄り、それをちよつと取つて

關屋 こりやこれ、慥かに。（ト思ひ入れ。）

敵 その艶書を

ト皆々立ちかゝる。山平を關屋突廻す。照葉、正盛を上へ引廻す。この時、正盛、懐より繫ぎ馬の旗

を落す。關屋、手早く取上げ、こなしあつて

關屋 こりや、相馬の白旗。

皆々 なんと。

正盛 それを

當作 謀叛の張本正盛、うぬを。
ト引取る拍子に、旗、さら〜と開く。關屋、引ッ張りで留める。此うち

トつか〜と行く。山平突廻す。

呼び 頼信參詣。

皆々 ナニ、頼信の參詣とや。

深雪 お入りあつては。（トつか〜と花道の方へ行きかゝる。）

當作 旗を證據に。

ト山平を振り切る。これにて山平、深雪おわへ立廻り。此うち當作、旗へ手をかける。正盛、抜討ち
に當作をほんど切る。この血汐の穢れにて、大ドロ〜になり、繫ぎ馬の脱け出し心にて黒雲立ち昇
る。此とき向うより頼信、若衆形、上下衣裳にて、烏臺を持ち、後より成春、上下衣裳、大小にて
路の臺を持ち、出て来る。深雪、山平、立廻りながら来るを、花道よき所にて、頼信、山平を捕へる。
これにて深雪、思ひ入れあつて、つか〜と舞臺へ立戻り、下の方へ控へる。正盛、旗を持ちたるま
ま、關屋と入れ替り、血刀を差出す。五郎又、手拭にて白刃を押へる。双方途端よろしく見得。矢張
リドロ〜、小太鼓の樂になる。

正盛 ハテ、心得ぬ。今下郎が血汐、この旗にかゝるとひとしく

雷雲 馬の形骸として、黒雲一むら立ち引り

五郎 空にありく現する七星。

頼信 かゝる例は、唐土西周の時に當つて、孟津牧野に星落ちて馬と化す。

山平 ムウ。(ト振り切つてかゝる。下へ引廻して引附ける。)

成春 穆王これを愛し、鞭打ちて西天に到り

關屋 祇園精舎に釋迦如來、遺經を聞かれしとかや。

正盛 まつた我が朝、景行天皇の御宇、蝦夷神馬を奉る。帝夢むらく、この馬昇殿して星と化す。

(ト山平、拂ばうとするを押し附ける。傳へ聞けども、見るは始めて。

關屋 疑ひもなき相馬の重寶。

正盛 七星これを守護なすものか。

頼信 奇異なるこの場の、振舞ぢやなア。

トどろく打上げ、雲消える。正盛、ちやつと旗を取つて懐中する。關屋とちよつと立廻り。此うち頼信、山平立廻りながら、成春附いて、つかくと舞臺へ來り、皆々よろしく入れ替り、顔見合せ、思ひ入れ。

雷雲 河内冠者頼信

正盛 何ゆゑ参詣召された。

頼信 ハツ、兄頼光はこの程所勞に冒され、引籠りをる時節を窺ひ、相馬の餘類良門を始め、盜賊の張本袴垂など申すもの、此處彼處に徘徊なすと聞き及び、御所の警護暇なく、存じの外なるこの遅参。兼ねて髭黒公に心を運ぶこの頼信、急ぎのお召しは、心許なう存じまする。

雷雲 イヤ、髭黒公の上使には、わんぱく入道雷雲。餘の儀でもない、頼信が降参は、紛失の神璽を、手に入れん爲の偽りならんとお疑ひ。誠隨身に相違なくば、家の重寶、蜘蛛切りの劍、まつた、乳練り合つてゐる、藤原の常俊が娘鶴の前を勧めて、差上げよとの仰せだワ。

頼信 こは改りたる御説。蜘蛛切り丸は當社に納めござれば、差上げんないと易けれど、鶴の前ことは某の計らひにも

正盛 ならない筈。かねく頼信、不義してをらうがな。

頼信 ヤア、過言なる正盛どの。してまた某、鶴の前と不義と申すには

正盛 證據の無い事云ふべきか。山平、その女に白狀させろ。

山平 心得ました。サア、女め。

成春（さよへて）待て、山平とやら、この女を何と致す。
山平 ハテ、知れた事、鶴の前と頼信が、取持ちをする女のゑ。
頼信（深雪を見て、思ひ入れあつて）ヤア、そちや深雪、如何いたして此ところへ。
成春 アイヤ、いよくそれに極まれば、人手は頼まぬ、成春が詮議する。サア、深雪どのとやら、し

かと取持ちめされたか。よもやさうではあるまいがな。（トこなし）。
關屋 イヤ、取持ちに相違ござりませぬ。
皆々 ヤ、なんと。

關屋 證據といふはこの關屋。只今手に入るこの艶書。
皆々 ヤア〜。
五郎 ちつと相違もござるまい。

雷雲 なんと慥かな證據であらうが。
正盛 サア、關屋、その艶書、この場に於て讀み上げい。
關屋 そのお詞までもなく、髭黒公お心懸け遊ばされし、姫君の不義の艶書、讀まないで何と致しませう。

照葉 ぢやというて、現在の

初瀬 御主君の一大事

關屋 サア、その大事のお主のこの艶書。（ト右の艶書を出し）讀まねばこの場が相済みませぬ。
兩人 それぢやというて。

ト立ちかゝるを制して

關屋 ハテマア、お控へなされませいなア。

正盛 サア、きり〜と讀み上げる。

關屋 ハツ。（ト一封を手早く開き）なにく〜「かねく〜叡山に忍びをり候處、今宵花山の古御所へ立越え、計略をめぐらし候に、右腹心の輩面會たまはるべく候」。

皆々 ヤア、。（ト顔見合せ、惘り思ひ入れ。五郎又、山平、頼信さ、へる）。

成春 變つた艶書のあの文體、ハテナア。

雷雲 そんなら、さつき懷で（ト五郎又と顔見合せ、間違つたといふ思ひ入れ）。

關屋 お望みなれば是非に及ばぬ、これなる文の名宛も讀みあけ、きつと詮議を致しませうか。
雷雲 イヤ、その詮議はなるまいがな。

頼信 そりやまた何ゆゑ。

雷雲 この艶書ゆゑ。

頼信 ヤア。(ト思ひ入れ。雷雲文を出し見せる。)

照葉 (立ちかゝり見て)「頼信様へ鶴の前」(ト讀む。皆々思ひ入れ。)

雷雲 なんと詮議はなるまいかな。

關屋 エ、それゆゑに、大事の密書も反故同然。

成春 詮議もならぬか。エ、口惜しい。

五郎 イヤ、また敵役にも、荒神様があればあるものだなア。

ト向う、バタ／＼にて、勝俊、幕明きの形、刀箱を持ち出て来て

勝俊 我が君これに御座ありしか。

頼信 三郎勝俊、あわたししい、何事ぢや。

勝俊 ハツ、寶藏に納めある蜘蛛切りの一腰、今朝盜賊入つて奪ひ取り、立退く所を支へしかども、

やつもしれ者、跡晦ましてかいくれに。

皆々 ヤア、。(ト恠り。頼信思ひ入れ。)

頼信 すりや、盜賊の爲に、大切な蜘蛛切りの一腰、奪ひ取られしとや。ホ、ホイ。

勝俊 申し譯は拙者が腹。(ト刀へ手をかける。)

照葉 (とめて)ア、イヤ、こりや、何ゆゑ切腹めさるのぢや。

勝俊 何ゆゑとは、お預りの劍を奪はれ、何面目に長らへん。

照葉 して、切腹あれば、紛失の御劍が出まするか。

勝俊 サアそれは

照葉 死は一旦にして易しとやら、必ずとも早まり給ふな、なア、我が君様。

頼信 勝俊が誤まりも、わが不覺ゆゑ。ハテ、是非に及ばぬ。

ト五郎又、山平、下の方にこれを見てゐて

五郎 山平。

山平 お聞きなされたか。蜘蛛切り丸の紛失、申し譯には拙者が腹。

五郎 ドツコイ、死は一旦にして易し、なア、我が君様。……呑み込ませせりふか。有り難い。なんと

正盛 どの、甘口な狂言ぢやアござらぬか。

正盛 いかにも國連のお云やる通り、コリヤ、頼信、劍欲しさの拵へ事だな。

頼信 イヤ、全く以て

雷雲 そんなら剣を差上げるか。

頼信 でも、紛失いたせば

正盛 すりや、鶴の前を差上げるか。

頼信 サア、それは

雷雲 但し剣か。

頼信 サア

正盛 姫が入内か。

頼信 サア

皆々 サアくくく

正盛 頼信返事は

皆々 ドゥ、どうだ。

忠正 (下向う揚幕にて) その御剣、加藤豊後の次郎忠正、差上げまするのでござりませう。

皆々 なんと。

侍ひ立たう。

ト時の太鼓、早舞ひになり、花道より忠正、上下衣裳にて、幕明きの袋入りの剣を持ち出る。跡より瀧夜叉、以前の形、大繩にかゝり、侍ひ二人、これを引立て出で、瀧夜叉を下の方へ引据ゑる。

頼信 次郎忠正、すりや紛失の蜘蛛切りの一腰、其方が手に入りしとや。

忠正 ハツ、今朝當社へ参詣の路次、面を隠せし怪しき奴、引ッ捉へて詮議なせば、剣の盗賊、何者に頼まれしと、拷問に掛けしところ、袴垂に頼まれしとやら、自身の白状。イザ、御剣は。

ト剣を渡す。頼信取りて、ちよつと改めて

頼信 エ、忝ない。頼信いまだ武運に盡きざる印。これも偏へに汝が働き。過分々々。

正盛 して、その剣の盗賊といふは。

忠正 即ちこれへ引き据ゑましてござります。

正盛 ムウ、すりや、彼れが剣の盗賊か。……ヤイ曲者、面をあける。(ト瀧夜叉思ひ入れ) すりや、いよいよわれが、アノ、袴垂に頼まれしとか。

山平 コレエ、わつばめ。袴垂といふは現在おれが

皆々 ヤ、なんと。

山平 イヤサ、うぬが悪事を、サア、うぬが悪事を此ところ、きりく、白状しろ。

五郎 どうだ。

瀧夜 エ、ひちつくどい。斯うなるからは何を隠さう。おれが生れは丹波の國、餓鬼の頃から小盗みが好きで、とう／＼親仁の勘當うけ、それから影をくらま小僧、夜盗かつさき家尻切り、今ぢやア盗人の張本、袴垂の手下となり、蜘蛛切り丸をひん盗む大事の役目。首尾よくやつたと思ひの外、見咎められた上からは、切るとも突くとも勝手次第。ナニ、川へ落した雁首同然、早く方を附けてもらひたい。

雷雲 イヤ、盗賊の成敗は追つてのこと。先づ差當るその劍。

頼信 雷雲どの、御前よろしう。

ト差出す。關屋取次ぎ、正盛取つて

正盛 イヤ。この劍は似せ物であらうがな。

皆々 ヤア。(ト思ひ入れ。)

忠正 この忠正が其座も去らず、奪ひ返せし一腰を、似せ物との疑ひは

頼信 何とも以て其意を得ぬ。正盛どの、御一言。して似せ物とは、何ぞ慥かな證據でもござるか。

正盛 サア、その證據は。

山平 證據といふはこの辻風。

立役 ナニ、辻風とは。

山平 サア、辻風とは、オ、あの盗賊、みんな此奴が拵へ事、この盗賊は偽り者だ。

關屋 その盗賊が偽りならば、最前手に入るこの密書。(ト出して)殊に名宛も袴垂、眞偽を糺して一々に、證據を致しませうか。

山平 サア、そりやア

忠正 これなる下部の詞の端々、どうやら怪しい。(ト思ひ入れ。)

正盛 何がどうした。

頼信 蜘蛛切りのその一腰、お納めあるや。

成春 但し密書の趣きで

關屋 きつと證據を致しませうか。

雷雲 密書を以て證據すりやア、この覺書を髭黒公へ差上げようか。

立役 サアそれは

敵役 サア

立役 サア

皆々 サアくくく

忠正 (密書を取つて見て) 然らば、これなる密書も

正盛 また此方の手に入りし

雷雲 これなる艶書も

頼信 この場に於て

關屋 双方ともに

忠正 元へ納めて。

雷雲 元へ納めて。
ト兩人一通を投げ捨てる。密書を五郎又、艶書を關屋取つて

頼信 この上は御兩所とも、御前よろしう。

正盛 執成しいたすでござらう。

雷雲 五郎 ヤレく、それで一方が方附いたが、まだ方附かぬは鶴の前。

忠正 見ればそほろな形をして、高位の前を恐れぬ振舞ひ。そちや何者ぢや。

正盛 イヤナニ、あの者は、身共が推舉いたした、樋爪の九郎といふ者だ。以後見知つてくりやれ。して

姫が事は。

忠正 鶴の前様にも、かねて御説を承はり、おツつけこれへ。

正盛 ムウ、流石は忠正、萬事の手つがひ感心いたした。頼信にはテモよい家來を持ちやつたなア。

頼信 これはく、お褒めのお詞、面目を施しまする。

呼び 玉杯の刻限。

雷雲 ナニ、玉杯の刻限とや。

正盛 然らば御勅使。

雷雲 正盛、頼信。

皆々 先づ、入らせられませう。

ト管絃になり、雷雲先きに正盛、其外皆々入る。跡に頼信、忠正、瀧夜又あたりへ思ひ入れあつて、瀧夜又が繩を切る。合ひ方。

忠正 わが君様。

頼信 次郎忠正。

瀧夜 まんまと首尾よく

忠正

謀計について謀計を行ふと、髭黒左大將、正しく神璽の御寶を奪ひ、所持なす上からは、ナニ蜘蛛切りを望まんや。察するところ正盛が計らひ、残亡の輩を集める巧みと見えた。それゆゑに似せ物を授けて、手段を挫く、我が計らひ。

三〇

瀧夜

誠の劍は神前に、深く秘め置きましたれば、ちつともお氣遣ひはござりませぬ。

頼信

髭黒に陥らふも、何卒故なく神璽の御寶、奪ひ返さんわが計らひ。必ずともに沙汰ばし致すな。

ト下座より宇佐次郎、藤若出て来り

宇佐

わが君様、お入りあられましたか。

藤若

頼信様にはお早い御出仕、御苦勞さまに存じまする。

頼信

オ、これは常俊どの、御次男藤若どの、宇佐次郎にも今日の役目、さぞかし大儀々々。

宇佐

お詞身に餘り、有り難うごんじまする。

ト向うより侍ひ、菖蒲草にて足早に出て来り、直ぐに舞臺へ来て

侍ひ

ハツ、忠正様へ申し上げまする。

忠正

見れば鶴の前様を警固の役人、あわたましい、何事ぢや。

侍ひ

姫君御社參の路次、一條戻り橋に於て、異形の變怪夥しく現はれ、乗り物もろ共いづくへか、行方

かいくれ相知れませぬ。(ト皆々思ひ入れ。)

忠正

ヤ、姫君の乗物もろとも。

皆々 その行くへの知れぬとや。

忠正 さては此ごろ聞き及ぶ、變化の所爲なるか、ムウ。(ト思ひ入れ。)

頼信

心得がたき妖怪の振舞ひ。何事も某しが思ふ仔細あれば、其方は當社の北門に猶も相詰め、若し怪しき事あらば、早速に告げ知らせよ。

侍ひ

心得ました。(トつかくと下座へ入る。)

頼信

兼ねて某し察するところ、髭黒には鶴の前を入内させん爲、これなる藤若を、擒になさん手段も知れず。何はともあれ宇佐次郎には、藤若を同道いたし、これより丹波の笹山へ立越えてよからう。

宇佐

すりや、拙者は此場より

忠正

いかさま此儀、然るべう存じまする。

瀧夜

然らば次郎信兼どの、急ぎ用意いたされよ。

藤若

左様ならば頼信様。

頼信

信兼萬事心附けい。

宇佐 ハツ。

ト此うち下の松の木に、忍び一人窺ふ。頼信、前の御手洗にて見附け、手裏剣を打つ。これにて忍び
飛びおり

トかゝるを見事にボンと切つて捨てる。

宇佐 藤若

忠正 我が君様。

頼信 兩人 参れ。

四人 動くな。

ト取り巻く。宇佐次郎、藤若を圍ひ

藤若 こは心得ぬこの狼藉、何ゆるあつてわれ々を

宇佐 動くな遣らぬとぬかすのだ。

奴一 何ゆるとは、常俊が一子藤若、仲光が忝宇佐次郎。

奴二 引ッ捕へて人質と、正盛様のお指圖うけ

奴三 討手といふは大層だが、この袂へ入れて土産にする。

奴四 ほんよ、小僧よ、ヤレ、いゝ子だ。きりく腕を

四人 廻しやアがれ。

宇佐 やかましいワ、がらくためら。今までの市川と、違つて今度の顔見世は、世に成田屋の師匠も初

の座頭株、今年は弟子も改めて、初荒事の手始めに、生けッ首を抜かれぬうち、盛砂もつて通し

やアがれ、エ、。

奴一 エ、面倒な。捻り殺せ。

三人 合點だ。

トかゝる立廻り。大太鼓入りの鳴り物になり、よろしくあつて、宇佐次郎、奴を御所車のわきへ叩き
つけ、長柄のうちへ抛り込む。

宇佐 藤若どのには、イザ、これへ。(ト藤若を車の内へ入れ、奴を牛にして)サア弱蟲めら、牛の力はあ
るまいが、四人一緒に車牛、おれに曳かれて、うしやアがれ。

ト大太鼓のさらしになり、宇佐次郎、車を曳き、向うへ入る。あとの鐘になつて、山平以前の形、
袱紗包みの一卷を持ち出で、あたりへ思ひ入れ。

山平 正盛どの、計らひにて、此さぶ六が姿を變へて、今日こゝに忍び込んだも、お頭の指圖によつてさゝがにこのこの一巻、首尾よく手に入り、忝けない。(ト懐中して思ひ入れあつて)殊に頭の袴垂のもの、この諸羽の社へ、今日忍び込まれる筈だが、少つとも早く逢ひたいものだが。
ト正盛この時出かゝりて

正盛 辻風。

小平 正盛様。

正盛 コリヤ。(ト時の鐘、あたりへ思ひ入れ。)袴垂より國連が持參の文通、今宵花山の古御所へ、會合なすとの密書の趣き。して、彼の一巻は。

山平 氣遣ひ召さるな。奪ひ取つて即ちこゝに。

ト一巻を見せる。山おろしになり、向うより盜賊二人、黒四天の形にて、鉄打の乗物を荒繩にてからげ、一散に鼻き出て、直ぐに舞臺へ來ておるす。

これは。(ト思ひ入れ。)

盜一 仰せに隨ひ、道に待ちうけ、鶴の前が乗物ぐるめ
兩人 引ッ浚つて歸りました。

正盛 出來したく。直ぐさまこれより奥殿へ。

兩人 心得ました。

ト下座へ昇いで入る。正盛うなづき、思ひ入れあつて

正盛 よい〜。……この上は人知れず、忍ばせ置きたる

ト下の方へ磔を打つ。時の鐘になり、黒四天の手下兩人、誂への經櫃を荷ひ、下の方より出て

手一 お指圖の通り、早速叡山へ忍び込み

手二 幸ひこれなる經櫃へ。

山平 すりや、此うちに袴垂。

正盛 コリヤ。……この上は花山の御所へ。

山平 彼の地へ赴きこの一巻、頭へ手渡し致すのでござらう。

正盛 辻風、急げ。

山平 心得ました。

ト一巻を懐中し、手下、經櫃をかつぎ上げようとする。この時下座より五郎又、袋入りの劍を持ち出る。あとより忠正、股立ちにて、これを追ひ出て來り、よろしく引据ゑる。

五郎 これこそ誠の蜘蛛切り丸、われに渡して詰るものか。

忠正 小癩な。身の目にかゝるその劍、きりく渡せ。(ト立廻り。)

正盛 すりや、誠の蜘蛛切り丸とや。

五郎 それを。(トかゝるを立廻り。)

山平 何はともあれ、古御所へ。

正盛 辻風、急げ。

忠正 怪しい經櫃、中改めて。

山平 なんと。

正盛 イ、ヤ、經櫃よりはその一腰。

ト忠正が持ちたる劍へかゝる立廻り。山平振切り、この時瀧夜又、この中へ入り、正盛をさゝへる。

これにて忠正、經櫃を押へる。

瀧夜 その經櫃こそ詮議もの。次郎忠正、改め召されい。

正盛 さてこそ劍の盜賊なりと、この正盛を欺きしわれ始め、慮外ひろくと手は見せぬぞ。

ト立廻りに正盛、懐中より旗を落す。忠正、山平が懐より一卷を出す。

忠正 こりやコレ、さゝがにの一卷。

瀧夜 礎か相馬の

ト山平手早く一卷を取るとて落す。どろくにて蜘蛛一杯下り、右の旗を虚空へ巻きあげる。

忠正 ハテ心得ぬ、今の振舞ひ。

瀧夜 俄かに黒雲覆ひ下がり、旗の行くへを失ひしは。

正盛 陰陽と象りし相馬の重器、一つに寄するその時は、不思議ありと聞きつるが、ハテ、争はれぬ。

忠正 何はともあれ、一卷を。

トかゝる。山平立廻り。五郎又心付き

五郎 その蜘蛛切りを。

ト忠正にかゝる。山平と手下、經櫃を昇きあげる。忠正、五郎又を突き廻す。正盛、盜賊を振拂ふ。

此うち手下、經櫃をかき、花道へかゝる。

忠正 一卷諸ともあの經櫃。

トきつとなる。この時深雪出て来り、この中へ入りて、正盛をさゝへる。此うち花道の人數は向へ入る。

南無三、あとを慕つて。(ト劍を腰へ差し、花道へ行きかゝる。)

深雪 少つとも早う。

忠正 合點だ。

ト早めたる大拍子になりて、忠正向うへ入る。舞臺は五郎又、盜賊立廻り、正盛刀を抜きかゝるを、深雪きつととめる。この見得よろしく、チヨン〜〜〜、大拍子のつなぎにて、直ぐにこの幕を引返す。

幕

本舞臺一面の岩組、これに三間一ぱいの大御簾をおろし、總て北岩倉髭黒山莊の體。渡り拍子にて幕明く。ト直ぐに向うより奴八人、一對黒雲に鬼の面の捻ぢきり、虎斑の帯にて、誂への鎗を持ち、アリヤノの聲勇ましく、振つて出で來たり、ヨシヤサと花道に留り

奴一 代々替らぬ天正月、一番烏も悦んで、渡り拍子の幕明きに、當り前なる一對の
奴二 奴が鎗ふる下馬先の、鯁を肴にいしごきで、ぐつと一ぱいあほツきり、捻切り端よりの一座は八人。

奴三 大座平日式日も、寒の師走もかん負けない、負けない氣丈の寒晒し。

奴四 晒しの手拭頼冠り、お供歸りを待ち兼ねて、ひやかす切り見世そり節。
奴五 武士とはいへど二合半、ぶん抜きくぎ抜き中抜きの、草履もしんの習ひあり。

奴六 ありの思ひも天道の、お引合せを看板に、べつたり附けたねれけもの。

奴七 ねれたら持てこい、かい餅も、するがねい、内立關、日向でやらかせ造り髭。

奴八 お髭の塵取り御機嫌取り、名を取り髪が新らしう、今日を晴れなる伊達道具。

奴一 勇みに勇んで
皆々 振り込むべいか。

トまた渡り拍子になり。皆々本舞臺へ來り、ヨイヤサと居並ぶ。この時下座より雷雲出で來り

雷雲 これは何れもつツ揃つて、いつも烏毛といふ所を、誂への伊達道具、さぞ小道具は小言を言つた事であらう。併し見事な一對立ち、御苦勞でござります。

ト時の太鼓になり、向うより仕丁四人、かす烏帽子、白張の露を取り、弓矢を番ひ、あとしきりに出て來ると、多田の満仲、壺折指貫の形にて取り圍まれ、頼信、關屋、成春、勝俊、以前の形にて出て來る。
ト又仕丁四人、同じく弓矢を番ひ出る。後より右少辨長連、冠裝束、公卿の形にて笏を取り、この人數、ぢり〜と本舞臺へ來り

仕丁 動くな。

雷雲 これは築島右少辨長連卿

奴 只今参内されましたか。

皆々 満仲 さてこそ、髭黒左大將のこの山莊、内裏にひとしく、参内などと唱ふるは、すりや、道包卿には噂に違はず。

頼信 いかにも父の仰せに任せ、虚實を窺ひ見るところ

關屋 髭黒様には、勿體なくも天下を望む

成春 勝俊 御企て、ごさりまする。(ト満仲思ひ入れ。)

長連 それゆる禁庭守護の満仲。うまい話して乗せる氣で、見えたを幸ひ取り圍ませたは、この長連がそちへの寸志。

満仲 ヤア、長連卿のお志し、満仲少しも祝着ならず。仄かに取沙汰聞きしゆる、便宜に隨ひ道を述べ、髭黒公のお心を、正路に返し申さん爲、わざと來りし多田の満仲、先づ何はともあれ道包卿へ。

ト立ちあがる。奥にて

正盛 満仲お待ちやれ、正盛それにて面談いたさう。

ト管絃になり、正盛、三方へ大杯を乗せ、長柄の銚子を取り、出て來る。

満仲 ヤ、正盛どのにもこの所に。

正盛 貴殿髭黒左大將へ、諫めを入れんとお云やれど、いつかな以て翻がへらぬ、道包卿の御企て。それゆゑわれも玉杯を、今捧ぐるの其折から、貴殿も堅氣をお云やらずと、これより時の宜しき

隨ひ召さるがマア當世、頼信ともくすゝめ召され。

頼信 イヤ、父はともあれ、この頼信、なとか惡意に隨ひ申さん。

關屋 御父君にも源家の棟梁、何とてお心惑はせられん。

満仲 關屋が申すまでもなく、禁庭守護の役目を蒙り、その朝敵に剩さへ、なとか一味をなすべきや。

成春 頼光公へもこの趣き

勝俊 言上いたして

満仲 直ぐさま討手。

長連 すりや、お味方なさぬのみならず

正盛 直ぐに満仲魁けして

雷雲 髭黒様の

皆々 討手とな。

満仲 この上猶豫は禁庭へ恐れ。頼信、参れ。

頼信 ハツ。(ト立ちあがる。)

正盛 ソレ、取り圍め。

皆々 動くな。

トまた仕丁矢倉にて取り巻く。五人思ひ入れ。この時御簾の内に
髭黒「大江山いく野の道の便りぞと、天の橋立文見つるかな。」

三人 あの聲は

長連 髭黒公。

正盛 尾籠な振舞ひ。

皆々 こ動くな。

ト大薩摩淨瑠璃になる。

「まだ夜の内に有明の、月の都の岩倉に、すでに九五の位山、鬼が城ともいふやらん。」

ト淨瑠璃切れると、御簾のうちにて

侍臣 出御。

ト早下り葉になり、正面の御簾を巻きあげると、真中に髭黒の大將、酒呑童子のこしらへにて、高き
岩の上に褥を敷き、枕に凭れ、團扇を持つてゐる。上の方、物部平太有國、赤ッ面、上下衣裳、股立ちに

て、鶴の前を引き附ける。鶴の前、廣振り帯附きの形、下げ髪にて、髭黒に恐れゐる。荒川太郎景
道、同じく赤ッ面、上下衣裳、股立ちにて、大俎を引ッ抱へゐる。左右に照葉、初瀬、女仕丁三人、以
前の形にて控へる。この見得よろしく、皆々これを見て

三人 ヤ、左大將の

皆々 この體は。(ト不思議の思ひ入れ)

有國 君の御前だ。満仲はじめ

景道 頼信べんなご、そこ

兩人 下がれやい。

鶴の ナニ、頼信様とや。(ト思ひ入れ。頼信これを制す。)

髭黒 われ兼ねて大位を知らんの望みも、今一陽の時來つて、この山莊を内裏と定め、自から登る位る
山も、たゞ口惜しきはこれまでに、人臣の身であつた髭黒。それゆゑ今日の天正月、即ち今日元
旦に、誕生なせし心とし、乳味の替りは常々から、望める酒に基きて、酒呑童子と我が名を呼び、
乗位にうつれば、天道へ、何か恐るゝ事あらじと、思ひ附いたるこの出立ち。これより直ぐに杯
をめぐらし、装束改め髭黒王、皆萬歳を唱へろやい。

正盛 誠に君の御代長久

正盛 ハテサテ、しぶとい
長連 この上は君

有國 いかゞ計らひ
景道 五人 ませうな。

髭黒 鷹、天下を知るの始め、詞をもどく不敵のやつら、その儘に差置かれぬ。罰を加へて威勢の程を

見知らせん。ナニ、正盛、わが愛臣たる、伊豫の太郎を呼び出せ。

正盛 ハッ。(ト花道の角へ來り) それに控へし伊豫の太郎有信、童子のお召し、急いでこれへ。

有信 畏つてござります。

ト大小の合ひ方になり、向うより有信、赤ッ面、上下衣裳にて出て來り、花道に留り

お召しに隨ひ、また今年、しやツ面見せも有り難い、馴染の芝居へ中一年、橋 薫る揚幕を、お

受けの聲と諸共に、伊豫の太郎有信め、これまで罷り出ましてござります。

髭黒 呼び出せしは、鶴の前、靡かぬのみか頼信と、不義ひろいだ科捨て置かれず。幸ひ杯めぐらす
折柄、それにて姫を調味なせ。また満仲はじめ二人のやつら、わが詞を背くの罪、景道、有國、
常陸介、彼れらが首をぶち落せ。

三人 すりや、あなた方を

成春 この所で

有信 いかさま、仰せを背くの罪ある者、忽せの沙汰ござつては、君の御威勢輕きに似たり。恐れなが
ら御詫の趣き、然るべう存じます。

髭黒 然らば急ぎ用意いたせ。

有信 委細承知仕つりましてござる。

有國 畏つてござります。

ト三保になり、有信、股立ちを取り、上下の肌を脱ぎて、見事に舞臺へふつて來る。此うち有國、景
道、正盛、身ごしらへして真中へ大俎を直し、頼信、鶴の前を引据ふ、上の方に有國、満仲がうし
る、下の方に景道、頼信がうしろ、次に正盛、關屋のうしろ、その次に女形立役、これを奴八人、仕丁
取り圍み、すつと上の方の岩に髭黒、長連、雷雲、左右に隨ひ、此うち始終、アリヤ／＼のかけ聲よ
ろしく住ふ。

敵役 皆々 どころえ。

有信 いづれも用意

四人 仕つてござりまする。

髭黒 われは今より雲の上、位に座する祝儀の式。女が肉を肴とし、杯のめぐらさん。長連、杯。

長連 ハ、ア。(ト長連、正盛の持つて出た大杯を髭黒に渡す。)

髭黒 猪の熊入道、酌をとれ。

雷雲 畏つてござりまする。(ト長柄の銚子を取りあげる。)

満仲 天に風雨の憂ひあり

成春 月にも蝕の影くらき

頼信 酒呑童子の邪まに

關屋 われくのみか、姫君まで

照乘 御いたはしき

初瀬 この場の仕儀。

或春 味きない世の

勝俊 立役 有様ぢやなア。

皆々 髭黒 時刻がうつる、急いで用意。

四人 ハア、。

有信 今、酒呑童子の嚴命を、御最貞頭に蒙つて、科極まりし鶴の前。

有國 違背の罪ある多田の満仲。

景道 不義ひろいだる冠者頼信。

正盛 それに随ふ仲光が女房。

有信 いで、手料理と出かけべい。(ト大庖丁を持つ。)

正盛 今が最期だ。

景道 四人 観念しろ、エ、。

髭黒 (酒を受けもち) ドリヤ、眺めようかなア。

ト大杯にて香まうとする。有信は庖丁、三人は白刃を振りあげる。トこの時向う揚幕にて

貞光 しばらく。

皆々 イヤア、。

髭黒 待て、今受け持ちし玉杯に

有信 罪ある四人を目の下にと、振りあけし其折から、どうやら聞いた聲音にて、暫くと云つたぞよ。

皆々 イヤア、。

有國 物馴れぬ赤ッ面は、直ぐさま顔へが參つたやうだ。今の聲は何方でござつた。

景道 慥か筋向うの裏の方から、聞えたやうでござつたぞ

髭黒 吉例と言ひながら、耳を貫く今の一聲。

有信 しばらくと聲をかけたは

皆々 何やつだ、エ、。

貞光 しばらく。

皆々 イヤサ

有信 しばらくとは。

貞光 しばらく〜。

かゝる所へ、碓井の荒重貞光は

ト大小人寄せになり、揚幕より貞光、お株の形にて勇ましく出て來り、花道いつもの所にてゐる。

今日ぞ萬里の大鵬にも、劣らぬ海老を一はねに、三升の紋の勢ひは、目覺しかりける次第なり。

皆々 どこえ。

髭黒 今この儀式と違背のやつばら、罪を糺さんその所へ

有信 しばらくと聲をかけ、のめづりつん出たわッばしめ。そも先つうぬは

皆々 何やつだ、エ、。

有信 イヤサ

皆々 何やつだ、エ、。

トこゝにて貞光(團十郎)自作のつらねあつて、「ほゝ敬つて白す」と納まる。

皆々 どこえ。

髭黒 待て〜。いつもの暫くより、一際勝るその勢ひ。よく〜見れば馴染のわッばし。今年はお江

戸八百八町、お許しうけた座頭株、七代目の貞光だな。

有信 斯うあらうとは思つて居たれど、灸もたび〜据ゑる日には、あんまり熱くもないものゆゑ、暫くも續けて出逢へば、さう怖くもあるまいと、思ひの外に今度の暫く、道理こそ今までより、一倍と肝にこたへた。

有國 おてまへさへそれだもの、われくは猶以て
景道 道理で齒の根が合ひましなんだ。

正盛 こりや、如何いたしたらようござらう。

髭黒 如何と申して鷹が目障り、早くあつちへ、退けいく。

有信 ハア、サア、何れも覺悟さつしやい。引き立てやうござらうぞ。

皆々 イヤア、。

有信 彼方に座頭の株があれば、此方に引き立ての株もござらう。長連卿、出なさい。

長連 コレサく、とんだことを言つたものだ。如何にも築地の親父から、引き立ての株は譲られたが、

それは鯨の折のこと。今では雲の上人なれば、引き立ての儀は御免々々。差詰め入道、行きやれ行きやれ。

雷雲 これは又、いらざるお指圖。愚僧も度々手懲りを致し

有國 ハテ、そんな事をお云やらずと、行きやれサ。

景道 あたま役だ、行かつしやいな。

雷雲 同じやうに貴殿たちまで……………よいく、仕方がござらぬ。童子様の御前といひ、間違つて

成田屋を追ひ出されると、度胸を据ゑて、引ッ立て、お目に掛けようか。

皆々 お手柄の程が、見たいく。

雷雲 ドリヤくく。(ト花道へ來り) わッばめ、立ちやいな。

貞光 ナニ、われが引ッ立ての血祭り坊主か。名は何と云ふつく入だ。

雷雲 おれが名か。忝けなくも、尊くも、酒呑童子のお側去らず。猪熊入道雷雲だワ。

貞光 なんだ、鱒に湯豆腐ふんだんだ……………意地の穢ない坊主めだ。さうしてうぬは、引ッ立てにう

せたか。

雷雲 知れた事だワ、きりく立てやい。……………と云ふやつも古うござりますねえ。モシ親方、御覽

じませ。また今年も鯨でござります。少とつこいぢやアござりませぬか。でもマア、あなたは

取り分けて、おめでたい顔見世ゆゑ、私も悦び勇んで、木挽町からお供いたして参りましたが、

モシそのあなた、ちつとばかりお願いがござりますて。

貞光 大分上すべりのした坊主だが、さうしてわれが願ひとは。

雷雲 サア、外の事でもござりませぬが、あすこにゐる悪人めらが、わたしを無理にお前さんの、引ッ立
てに寄越して、かぶらせようといふ皮肉でござりまする。この皮肉に乗るが如何にも残念。そこ

であなたへ甘え申して、爰を少つとそちらの方へ、お寄りなすつて下さると、あいつらも鼻が明き、わたしも音羽屋のおぢいさんに、褒められるといふものサ。弟子一人お助けと思召して、どうぞ聞き分けておくんなさりませう。

貞光 ヤレ、長い事をぬかすやつだ。よいワ。それ程に云ふ事だから、如何にもめでたい顔見世ゆゑ、祝儀心にこの所を

雷雲 アイ、

貞光 道ある方へちつとばかり

雷雲 アイ、

貞光 立つてやらうと言ひたいが、いやだ。洒落やアがるナ、けづり廻しめ。うぬ、巫山戯ると橋本町の仲間へ入れて、おツかぶせの五百羅漢、呑代の建立に出すぞ。早く引つこめ。

雷雲 ところを、おれが

貞光 なくならないか。

雷雲 ムウ、そんならば……呑代建立。(ト五百羅漢のやうに言ひながら舞臺へ来る。)

皆々 エ、おかつしやいな。

奴一 サア、どうでお櫃は廻るゆゑ、潔きよくやらかませう。

奴二 ソレ、とても通れッこはござりますまい。皆一網にぶツかけませう。

六人 それがよい。

八人 アリヤ、(ト花道へ来り)

奴一 素丁稚め、そこ

八人 立てやい。

貞光 今度は道者の江戸見物を見るやうに、大勢連れでうしやアがつたか。うぬらにも名があらう。一

一 戒名、そこでほざけ。

奴一 こいつは大分安くなるな。事もおろかやわれは、酒呑童子のお氣に入り、鬼瓦の鐵平といふ

やつこらさ。

奴二 次はその名も、鬼齒朶唾平。

奴二 鬼念佛平。

奴四 鬼一口平。

奴五 鬼木立平。

奴六 鬼蓮毬平。

奴七 鬼打豆平。

奴八 さてどん尻は、鬼殺呑平といふ二合半、丁稚めそこを
八人 立てやい。

貞光 いづれも様、あんな押し強い事を申します。立つ事はいやだ。うぬら、なくなれ。なくなりや
うが遅いと、睨み殺すぞ。

八人 さうぬかしやア(ト皆々手を振りあげる。)

貞光 どうしたと。

八人 構はぬ。

長連 こいつはよい。

正盛 コレサ。(ト此うち八人、捨ぜりふを言ひながら舞臺へ来る。)

皆々 エ、らつちもない。

有信 最前から座頭ゆゑと容赦すれば、酒呑童子の御前をも憚らず、さまざまとの慮外、緩怠。この
上は有信が、ドレ、引き立て、くれべいか。

貞光 イヤモウ、来るには及ばない。爰にちやア素袍の袖や太刀の鐙が、あなた方へ障るも無禮だ。

いかにも爰を立つてやらう。併しおれが立つが最期、後と云つちやア一寸も寄らない。たつた今、
そこへ行くぞ。

皆々 イヤア、。

貞光 はつぼうの用意しろ、エ、。

皆々 イヤア、。

貞光 むめうゑんを買つておけ。

皆々 イヤア、。

貞光 さらば御輿を引ッ立てべいか。

ト大小トヒヨになり、貞光舞臺へ来る。素袍の上を脱ぎ、皆々を千鳥にして真中へ来り、鶴の前はじめ
立役女形を圍ひ、有信と入れ替つて、しやんと見得。このうち、アリヤ〜の聲。

皆々 どこえ。(ト納まる。)

満仲 碓井の貞光、参つたか。

貞光 ハア、。

女 待つてゐたわいなア。

皆々 鶴のいづれも様も先き程から、お待兼ねでござりました。

貞光 某し参る上からは、氣遣ひな儀はござりませぬ。大船に乗つたと思つて、落着いてござりませ。

………時に承はらうは、常俊卿の姫君、鶴の前様、まつた主人満仲を始め、なぜ手ごめにはおしやるのだ。

有信 その譯は、おれが言つて聞かせべし。わが君酒呑童子、鶴の前にお心を懸けさせられ、それを否みし姫ゆゑに、違背の罪に行ふのだ。

貞光 して又主人満仲公、頼信公といひ、關屋どのまで、なんで御首、たまはらんとはなしたのだ。

有國 満仲公ことは、我が君へお味方申さぬのみならず、諫言なせし越度により

景道 また頼信は鶴の前と、不義ひろいだ科、關屋めも

正盛 その家來たる仲光が、女房たるゆゑ、共に殺害。

皆々 皆仰せを背く罪人だワ。

貞光 イ、ヤ、そりや髭黒どの、横車といふものだ。どこからそんな空株を、買はしやつたかは知らないが、心を懸けた姫君が、隨はぬとて罪人呼ばはり。また道に正しき満仲公、何故惡に與みなされん。

頼信公を不義だといへば、其方も不義の科。お首打つなら道包どのから、先へお首をぶち落さうか。

敵役 皆々 サア、そりやア

貞光 それこれのけて、位を望む、髭黒どのは大罪人。これにも返言ありや、なんと。

敵役 皆々 サ、そりやア

貞光 サア

敵役 貞光 サア

敵役 返答はどうだな。

貞光 誰れだと思ふ、エ、つがもない。貞光こゝへ來たからには、うぬらが邪ま聞いちやアゐない。

先づ差當つて童子とやら、酒呑とやら、得手勝手な名をくツ附けた、髭黒どの、高上りが、第一に氣に喰はない。ドレ、引きおろして

ト髭黒へかゝらうとする。どろくにて、貞光五體すくむ思ひ入れ。皆々思ひ入れ。

立女 これは。

皆々 敵役 わが君の御威勢見たか。

貞光 成る程見たが、きついものだ。その代りには、よい物の尻尾を、おれが見附けておいた。

有信 ソリヤ、アノ、どこに。

貞光 こゝにあるワ。

ト髭黒の懐より、錦の神璽を引き出す。皆々、「オ、く」と思ひ入れ。

満仲 それこそ紛失なしたる

頼信 神璽の御寶。

貞光 満仲公より禁廷へ。

満仲 心得た。(ト神璽を受け取る。)

貞光 これからは、敵役の、悪事の根ざらひをしにやアならない。ナニ、川瀧屋のおぢい、ちよつと逢ひたい。

有信 身共に逢ひたいとは、何の用だ。

貞光 外でもない、中納言常俊卿の重器、雄龍の印、おぬしがほつほにある筈だ。おれにくりやれ、てえくくしませう。

有信 イヤ、おらアそんな物は知らない。

貞光 さうぬかしやア、斯うして。(ト有信を引き据ゑ、懐を探す。)

有信 どうだ、あつたか。

貞光 ムウ、そんなら二人の船まぐろ、きり／＼と爰へ出せ。

有國 どうしておいらが、そんなものを。

貞光 知らずばこゝへうしやアがれ。(ト二人を殴り倒し、懐をさがす。ハテ、慥かにこゝにと思ひしに。

髭黒 雄龍の印はあるまいがな。

貞光 イ、ヤ、それも在りどころは知れた。

有信 して又そりやア

貞光 これなる中に。(トくくり枕を引き寄する。)

髭黒 南無三、それを。

ト出す手を振りのける。有信がゝるを突きつけて

貞光 寄りやアがると殴り殺すぞ。(ト枕の中より印を出す。)

鶴のヤ、それこそ父が家の御寶

關屋 雄龍の印で

女形 ござりまする。

貞光 これ程こゝにあるものを、これで二度だが、ア、つがもねえ。イザ、姫君、お受取りあられませう。(ト鶴の前へ渡す。)

満仲 神璽といひ

鶴の 雄龍の印

頼信 再び戻らせたまひしか。

關屋 さぞお悦びでござりませう。

三女形 これといふも、貞光さんのお働き。

鶴の 頼信 エ、有り難い。(ト寶をおし戴く。)

貞光 寶は首尾よく戻り橋、御最負めでたき顔見世に、祝ひに一つめませう。

立女 皆々 ヨイ〜。

有國 此方も一つめませう。

景道 皆々 ヨイ〜。

敵役 有信 エ、何を馬鹿らしい。……………コレ、悪い所へ又しても、わッぱしめがうしやアがつて、此

方の仕事をさ〜ほうさ。この場はこの儘別る〜とも、また重ねしの參會には

髭黒 要害堅き大江山、千丈ヶ嶽に立て籠り、この禮はきつと云ふぞよ。

貞光 念には及ばぬ。たとへ鐵城に籠るとも、貞光が鐵拳に、たつた一打ち。それまでうぬらの命は助け、いづれも方のお供して、今立ち歸るが、どいつもこいつも、言ひ分はないか。

敵役 言ひ分は

皆々 貞光 どうしたと。

敵役 皆々 ない。

貞光 然らば、イザお立ちあられませう。

「さらば〜といふ聲は、當世無双の英雄士、凄じかりける
トこの淨瑠璃のうち、鶴の前先きに雄龍の印を三方に戴せ持ち、頼信、關屋、女形立役ついて花道へ

かゝる。

有信 ソリヤ。

トこれにて仕丁大勢「やらぬ」とかゝる。貞光、大太刀にて一薙ぎに切り倒す。皆々ぶつかぶりにて倒れる。此うち花道の人數は向うへ入る。貞光もその儘花道へ来る。

髭黒 碓井の貞光。

貞光 弱蟲めら。

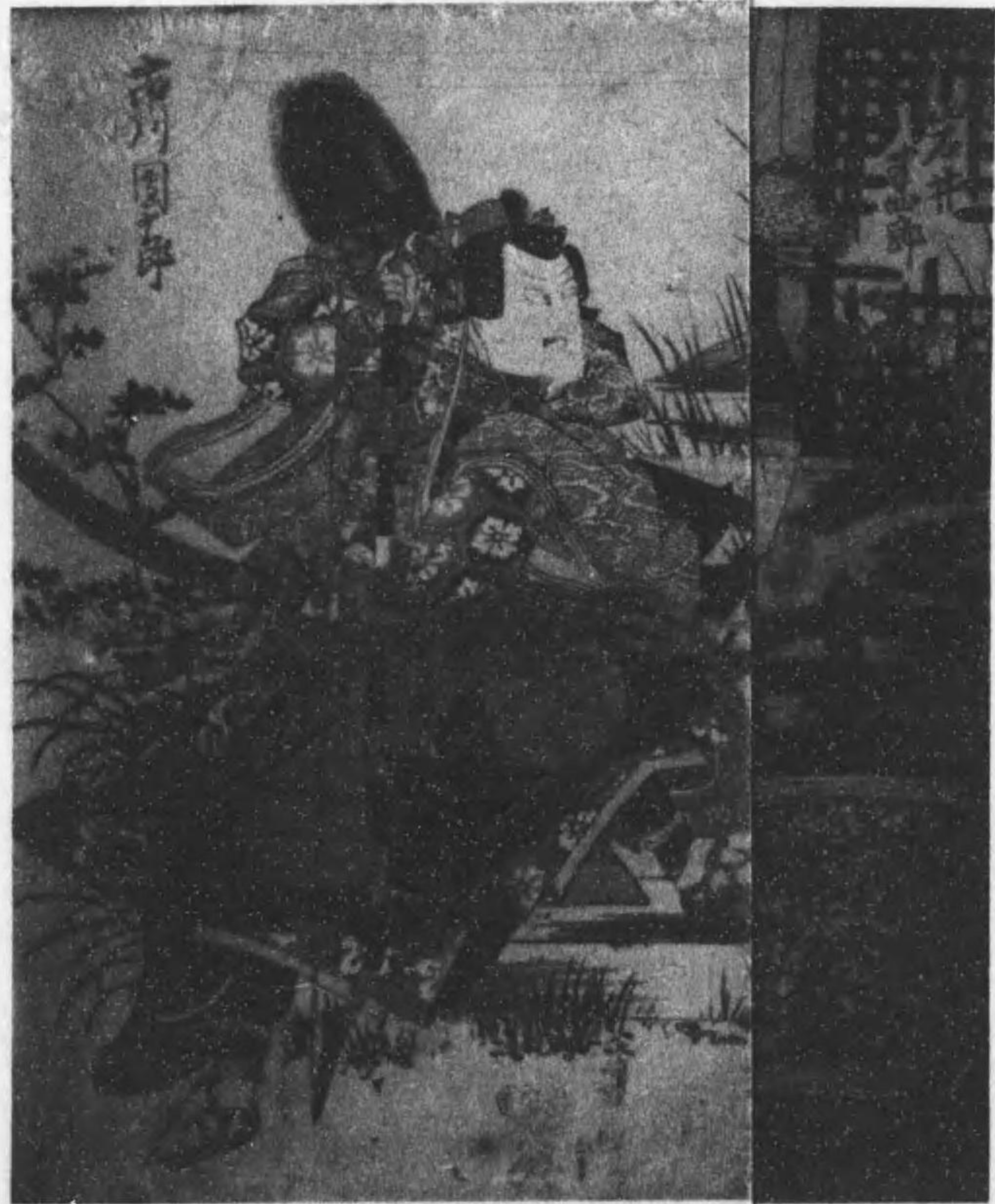
貞光 さらば。

ト貞光、白刃をかつぎ、きつと見得。舞臺も見得。下り葉になり、よろしく
貞光、白刃をかつぎし儘、向うへ入る。ト留めの拍子木につれ、直ぐに大拍子のつなぎにて、この幕引ッ
返す。

幕

本舞臺三間の間、雨落ちより三尺ほど下げて、高さ六尺ほどの二重舞臺、正面ちぎれ御簾、九尺の間へ
かけ、御簾の縁、萌葱の地に紺にて瓜にあられの摺込み、左右とも毀れし狐格子、塗り高欄も古びた
るが折れくだけ、所々に残りし體。床下に草生ひ茂る。下手の床下出張りあり、西の横手に高欄古び
たる體。東西、松生ひ茂り、吊り枝の松へ屋根の小口を見せ、床下の柱、軒口とも照葉あるひは蔓物
からみし景色。一體、花山の院古御所の體。山おろし、時の鐘にて幕明く。
トこゝに前幕の經櫃をおろし、山平、一卷を持って、三人思ひ入れあつて

山平 こゝぞ花山のこの古御所、築地の崩れがあつたを幸ひ、追ひ附かれてはと駆け込んだが、よもや
次郎忠正が、こゝまでほうせまいて。
手一住み荒れたれど花山の古御所。





山平 こそ、ぞ花山のこの古御所、築地の崩れがあつたを幸ひ、追ひ附かれてはと駈け込んだが、よもや
次郎忠正が、こゝまではうせまいて。
手一 住み荒れたれど花山の古御所。

手二築地を越えても、うせまいて。

山平 そんなら、わいらは氣を附ける。持參の一卷この所で、錠捻ぢ切つて、親方へ。
手下 合點だ。

山平 モシ、親方、これが彼の一巻、即ちこゝに。
トあたりへ思ひ入れ。山平この間に經櫃へさし寄り

ト錠を捻ぢ切りにかゝる。ばたく。人音する。

手下 アレ、人音。

山平 合點だ。

ト風の音、時の鐘になり、向うより忠正、一散に走り出て来る。舞臺の人数、經櫃をかつぎ、逃げんとする。忠正、二人を投げのけ、經櫃を引きおろし、きつと留めて

忠正 動きやアがるな、盗人めら。正しくうぬらは袴垂の手の者ども。この經櫃も詮議もの。先づ差當るは最前の一巻。こつちへ渡せ。

山平 小積な忠正、強盗多きその中、この辻風のさぶ六が、手にある一卷渡さうや。兩人ぬかるな。
手下 忠正、うぬを。

ト經櫃の棒にて打つてかゝる。忠正、棒を取り捨て、切り拂ふ。兩人切り立てられ、這々逃げる。山平後より切つて行く。立廻つて見事に切り倒し、一卷を奪はひ取り、腰に差したる袋入りの太刀へ思ひ入れあつて

忠正 首尾よく手に入るこの一卷 殊にこれなる蜘蛛切り丸、頼光公へ、オ、それよ。

ト行かうとする。薄どろくになり、正面の御簾のうちより、誂への蜘蛛の絲おびだしく出で、持ちたる一卷へまとふ思ひ入れ。

ハテ、心得ぬ古御所の御簾、月も朧、影さして纏ふはさゝがにの

ト一卷を銜へ、刀へ手をかける。どろく、烈しく、御簾の内より誂への蜘蛛の絲出で、銜へし一卷抜かうとする刀へ纏ひ、立ちすくみの思ひ入れにて刀を抜かうとする。御簾のうちより誂への蜘蛛出で、後へ引き戻す。これにて刀を抜き、切り拂ふ。なほしよく、ト、白刃をわが手に腹へ突込み、苦しむ。この蜘蛛、忠正が持ちたる刀を奪ひ取り、忠正が首を見事に切る。板返しにて一卷を持ちたる忠正の首出る。この途端どろく、打ちあげ、誂へ凄き鳴り物。この時かき捨たる經櫃はつたり音して四方へ割れる。中より袴垂保輔、百日、大襦袢、一本差し、手甲股引にて顯はれ出で、忠正に目を附ける途端に、下の方、床下より、將軍太郎良門、鉢盂、着込み、行簾、附太刀、弓矢を持ちながら、重ね草鞋、望みの形にてすつと出で、下より見あげることよろしく、窺ひく縁にあがり、一卷を銜へし首へ兩方一度に

手をかける。きつとなり立廻りよろしく、薄どろくにて、首板返しにて、誂への大蜘蛛になり、一卷を銜へて御簾の内へ入る。兩人驚き行かうとして立廻り、御簾を引きさざる。此うち一面に誂への蜘蛛の巢、銀張唐紙古び、よき所に蜘蛛の精靈、凄き下髪、白の着附、鼠地の十二單衣、いづれも蜘蛛の絲ちらちらと見える模様、色のかはりし緋の袴、物凄き合ひ方。以前の一巻を開き、軒もる月にかざし立ち身、兩人恟りして左右より一卷へ手をかける。蜘蛛の精ちやつと一卷を隠す。よき切つかけにて鳴り物變り、三人だんまりの立廻り。ト、蜘蛛の精の手へ一卷納り下の方へ行く。尤もこの立廻り二重舞臺の上なり。袴垂、將軍太郎上方へ行き、落しある袋入りの刀を取りあげ、兩人争ふ。袴垂の手へ鞘に残る、將軍太郎思はず白刃を抜き、直ぐにどろく、蜘蛛の精この劍に恐れし體にて、一卷を銜へ、九字を切る、思ひ入れ、兩人きつとなる。蜘蛛の精立ち身の儘、大どろどろにて直ぐに消える。兩人この體を見て恟りして左右へ別れる。これにきつと目を附け思ひ入れあつて、袴垂は白刃、將軍太郎は鞘を取らうとする、立廻りよろしくあつて拍子

幕

幕引き附けると拍子木にならひ、花道よきところへ蜘蛛の精、派手なる振り袖、練の帽子、金銀の扇を持ち、以前の一卷を銜へ、薄どろくにてセリあがる。途端に東西棧敷へ紅白梅の盛りの水引を引き出す。蜘蛛の精セリあげ、きつと留る。こなしあつて顔へ扇を當てる。誂への摺り鉦入りの賑かなる唄になる途端に、誂への胡蝶二羽、目先きへ舞ふ。これに目を附け、扇にて拂ふ事などよろしく、揚幕の方へ舞ひ行く。蜘蛛の精これに目を附け、こなしあつて向うへ入る。知らせつき、

第壹番目

幾野海道追分の場

六八

四立目

笛吹峠畚おろしの場

同返し

栗ノ木村の場

大南北全集

役名。

一ノ瀬村、源六。御厨七郎俊連。丹波太郎鬼作。栗ノ木村又次、實は、海上刑部太郎。修驗者、實は、大江郡領政平。百姓、五知右衛門。百姓、芝作。庄屋。雲助。狩人。丹波太郎手下、勘太。見世物師、善幸。又次娘おくり。鶴の前。お浦實は刑部太郎娘、浦邊。

本舞臺三間の間、一面の淺黃幕、上方山の張り物。正面好みの辻堂。下方土籠の茶店。すべて丹波海道幾野追分道の體。幕の内よりお栗、やつし前垂れがけにて茶を汲んである。五知右衛門、芝作、百姓の形、大きな畚を二つ、太繩を入れてこれをかたげ、茶を呑んである。善幸、木綿合羽旅の形にて腰をかける。雲助二人、駕籠をおろし、煙草をのんである。この見得、在郷唄にて幕明く。くりどなたもお早うござりました。

駕一 旦那、これからは石道だ。もう一丁場やりませうか。

駕二 丹波の笛吹峠、名代の難所でございます。

五知 イヤモウ、毎日歩きつけてゐるわしさへ、大儀な道サ。

善幸 わしは折々登り下り、この在所の栗ノ木村、又次といふ人を探ねるのサ。

くり 栗ノ木村はわたしが在所、父さんも今日は家にゆゑ、行てお逢ひなされませ。

駕一 栗ノ木村の又次どの、この丹波の國で、不具者ばかり集めて、京大阪や江戸の盛り場へ、見世物に賣つてやるが商賣。

善幸 わしは江戸の築地にゐる見世物師だが、この栗ノ木村へ見世物の相談、冬のうちに來たのでござります。

芝作 わしらは、この山間の岩茸を取りに、この畚に乗つて谷へ下りたりするが、珍しい名も知れぬ、けだ物などを見ることかござります。

善幸 珍しいといへば、この間、どこやらから眞黒な馬が駈け歩いて、こゝらあたりの田地畑へ踏みこみ、荒すとのこと。

くり その話しはわたしも聞きました、怖い事ぢやさうにござります。

芝作 ドレ、わしらは谷へ下りて、一せいやりませう。

六九

辰橋春御操

善幸 貴様達も骨を折つた代りに、一杯づゝ吞ませやせう。
駕昇 そりやア、有り難うござります。
芝作 ドリヤ、わしらは谷へ行きませうか。
五知 そんならお早うお出でなされませ。
善幸 こりやア、お世話でござりました。

ト在郷唄になり、駕籠昇は善幸を駕籠に乗せて下座へ入る。おくり残り
くり ほんに、いつも姉さまが、この流れへ布晒しにござんすが、今日は天氣もよし、もう見えさうな
ものぢやわいな。

勘太 (向うにて) ア、コレく、姉さま、料簡しなさいく。

ト誂へ摺り鉦入りの唄になり、向うよりお浦前垂れがけにて手拭を冠り、盥に白布を入れて抱へ、片
手に雲助の勘太を捻ぢあげ、下駄をはいて出て来る。あとより丹波太郎、三度飛脚、引廻し合羽、旅
形にて、荷物をかつき出て来る。勘太、花道にて

コレく、姉さん、指が折れる、どうするのだく。

うら どうの斯うのは知れた事、山家女と仇口の、古いせりふを洗濯の、見ず知らずではあるまいし、

今年も替いぬお目見えに、あられないとお吐りを、三河やさまぐの、てんがうさんす雲
助さん、必ず弄つて下さんな。ト勘太を取つて投げる。

太郎 コレく、その腹立ちはお前が尤も。あいつが悪洒落を言つたもので、荷物を自身にこの通り、
わしがかたけてお前に詫び事。マア、料簡してやつてくんない。

勘太 コレ、姉さん、おれが悪かつた。料簡してくんないく。

うら それ見やしやんせ、ほんに男といふものは、女子に逢うては、脆いものぢやわいなア。

太郎 そんなら、それで料簡して

うら この場は済ましてあげようわいなア。

勘太 そんなら親方、マア、あちらへ。

太郎 とうくこ、まで擔がせをつた。(ト唄の切れに三人、本舞臺へ来る。)

くり 姉さん、布洗ひにござんしたか。何やら聲高に、あのお方はえ。

勘太 いつも登り下りさつしやる酒問屋の旦那サ。つい供をしてお前の姉御に、常談を言つて腹を立て
させた。よいやうに頼みます。

くり いつも、お前もマア、嗜んだがよいわいなア。

太郎 ドレ〜、マア、一服のんで行きませう。(ト床几に腰をかける。)
 くり 姉さん、今江戸のお方がござんして、父さんを立場で待ち合してぢやわいなア。
 うら そんなら父さんに知らさずば、また腹立ちであらう程に、そのお方を連れましておぢやいなう。
 其うちわしや、見世番しながら布を洗ふほどに、早う行ておぢや。
 くり アイ〜。そんなら姉さま、見世を頼んだぞえ。

ト在郷唄になり、お栗下座へ入る。向うより源六、やつし旅形にて、盥紙包みと行李を、ふりかけし
 て出て来て

源六 オ、お前は早くござりました。草鞋を買つてゐるうち、大きに遅れた。

太郎 イヤ、わしはどうで幾野在に寄り道があり、残り多いが、こゝで別れます。

源六 イヤモウ、旅は道連れとやら、昨日から大きにお世話になりました。

太郎 ア、コレ、酒でもあれば飲んで別れたいが、姉さん、酒はあるまいか。

うら アイ、酒はこの先きで。(ト太田をよ〜見て) ヤ、お前は

太郎 アイヤ、エヘン〜、ア、まだこの先きが難所と聞けば、なんと急いで漕ぎ附けようか。

勘太 それがようござります。

源六 左様なら、もうお出でなされますか。

太郎 心が急けば別れます。ア、コレ、登りを急がぬと、ゆつくりとお浦さん、お前にも話しが。……

……イヤ、また重ねて。

源六 これはお名残り多うござります。

うら 随分御機嫌よう、お出でなされませ。

太郎 急いでござりませ。

勘太 サア〜、やりませう。

ト在郷唄になり、丹波太郎、勘太、下座へ入る。源六、こなしあつて

源六 ヤレ〜、道連れに別れたら心細くなつた。併し、もうこゝが追分ならば、僅かであらう。(ト煙草
 を吸ひ附けようとして) ……モシ、火を一つ入れて下さい。

うら ハイ〜。お火でござりますか。(ト火入れ取つて顔見合せ) ……お前はとうやら見たやうな。

源六 イカサマ、わしもこなたを。

うら オ、ほんにソレ〜、二ノ瀬村の源六さんぢやござんせぬか。

源六 成る程三年あと、在所にゐた時分心易くした、又次どの、娘御お浦どの、ハテ、變つた所で逢ひ

ました。

うら マア、お前も達者で、おめでたうござんす。

ト茶を汲んで、火入れに火など入れる。合ひ方。

源六 ヤレ、久し振りで逢ひました。見さつしやる通り山持ぎで、旅をするにもこの通り、商賣道具を放さずに、先きから先きの旅暮し。二年振りでこなたにも逢ひました。又次どのもお達者かえ。

うら 随分達者で居ります。それは格別、今お前が連立つてござんしたお人は、ねんごろにしなさんす。お方でござんすかえ。

源六 イ、ヤ、あれは一昨日、但馬海道からフト道連れになつて、泊りくも一人旅ゆる、世話になりましたが、どこの人だか、名も所も知りませぬ。

うら エ、。

源六 エ、とはえ。

うら サイナア、お前はツイ道連れになつたばかりでござんすかえ。

源六 それがどうしました。

うら コレイナア、ありや盗人でござんすわいな。

源六 エ、。

うら この海道筋で、ありや丹波太郎といふ、盗人の頭でござんすわいな。

源六 ムウ。そんなら彼奴は、盗人の頭でござるか。

うら モシ、お前に金を持つてはるなさんせぬか。

源六 エ、。

うら イ、エイナア、路銀ならば餘程の金、それを見込んで道連れになつて、附いて来たと思はる、わいな。

源六 (思ひ入れあつて) ムウ、怖い者でござります。護摩の灰が商賣の、目角に違ひござりませぬ。奉公持ぎのため辛抱して、拵へた金がござります。

うら そんならその金を見込んで、大方峠の山中に、お前を待つてゐるに違ひござんせぬぞえ。

源六 何をいつても多勢に無勢、大事な金を取られては大難儀。どうしたらようござりませう。

うら モシ、そりや、斯うしなさんせ。その路銀を、わたしに預けて行きなさんせ。

源六 アノ、二百兩を。

うら サア、さうすれば、もし大勢で取り巻いても、金さへ持つてござんせにや、大事ないちやござん

せぬか。

七六

源六 イカサマ。金さへ無けりや、どうするものだ。お前の言はしやる通り、預けませう。

ト懐の財布より二百兩を出す。お浦受取り、手拭にて包み

うら ツイ道通りの旅人なら、心も附かず教へもせねど、二年振りで逢うたお前、見すく難儀をそれなりに、捨て、置いては氣の毒なゆる、預りませうとは言うたれど、わたしも女、知つての通りの父さまの氣質なれば、(ト髪にさしたる笄をぬいて) この笄は譯あつて、親の譲りの大切な割り笄、つむりの道具というではなけれど、粗末にならぬ品ゆゑに、髪飾りの身嗜なみ。これをお前に渡して置けば、いつ何時でもわたしが内へ、それを持つて、取りにお出でなされませいなア。

源六 ハテサテ、深切に教へて下さつたお浦どの。見ず知らずの人ではなし、こなさんの内さへ聞いて置けば、大事ござりませぬ。

うら でも、どういふことで、お前の來られぬその時は、この笄さへ寄越しなさんすりや、金は慥かに渡してあけるわいなア。

源大 成る程、さういふ事なら、この笄、わしが方へ預りませう。して、お前の内といふはうら 幾野の里の村續き、又次というて、栗の木のある放れ家。

源六 又次どのと尋ねませう。(ト七つの鈴鳴る。)

うら もう、ありや、七つ。モシ、斯うしなさんせ。この麓から峠へかゝる、近道まで教へてあげうほどに、ちつとでも日の高いうちに行きなさんせ。

源六 それは重々、忝うござります。どうぞ近道を教へて下さりませ。

うら そんなら、わたしと一緒に。

源六 案内して下さりますか。

うら サア、ござんせいなア。

ト在郷唄になり、兩人連れ立ち、下座へ入る。ト善幸出で來り、あたりを見廻し、思ひ入れあつて

善幸 いつぞや、都岩倉にて、梢にかゝりし相馬の白旗、不思議にわが手に入りたるも、栗ノ木又次と心を合せ、徒黨を集むる屈竟の一品なれど、馬の抜け出で空虚となれば、たゞの白旗。最前の話しといひ、何でもこの旗へ黒馬を、戻したいものぢやが。

皆々 サア、ござれ。

トこれに悔りして、白旗を、お浦が持つて出た洗濯盆の中へ入れる。ト下座より、お栗一緒に民右衛門、庄屋の形、百姓二人、ワヤノ、云うて出で來り

七七

善幸 こりや、マア、皆の衆、何を騒がつしやります。
民右 何事とは、この間から噂のあつた黒馬、此方の村へ匆ね込みました。
皆々 イヤア、。

くり コレイナア、わたしや怖いによつて、皆さんと一緒に、早う内へ去にたいわいなア。
民右 この庄屋が送つてやりませうから、皆の衆、道々氣をつけて行きませう。
善幸 わしも後から行くによつて、又次どのに、よく言つてくだされや。
くり アイく。そんなら後からお出でなさんせ。
皆々 サアく、行きませうく。

トてんつゝになり、山おろし。この人数皆々向うへ入る、善幸残り
善幸 ムウ、そんならいよく噂の黒馬、この旗から抜け出たに違ひないわえ。

トこの時、お浦出て来て、そこを尋ねる。善幸が持つてゐる盃を見て
うら めつさうな、この盃を。(ト持つて行かうとする。)
善幸 ア、コレく、その盃をどこへ持つて行く。
うら こりや、わたしのぢやわいな。

善幸 それでも、これは

うら ハテ、何をしなさんすぞいな。

ト争ふ。大どろくになり、向うより黒馬一散に走り出る。あとより民右衛門、百姓皆々棒を
持ち追ひかけ出る。どろくにてお浦、善幸争ひの中へ入る。皆々、ワツト逃げる。善幸も皆々と一
緒に逃げて入る。お浦逃げるはずみに思はず手綱をふまへる。馬留る。逃への鳴り物になり、正面
の辻堂の扉を開き、御厨ノ七郎俊連、五十日登、大小、武者修行の形にて出る。この時三立目の黒雲下
りる。兩人きつとこれを見て思ひ入れ。矢張り薄どろく。

俊連 葉公龍を好んで書き、または鏝めども、眞の天龍を見て魂ひを失ふ、これ龍にて龍にあらざるも
のを好むとやいはん。

うら 女のよれる黒髪には、大象もよく繋ぐと、色に引かる、佛の戒め。

俊連 それは方便、これは又、あればあるもの、これは稀代。

うら 形に影の駒の足、思はずこゝに留まりしは

俊連 手綱はまさに繋ぎ駒、魂ひ入れてその形、現はれ出でしと覺えたり。しるしは目前、こゝに寫して。

ト懐より錦の袋に入れし鏡を出す。大どろくにて馬の上へ黒雲おりる、ト馬は消える。お浦フツ

ト 盥の中を見る。白布に馬現はれる。

うら ヤ、この白絹に、おのづから、形を現はす繋ぎ馬。
俊連 ナニ、白絹とは。

ト つかくとお浦が抱へし盥に手をかける。お浦振り拂ふと、俊連思ひ入れ。
うら こりや、何となさんす。

俊連 サ、それは。(ト 誂への合ひ方になる。)

うら つひに見馴れぬ旅のお方。

俊連 イヤ、外でもない、今の様子

うら ほんに、マア、何の事かと思つたら、わたしに夫はござんせぬわいなア。

俊連 そんならこなたは、寡女か。

うら それ聞かしやんすお前は

俊連 見らるゝ通りの遠國武士、山陰道にしるべを求め、仕官を望む身ながらも、武士も及ばぬ今の有

様、女房に持ちたい。

うら アノ、お侍ひ様が、賤山樵の娘を

俊連 大事な。こなたさへ應と云や、侍ひやめて町人百姓。

うら アノ、そんなら眞實それ程に。

俊連 嘘と思はゞ、今こゝで。

うら 心中見せうと言はしやんすも

俊連 古いと思はゞ、洗濯の、盥のうち

ト 白旗に手をかける立廻り。俊連が懐より以前の鏡を落す。お浦ちよつと取り上げる。

うら この鏡は。(ト ひつたり俊連懐へ入れる、思ひ入れあつて) 女房にならうわいな。

俊連 ヤ。

うら お前の心が知れたによつて

俊連 女房になる氣か。

うら アイ。

俊連 して、こなたの住家は。

うら この山續きの栗ノ木村、又次といふがわたしの父さん。

俊連 ムウ、聞き及んだる栗ノ木村。

うら わたしが内へ

俊連 尋ね求めて

うら 必ずともに。(ト俊連は盃、お浦は俊連の懐へ思ひ入れ。) 待つてゐるぞえ。

ト時の鐘、唄になり、お浦盃を抱へ、向うへ入る。

俊連

ハテ、心得ぬ今の女。盃の中へ入れありしは、慥かに相馬の家の旗。わが所持なしたる名鏡の、奇特に、消えて黒馬の、形は正に繋ぎ馬。(ト懐より鏡を出し、思ひ入れあつて) ……女が在り家は栗ノ木村。尋ね求めて今の白旗。とはいへ我が身のこの姿。ムウ。

ト思ひ入れ。百姓一人出て

百姓 その名鏡を。

ト取りにかゝる。立廻りにて、エイと當てる。思ひ入れあつて

俊連 幸ひこれなる狩人が。ムウ。うせう。

ト思ひ入れ。時の鐘になり、俊連百姓を引きとらへ入る。ゴンくにて、淺黄幕切つて落す。

本舞臺一面岩組、真中に谷の蔭山道、下の方九十九折のやうにして、正面に小さき地藏堂、奥深に

山組の模様よろしく、兩方に振りよき松の枝、萬葛からみ、總て丹波の國笛吹峠谷間の模様、時の鐘、山おろしにて道具とまる。ト右二重舞臺に駕籠昇二人と胴六勤太、以前の形、丹波太郎、盗人の形にて、旅形の若い者をふまへ、錦の袋に入りし蜘蛛切り丸を持つてゐる。

勤太 頭、息の根は

三人 留いましたか。

太郎 こいつは慥かに源家の重寶蜘蛛切り丸。頼親公へ渡せば一廉の金。

勤太 そんならこの劍か

太郎 この侍めは慥かに、藤原家の娘、鶴の前が供をして、うせた奴には違ひない。此奴がこゝへうせるからは、鶴の前もうろくと、この峠へかゝるは知れてゐる。コレ胴六、わりやア、この劍を都へ持ち行き、頼親どのへ手渡しするか、多田の館の尊國君に、慥かに手渡し、合點か。

ト渡す、胴六取つて

胴六 呑み込みました。して、頭には。

太郎 鶴の前が来るを待つて、こゝで彼奴めを。

胴六 そんなら、頭。

太郎 早く行け。

洞六 合點だ。(ト蜘蛛切り丸を持って向うへ入る。始終時の鐘。)

太郎 常俊が娘の鶴の前、今一色の雄龍の印を所持なして、此道へかゝるは必定。こゝへ来たなら合點か。

勘太 呑み込みました。

駕昇 (向うを見て) アレく、慥かに女連れ。

太郎 日も暮れかゝれば丁度幸ひ。

勘太 巢を張つてあいつらを

太郎 二人ともに来い。

ト時の鐘、合ひ方になり。太郎、勘太、駕籠昇、上の方へ入る。ト向うより關屋、鶴の前、三立目の姫のこしらへにて、連れ立ち出て来る。

關屋 常々も申しまする通り、幾野の麓には、私しが知邊もござりますれば、これにお忍びなされまして、時節をお待ち遊ばしませ。

鶴の いつぞや都岩倉にて、危い所をやうく遁れし、みづからが身の上。頼信様とも別れく、世を忍ぶ身の味氣なさ、この上とも、其方を力と思ふわいの。

關屋 お氣遣ひ遊ばしますな。女ながらも藤原の仲光が妹、この關屋がお附き申してゐるからは、やが

ためてたう頼信様と、御祝言させまするでござりませう。(ト時の鐘を打つ、月出る)……折悪う日は暮れて、人里知れぬこの山中。月影をしろるべに、サア、おひろひ遊ばしませ。

ト始終時の鐘にて、舞臺へ来て、二重舞臺へかゝる。ト鶴の前、道の疲れに惱みし思ひ入れ。

鶴の この程の心遣ひで、いかう痞へが差込んで来たわいの。

トこの時うしろへ太郎、駕籠昇、勘太出かゝりて窺ひ、太郎段々に囁き合ふ。

關屋 折わるう、薬はなし。どうしたものであらう。

太郎 旅のお女中、薬を進ませませう。

關屋 これはマア、どなたか知らねども、御覽の通りの女連れ。左様ならばお薬を。

太郎 オ、随分やらう、その代り、其方の薬の萬金丹、しつかり持った路用の貯へ、ありたけ此方へ

渡してしまへ。

勘太 聲を立てもこの山中。

駕二 鶴の前に乳人關屋。

勘太 そびいて行けば、褒美はすつしり。

關屋 ムウ、すりや、われくが身の上を、知つての上の狼藉よな。

太郎 こゝへ来たのは地獄落し、叶はぬ事だと諦めて、着てゐる物から頭髮の道具、路用残らず置いて行け。

關屋 ヤア、慮外なる盗賊ども。女と思ひ不敵の詞。近寄つたら、爲にならぬぞ。

太郎 四の五のと面倒な。ソレ、合點か。

兩人 合點だ。

ト禪の勤めになり、鶴の前を引つ立てる。關屋、引きのける立廻り。太郎、鶴の前を引つ抱へ、連れて行く。關屋、やるまいと留める立廻り。一腰を抜いて駕籠昇の眉間を切る。

勘太 ソリヤ、抜いたぞ。

トこれより禪の勤め烈しく、勘太は向うへ逃げて入る。駕籠昇、關屋に打つてかゝる。關屋、鶴の前の手を引きながら、片手にて皆々を追ひまくり入る。ト太郎残り

太郎 素手ではいかぬあの女め。こりやア、おれが手をおろして。

ト思ひ入れあつて木蔭へ忍ぶ、トまた禪の勤めになり、上の方より關屋、駕籠昇立廻りながら出て来て、ト、駕籠昇を切り倒し、がつくりとなる。鶴の前走り出で、取り付き

鶴の コレ、關屋、心を慥かに持つてたもいなう。

トいろく介抱する。關屋手負ひ苦しき、いろくあつて

關屋 鶴の前様、あなたにお怪我はござりませぬか。嬉しや、とは云ふものゝこの深手。モシ、大切な
ろこの雄龍の印、頼光公へ差上げて、再び常俊公の勅勘を。

百姓 (出て) 雄龍の印、此方へ渡せ。

トひつたくりにかゝる。關屋、雄龍の印を口に銜へて百姓と立廻り、互ひに合打ちになる。兩人思はず二重舞臺より前の谷へ落ちる。鶴の前うろく。

鶴の ア、コレ、關屋イなうく。手負の上に谷底へ。エ、どうしたらよからうぞいなう。

トこの時太郎うしろへ出て来て

太郎 阿魔め、われが懐中にある雄龍の印、おれに渡せ。

鶴の ヤア、そんなら其方も

太郎 オ、知れた事。雄龍の印を早く渡せ。

鶴の イヤく、大切な一品、其方たちに渡さうか。

太郎 きりく、此方へ渡せ。

鶴のイ、ヤ、其方を、(ト懐劍にて突きかゝるを叩き落し、一かせ切る。)こりや、みづからをも殺しやるか
いの。

太郎 目にかゝつたる雄龍の印、持つてうせたが、おのれが寂滅。

鶴の 頼信様にはお別れ申し、剩さへ盗賊の手にかゝり、こゝで死ぬるか。エ、口惜しい。

太郎 こま言吐かすと。(ト切り倒し、懐をさがし、いろくあつて) ……ムウ、すりや、雄龍の印は、も
う一人の女らうめが。

大勢 サア、ござれ。 (ト向うにて聲する。)

太郎 南無三。(ト東の方へ行かうとする、東の揚幕にて)

大勢 サア、ござれ。

トこれにて太郎、二重舞臺上の方へ入る。ト山おろし、時の鐘になり、向うより民右衛門松明を持ち、
五知右衛門幕明きの形にて畚を持ち出る。跡より俊連、同じく百姓の形、打ち交り出て来る。東の方
より芝作、同じく畚をかたげ、百姓大勢松明を持ち、この跡より源六、以前の形にて出て来る。兩
方人数舞臺へ来て二重へあがり

芝作 これは五知右衛門どの、今戻らつしやりますか。

民右 この頃は物騒だによつて、大勢で戻りました。

五知 芝作どのや、今の切り合ひを見さしつたか。

芝作 あちらの山から見ましたが、どうしましたね。

庄屋 コレ、こゝらあたりは血だらけでござる。

皆々 ハア、二人ながら谷へ落ちたと見えまする。

ト松明にて谷底を見る思ひ入れ。始終時の鐘。此とき中に交りあたる俊連、源六、そこらを見て

源六 何か奪ひあうて谷底へ落ちた様子。アレ、切り合ひの音がします。

俊連 大方泥坊共の仕業でござらう。誰れなりと谷へ下りて、加勢してやつたらなア。

皆々 コレ、すべり落ちまい、危ないぞや。

俊連 (芝作と五知右衛門が持つてゐる畚を見て) モシ、お前方の持つてござるは、そりや畚ぢやないや
りませぬか。

五知 こりや、岩茸を取る時乗つて下りる、畚でござるわえ。

俊連 そんなら、それに乗つて、下へ下りたらどうでござりませう。

五知 なんでもこの間は、この峠へ追剥が蔓るとのこと。下へ下りて追剥めを、ぶち殺すがよろいござる。

俊連 そんならその谷底へ、誰が見に行く。

皆々 わしらは氣味が悪うござる。

源六 イヤ、下へはわしが下りて見ませう。

俊連 ヤア、貴様は

源六 わしは笹山越えの狩人でござるが、この間京へ登る道で、盗人に附かれて、金を取られる所でござりました。どうぞわしをやつて下さりませ。

俊連 わしも、水上郡へ歸る者でござるが、來かゝつてのことなれば、わしをば谷底へ、やつて下さりませ
芝作 コリヤ、春も幸ひ二ツあるによつて、二人一緒に下りたがよい。

皆々 それがよい。

俊連 谷底は暗からう。火繩を貸して下さりませ。

庄屋 ソレ、火繩を貸しまする。(ト俊連に火繩を渡す。)

源六 上からはその松明、下からは綱を引くを合圖に、引き上げて貰ひませう。

皆々 合點だ。

源六 お月様も出てござるし、物の黒白も大概知れませう。

俊連 繩を引いたら上げる手筈。合點かや。

皆々 合點だ。

ト始終時の鐘にて、春の綱の先きを松の枝へ引きかけると、上より吹替の大綱を括りおろす。これより春をわろし附け、俊連、鐵砲を持ち、源六兩人春の中へ乗る。皆々捨てりふよろしくあつて

俊連 しつかりと頼むぞや。

源六 合圖を忘れまいぞや。

皆々 合點だ。(ト少し繰り下ろす。)

五知 なんと、春を下ろすなら、ワツサリと木遣りでやらかさうぢやアないか。

皆々 よからう。庄屋どの、音頭を頼みます。

民右 合點だ。……ヨイ、ヨヤサノサ。

ト山おろし、誂への鳴り物になり、二重舞臺をせりあげると、春は少し下へさがる。鳴り物に付き皆々綱を繰り下ろす見得。春の中なる俊連、源六は乗つたまゝに、静かに下へ下りる心。右鳴り物にて一面にせりあがる。よきほどに山幕にて舞臺の人を隠す。右の鳴り物、こだまの入りし合ひ方、始終山おろし。

源六 なんとマア、こなさんもわしも、替つた因縁でないか。一生に一度、馬か乗物に乗る氣でゐるが、春に乗るとは夢々思はぬ。

俊連 イヤ、又これも話しの種。併しお前にこんな所で、始めて逢はうとは思ひがけない。この顔見世から、萬事お世話になるでござりませう。

源六 ナニサ、今まで隣り町や向ひ町で行き違つて、今度出合が互ひに初めて。友達の餘計になるのがわしが好き、何でも心安くこれからませう。

俊連 火繩があるが、マア一服のまつしやりませ。ト鐵砲の火繩を出す。

源六 イカサマ一服やりませう。ア、コレ、始めての出合に、中途でお茶さへ進ませぬ。

俊連 イヤモウ、それはお互ひでござります。いづれも様へもこの末とも、この芝居に重年したお禮を、申し上げたいにも此やうな形。高うはござりますれど、眞ツ平御免下さりませう。

源六 アレ、谷底が近いにして、水音がしますぞえ。

俊連 ほんに流れの音が聞える。もちつとであらう。

ト、チヨン／＼にて幕段々に引き上ぐる。舞臺前谷底をせり上げる。こゝに關屋、百姓を仕留めし心にて、袱紗包みを衝へてゐる。この時谷蔭より源六、俊連、春より下りて、思ひ入れあつて

兩人 ヤア、たしか人影。

トこれにて、關屋の衝へたる印を源六取り、ちよつと立廻りに、關屋を當てる。

源六 こりや、コレ、慥かに雄龍の印。

俊連 それを。(ト取らうとする。)

源六 アイヤ、こりやアおれが拾つたものだ。

俊連 でも、ちよつと。

ト取らうとするを振り拂ふ。この時俊連の懐より以前の鏡を落す。源六取り上げ

源六 この一品は。

俊連 それを。(ト手早く取つて懐へ入れる。)

源六 ムウ、氷上郡の百姓と、望んで下りし春おろし。谷の底より心の底、おぬしも只の百姓ではないわえ。

俊連 女が持つた一品を、取つて返さぬわれも又、落つれば同じ谷の底、見附けた物を、此方へ渡せ。

源六 イ、ヤ、それよりわれが懐、錦の袋は慥かに鏡。

俊連 雄龍の印と見た目は違はぬ、それを此方へ。

源六 その鏡を。

ト俊連が懐へ手を入れる。やるまいと立廻り。山おろし、誂への鳴り物になり、兩人切り結ぶと、きつかけにて月を隠す。忍び三重になり、これより兩人闇の模様よろしく、源六、俊連を目懸けて切つてかゝる。この時源六持つたる雄龍の印を落す。俊連取りあげ、うまいといふ思ひ入れ。チョンと月出る、兩人顔見合せ、トン／＼と後へよつて脊へ手をかけ乗つて、白刃にて打ち合ひ、きつと見得山おろし、大小の鳴り物にて、脊を段々引き上げる。ト後の山を段々にセリ下げると、山の半腹の模様。兩人乗つたまゝの立て、俊連、雄龍の印を銜へたるを見て

源六 雄龍の印も、さてはおのれが。

俊連 何を小癪な。

トちよつと切り結び、ト俊連、白刃にて源六が乗つたる綱をボンと切る。ト源六それなりにドンと谷底へ落ちると、鳴り物やんで時の鐘。山おろし、忍び三重になる。ト俊連刀を納め、二種を持つて思ひがけない手に入りし雄龍の印。又この一品は照葉の鏡。二いろ共に、エ、忝けない。

トにつたり笑ふ。ドンと筒音して、鏡を持つたる俊連が利腕に當る。鏡を下へ取り落す。

ト腕を抱へながら下を見込む。鳴り物になり、脊と後の山を段々とせり上げる。下より谷底をせりあ

げる。源六、俊連が持つて下りたる鐵砲を持ち、關屋、筒音にて心附きし心にて、源六に切りかゝつてあるを留めてある思ひ入れ。この見得にてセリ上がる。きつと見得。

源六 コレ、うろたへまい、おれは旅人。

關屋 イ、ヤ、盜賊。(ト切り附けるを受け留めながら顔見合せ)

源六 ヤ、こなたは。

關屋 お前は。(トがつくりなる。百姓起きかへつて)

百姓 女め。(ト切り附ける、身を交して百姓を一かせ切る。)

源六 コレ、氣を慥かに。(ト關屋落ち入る。源六こなしあつて) ホイ。

ト百姓を下へ切り倒す、百姓見事にかへる。源六手を合せ、チョンと木のかしら。源六愛ひのこなしよろしく

山おろし、時の鐘の繋ぎにて、この幕すぐに引返す。

拍子 幕。

本舞臺、三間の間二重舞臺、上の方反故張りの障子、向う赤壁、正面の欄間に、宮のやうにしたるお札箱をかけ、いつもの所門口、藪疊、古井戸、上の方栗の木、すべて丹波の國栗木村又次内の體。幕の内より又次、白髮親仁、善幸、前幕の形。おくり、娘にて地をひき、子役の猿、袖なし羽織着て踊

つてある。皆々見てゐる。門口に人足形にて、菰包み、長持を置いて見てゐる。賑かなる鳴り物入りの合ひ方にて幕明く。ト右の鳴り物にて、子役ちよつとしたる所作よろしくあつて納る。皆々、ヤンヤヤンヤと囀すと、奥よりお浦、盆に茶を汲んで持つて出て

カ六

うらどなたもお茶をあげりませいなア。

善幸 又次どの、この猿めはよく覺えましたの。

又次 イヤモウ、大抵骨を折つて仕込んだことぢやござらぬ。

くり 父さま。先からあの衆が待つてぢやわいなう。

人足 又次どのや、見世ものをこの中へ入れて、登せるとのことゆる

同 菰包みにして持つて來ました。

善幸 御苦勞々々、此方へ人足入れて下さりませ。

ト人足長持を内へ昇き入れる、おくり、状態を出して

くり 父さん、最前庄屋様から、急にお觸れぢやといつて、持つてお出でござんすぞえ。

又次 何事か聞いて置いたか。

くり イ、エ、むづかしいことゆる覺えぬわいな。

うら そりや、わたしも聞いてゐましたが、何やらお尋ね者とやらの事ぢやといなう。

又次 (状態を開け) こりや、御廚の七郎が人相書。

うら そんならそれが。(ト思ひ入れ)

又次 アイヤ、いつものお觸れ書。後にとつくり見よう。押入れへ入れて置きや。

うら アイく。(ト取つて懐へ入れる)

善幸 又次どの、この丹波路へ入り込んだら、引つ括つて

うら エ、。

善幸 イヤサ、引つ括つて置かぬと、この猿めもぢつとしてはるまい。

又次 ソレく、此奴にも飯など喰せてやつたがよい。

善幸 人足の衆も、序でに馳走になつてござりませ。

又次 お栗よ、皆の衆にも馳走して、あの衆にも進ませせい。

くり アイく。そんならお客様

善幸 猿と一緒に、ドレ、御馳走になりませうか。

ト又次、善幸、お栗、人足、猿を連れて入る。お浦残りて

うら 昨日思はず麓にて、手に入りし繫ぎ馬の旗。何卒御主人俊連様へお渡し申し、父さんの不忠の詫
びと思へども、これまでもお顔を見知らぬ、御主人の弟御、殊に常からあの父さんの氣質、今の
様子。(ト懐より状態を出し)こりや、慥かに繪姿。そんならこれが
政平 (向うにて) サア、静かにあゆばつしやい。

トこれを聞いて、ちやつと思ひ入れあつて奥へ入る。トてんつゝになり、向うより政平、鼠木綿やつ
し、修験者のこしらへ、偶箱を背負ひ、お札を持ち出る。後より源六、修験者の錫杖を杖にして、
少し足の痛む思ひ入れにて出で、花道にとまり

きつう草臥れたと見えますわいの。

源六 イヤ、少つとばかり足の爪を痛めましたがお前の錫杖で大きに助かりました。

政平 それは難儀でござらう。尋ねさつしやる栗ノ木村又次といふは、あの家でござる。

源六 そんなら彼處でござりますか。

政平 わしもお札配りに行かねばならぬ。一緒にそろく〜とござりませ。サア、行きませう。

源六 それは幸ひでござりました。

政平 サア、そんなら一緒に。(ト矢張りてんつゝになり、兩人本舞臺へ来て)長樂寺でござります。又次どの

はお宿かな。

くり (奥より出て来て) オ、法印さまか。ようお出でなされました。此方へお入りなされませ。

政平 オ、これはお栗どの、又次どのはお留守かな。(ト言ひ〜内へ入る)

くり 今奥にお客があつて、挨拶してござります。

政平 イヤ、毎年冬至の星祭りに、お札を進ぜまするゆゑ、配りに来ました。

くり これは有り難うござります。(ト門口の源六を見て) モシ、お供のお方なら、此方へ入らしやん

せ。

政平 ア、イヤ、あの人は、この栗ノ木村又次どのを、お尋ねなさる人ゆゑ、こゝまで一緒に来ました。

くり そんなら此方へお入りなされいなア。

源六 アイ、御免なされませ。(ト内へ入り) 私はこの近在でござりますが、又次どの、お娘御お

浦どのに、ちつと用があつて参りました。

くり そりや、わたしが姉さま。何の御用か知らねども、奥にぢや程に、呼んで来ませうかいな。

源六 イヤ、早急にも及びません。ゆるりとで大事ござりませぬ。

政平 イカサマ、草臥れてなら、ゆつくりと逢はつしやりませ。又次どの、奥でござりますか。

くりアイ、商賣向きの用があつて、何やら談合してぢやわいな。
政平 そんならこのお人と一緒に、奥へ行つて逢ひませうか。
源六 お邪魔ながらわしも行つて、お目にかゝりませう。

政平 ドレ、奥へ行つて。(トこの時懐より手紙を落す)
源六 「政平どのへ尊國。」

ト政平、手早く取つて懐へ入れ

政平 ほんに、こゝへもお札を配らにやならぬ。
源六 ドレ、そんなら奥へ。

政平 お栗どの。

くりサア、お出でなされませいなア。

ト三人思ひ入れ。唄になり、奥へ入る。ト時の鐘になり、向うより丹波太郎、引廻しの合羽、裸の形にて、一本差し頬冠りにて、うそく出で来て

犬郎 エ、今日は寒い日ではある。それにこの間からまんゑるさ。折角この間但馬海道で、やぶ酒

手を遣つて、附けて来た狩人めは、どこへやら見失ひ、自棄を起して呑み喰ひに、着てる物は合羽一枚。裸で道中もならないゆゑ、あの勘太めを附けてやつたが、よく嗅ぎ出してくればよいが、これがほんの、素人に追銭だ。

ト言ひく本舞臺へ来ると、舞臺前井戸より、パツタリ音して、勘太、頬冠りにてヌツと出る。太郎恠りして

エ、く、恠りした。(トよくく見て) わりやア、岩菅の勘太か。

勘太 こなたの言ひ附ゆる、抜け道から忍んで爰へ。

太郎 そんならさうと斷つて出たがよい。恠りしたわえ。して、様子はどうだ。

勘太 とつくりと見て置きました。

太郎 そんなら又次を呼び出して

勘太 合點だ。(ト懐より呼子を出し吹く。奥より又次、善幸出る)

又次 丹波太郎、この内へ附込んだに違ひない。

太郎 それで手下の勘太を先きへ。

善幸 この權藤次も、昨日麓で、此方の娘お浦どのが、持つて歸つた、慥かに。

又次 そりやア、おれが氣取つて置いた。

太郎 この間但馬海道から來た狩人め、すつかり金を持つてゐたを嗅ぎ附けて、昨夜見失つて仕舞つたが、其奴が慥かに。

勘太 この家に來たに違ひない。併し今は持つてゐない様子。

又次 ムウ、金のはかしどころも、今宵のうちには知れるであらう。かねて源氏へ心を運ぶ御厨七郎、搦め捕つて出せば、この身の仕合せ。

善幸 一筋道の栗の木村、是非とも爰へかゝらにやらぬやつら。もし手に餘らば。

又次 イカサマ。(トあたりを見廻し、源六が持つて來た鐵砲を見附け) 幸ひな物がある。この鐵砲を八圖に、加勢の人数を集める手筈。首尾よくいつたらこの太鼓。(ト上方の栗の木へ太鼓をつるし) あゝして置いて打つを合圖に。

太郎 よし、太鼓が鳴れば加勢に及ぶ。

又次 鐵砲ならば取り圍む、必ず手筈を

善幸 今宵のうちに。

勘太 呑み込みました。(ト又次、太郎、勘太、上下へ別れて忍ぶ。)

善幸 よしく、手に餘ればあの鐵砲、首尾よくいけばあの太鼓。それに附けてもあのお浦に逢つて、

昨日の物を評議したいものだが。

くり (奥より出て) 父さん、法印さんが尋ねてぢやわいな、どこへござんしたぞえ。(ト言ひく出る。

善幸 思ひ入れあつておくり抱き附く。ア、コレ、誰さんぢやぞいなア、悪い事ばかり。

善幸 誰でもない。おれだ、善幸だ。

くり 何をなさんすぞえ。其やうなことしやさんと、父さんに告げるぞえ。

善幸 野暮な事を言ふものだ。ここの内へ見世物を、買ひ出しに來るのも、有りやうは、お前をおれが引つぱりもの、丹波の國から生捕りとやらかしたいのだ。おれの言ふ事を聞いてくれないか。どうだどうだ。

くり エ、いやらしい、そんな事、知らぬわいなア。

善幸 よしく、さう言やいつその事、あの長持へさらひ込んで、連れて行くによ。

くり エ、いやぢやわいなう。(ト逃げようとするを、有り合ふ長持へ入れようとする。ア、父さんいなア。

善幸 コレサ、黙つてゐな。(ト手拭にてくもり、長持の中へ入れ) ちつとの間、この中へ。

ト蓋をする。奥にて政平

政平 ヤレ、大きに馳走になりました。

トこれにて善幸、コソ〜と奥へ入る。奥より政平出て来て、捨てりふ言ひながら、ソツと長持を明け、お栗を出し、解いて

くりヤア、お前は

政平 コレ。

ト唄になり、お栗を連れ、政平奥へ入ると、合ひ方、時の鐘にて、俊連、前幕の形にて、腕を抱へながら出る。後より捕手四人、十手を持ち、出て来て

俊連 軒にしるしのあの栗の木、放れ家とは、慥かにあの内。捕手 捕つた。

ト掛る。俊連、利腕を抱へながら、片手にて立廻りあつて、皆々を向うへ追ひ込み、舞臺へ來り、門口をしやんとめる。時の鐘、奥よりお浦出て、俊連を見て

うら ヤア、誰さんでござんすぞいなア。

俊連 イヤ、わしは栗ノ木村又次どのといふを尋ねて來た。

うら その又次といふは、わたしの父さんでござんすが(ト顔を見合せ) ヤア、お前は

俊連 ヤ、さういふ其方は。

うら モシ、こゝがわたしの内でござんす。

俊連 すりや、アノこの家が。

うら アイナア。そんなら昨日の仇口を、あじやらと思はず、今こゝへ。

俊連 やう〜尋ねて

うら ハテ、ようお出でなれさましたなア。(ト合ひ方になり、兩人思ひ入れ。)

俊連 ヤレ、其方に逢うて、マア、落着きました。

うら マア、ゆるりと落着きなさんせいなア。

ト煙草盆など持つて來る事あつて、俊連の形を、よく〜見て

さうしてマア、見れば昨日の姿とは。違つたお前の形容

俊連 ハテ、こなたの内へ來るからは、侍止めてこの姿。なんと誠の男であらうが。

うら そりや、モウ、其やうに思つて下さんす、お心は嬉しうござんすが、もうノ、これから女夫になつても、必ず替つてくださんすなえ。

俊連 ハテ、斯うなるからは、なんの替らうぞいなう。
うら すりや、誠でござんすかえ。

俊連 何の偽りを言はうぞ。(トあたりへ思ひ入れあつて) ムウ、山家にしては物好きな住居。併しながら
これからは、一精出してやつて見ねばなるまい。

うら それはさうと、お前とわたしと、マア女夫になるからは、ほんの口先のどれ合ひ女夫、わたしの
父さんは堅くるしい氣質ぢやによつて、お前を仲人したといふやうな人がなければ、どうやらを
かしいやうなが。

俊連 成る程、夫婦の堅めは仲人が第一。

うら 誰ぞマア。……ほんによい事がござんす。わたしが前から心易うした、二ノ瀬村のこれも矢ッ張
り、同じやうな山持ぎのお人、源六さんといふお方が、先刻奥へ来て、ちよつと逢うたほどに、
このお方を頼んで見ようわいなア。

俊連 こなたさへ承知なら、どうでもよい。

うら そんならちやつと。(ト納戸口へ向ひ) モシ、源六さん。ちやつと来て下さんせう。
源六 アイ。お浦どの、何の用でござんす。(ト奥より出て来る。お浦、こちらへ連れて来て)

うら わたしやお前に頼みたい事がござんす。外でもないが、少つと外にいひ約束した男があつて、夫
に持たいたいと思ふけれど、知つてゐなさんすあの父さんの氣質。仲人がなうては得心があるまい
と思ふによつて、どうぞお前、その仲人になつて下さんせぬか。
源六 そりや、心易くしたこなたさんの事、随分仲人もしませうが、して聳どのは。
うら 幸ひ、あそこに来てぢやわいな。
源六 そんなら知る人になりませう。
うら さうして下さんせ。(ト俊連の方へ来て) モシ、仲人を頼んで置いたわいな。サア、ちよつと逢う
て、禮云うて下さんせ。
俊連 それは忝けない。マア、近附きになりませう。
ト三人捨ぜりふにて顔を見合せ、惻りして
俊連 ヤア、わりやアどうしてこゝへ。
源六 お前方は、知り人でござんすか。
うら お前方は、知り人でござんすか。
源六 ムウ。(ト思ひ入れ。眺への合ひ方になる。)
源六 慥かに昨夜谷底で

俊連 並んで下りた春の繩、(ト切る眞似をして)どつさり下へまッ逆さま。

源六 下から撃つた手ごたへは、肝のたばねの忽ちに

俊連 岩角、木の根に五體も碎け

源六 背骨へかけて風穴を

俊連 すねこし立たず

源六 七轉八倒。それなりに。(ト死んだといふ思ひ入れ)。

俊連 冥土にあらぬ

源六 この娑婆で

俊連 思ひがけなく

源六 仲人役。

俊連 替つた縁で

兩人 あつたなア、

うら ほんに、こりやマア、とんと分らぬわいなア。斯う出合ひなさんしたところは、お二人ともに、同じ世渡りの山持ぎ。そんなら疾からお前方は

俊連 笹山越えの狩人。わりやアおれが落した物を、持つてゐるであらうな。

源六 イ、ヤ、知らぬが、氷上のおぬしも、今の物、慥かに持つてゐるよがの。

俊連 オ、……イヤ、知らぬ。もしおれが持つたる時は

源六 此方へ貰はにやならぬぞよ。

俊連 殊によつたら遣りもせうが、われが持つた一品も。

源六 そんならわれが。

ト兩方よりかゝる。源六は足、俊連は腕の痛む思ひ入れ。

兩人 いつそ。(ト山刀と杖にて、お浦をかきのけ、立ちかゝる。)

うら コレマア、何を

兩人 イヤ、その一品。

ト突きのけて、一腰を抜いて切り附ける。兩人ちよつと立ちかゝる。お浦、有合ふ修験者の政平が持つて出た偶箱にて押へ

うら コレマア、待たしやんせ。お二人ともにこの場の争ひ。一人は殿御、一人は仲人、中に立つ身のわたしさへ、まだ祝言の杯も、濟まぬ内からこの争ひ。喧嘩に花の花嫁が、預るほどに、マアマ

アマア、お二人ともに色直し、濟んでの事になさんせいなア。
 俊連 イカサマ、この場で言はれぬ昨夜の仕儀。
 源六 互ひに悩みのこの體。ト兩人痛む思ひ入れ。

俊連 迂濶に荒氣も出されまい。
 源六 思案した上、兎も角も

うら そんなら互ひに、マアこの場は
 兩人引いてやらう。(ト脇差を引いて納める。)

うら それでわたしも落着いたわいなア。

源六 その落着いた序に、わしも落着きたい昨日の事。お浦どの、こなたに預けた二百兩。

うら アイ、そりや何時でも、預つた物ぢやによつて。わたしが印の筈は。

源六 こゝにある。(ト前幕の筈を出す。俊連ちよつと見て)

俊連 模様は色繪の番ひ獅子、その割り筈は。

うら こりや、わたしが大事の筈。

俊連 そんならそれが

うら アイ。

源六 大事の品ゆゑ、大切に、預つてゐたこの筈。模様はちよつと見て知つた。そんならおぬしが覺えの品か。

俊連 女に似合ぬ割り筈、替つた模様といふ事サ。

源六 女房の物は御亭主の、内の道具も同じ事。幸ひわしが仲人の、印にちよつと鞆引き出。

ト手裏劍にて打つ。お浦、真中にてうけ留め

うら わたしがきつと受け留めました。

源六 ハテ、女に稀れな。

俊連 さそくの手の内。

源六 仲人も悦び。

俊連 引き出の品も

源六 持參の品も

うら この場の仕儀も

兩人 昨夜の仕儀も。(ト鐵砲を打つた心、綱を切つた心をする。)

うら 互ひにゆるりと

源六 此方へ取るか。

俊連 一つに取るか。

うら 預つた品なれば

源六 その時こそは

俊進 一生懸命。

兩人 とはいふもの、(ト寄らうとして痛む思ひ入れ。)

うら ハテマア、後まで。

兩人 ムウ。(ト寄らうとして)

源六 仲人は開きませう。(ト唄になり、源六奥へ入る。)

うら 合點の行かぬこの筈、どうしてお前は。

俊連 覚えがあるか。(ト懐から筈のかたしを出す。お浦、引き合せ見て)

うら こりや、模様も同じ番ひ獅子。

俊連 しつくり合ひしその筈、それを所持なしをるからは、海上刑部太郎が娘、浦邊。

うら この筈のかたしを揃へ、斯くまで御存じあるからは、さては御主人公連様の、弟御、御厨七郎。
俊連 コレ。
ト押へる、時の鐘、合ひ方、お浦、門口をさす。この時下の藪屋おし分け、又次窺ひ出で、門口に聞

いてゐる。

うら 思ひがけない御主人の弟御、御幼少より他國の御身、過ぎ去りたまひし公連様のお言葉にて、親刑部は家來ながらも、由緒ある主従、妹背の縁定まる印になる割り筈、あなたは東にお忍びと、風の便りにお顔も知らねば、詮方も噂で暮らせしこの年月。昨日釐で思はずも、お目にかつたる路用の金、貢ぎの種と思ふゆゑ、印を渡して預かつたも、まさかの時の用意にと、親にも隠すわたしが心、夫婦の縁の番ひ獅子、盡きぬ印と思召し、女房と思つて下さりませ。

俊連 廻り逢うたる女房浦邊、兄が由緒の縁なれど、不忠の刑部が娘の其方、迂濶に縁は結ばれぬ。

うら すりや、わが親の悪心ゆる。

俊連 いかにも。わが兄六郎公連には、平親王へ諫めを入れ、死したる主人を餘所になし、源家へ裏切りなしたる刑部。白旗の行くへは慥かに昨日の白布、探り求めんその爲に、便り來りし此家のうち、心知れざる汝が親、迂濶に足は止めにくい。

うら すりや、折角廻り逢うても

俊連 旗の詮議は又次に逢うて、夫婦の縁もこれ限り。(ト行きかゝる。お浦留めながら)

うら 待つて下さりませ。

俊連 未練な。(ト振り切るを立ちふさがつて)

うら 成る程、縁を切りませう。

俊連 なんと。

うら 夫婦の縁に繋がれて、隠れ忍ばぬお前のお心 推量したゆゑ、わたしが方から縁切つて、隠まひ
たうござんす。

ト此せりふを聞いて、又次うなづき、また藪疊へ忍ぶ。

俊連 ムウ、すりや、縁切つた上この内へ。

うら 留めねばならぬその譯は、これ見て下さんせ。

ト幕明きの繪姿を出す。合ひ方替る。上の障子を明け、源六開いてゐる。

俊連 この繪姿は。

うら これぢやによつて、女房の方から縁切つて、隠まひたいわたしが心 推量して下さんせいなア。

俊連 ムウ、他人の女に隠まはれませう。

うら そんなら合點がいた上で

俊連 いかにもこの家に身を忍び、親が本心定まらば

うら お前の望みも叶うた上で

俊連 ムウ。

うら エ、有り難うござります。(ト顔見合せ、源六びつしやり障子をさす。)

俊連 ありや、最前の。

お浦 モシ。(ト囁き、長持の蓋をあけ俊連を入れ、思ひ入れあつて)ドレ、縫ひ物にでもかゝらうかいな。

ト唄になり奥へ入る。又次一本ざし、そろく出て脇差を抜き、長持の上を突かうとする。ト猿出て
又次が袖を引き、物くらしいの仕形する。

又次 エ、猿め、恠りさせたわい。(ト猿、袖を引ツ張り、邪魔をする。)いまくしい、また喰ひ物をね

だるのか。(トまた突かうとする、猿袖を引く。)

うら サア、飯喰はしてやりませうぞや。

又次 (恠りして猿を抱く) エ、いまくしい畜生めぢやわい。

ト始終合ひ方にて、又次奥へ入る。ト長持の蓋をあけ、俊連出て

俊連 今に始めぬ刑部が悪心、この身の大事。昨夜谷間で取り落せし、鏡は慥かにきやつが懐、その時わが手に奪ひ取りし、藤原家の雄龍の印、彼れを捕へて一詮議。

勘太(後より) その印を。(ト取らうとするを突き廻し、ボンと當て、勘太を長持の中へ入れる。)

ト俊連思ひ入れあつて、門口の外へ出て藪へ忍ぶ。トお浦、飯櫃に膳をのせ出る。猿附いて出て来る。捨ぜりふ言ひながら長持の側へ来て

何は無うても蟲休めに、これなりと。(ト蓋を明けようとする時、又次、つかくと出る。お浦ちやつと、ちらへ来り) サア、飯やりませう。

ト猿にあてがふ。又次、脇差にて長持を突かうとする。お浦恠り、このうち猿は膳を持ち奥へ入る。うらア、コレ、父さん、何をしなさんすぞいなア。

又次 アイヤ、こりや、オ、それく、此うちはおそろしい獸類、生の物を生けては置き憎いゆる、突き殺して

うらア、コレイナア、此うちには

又次 おれが代物、そこ退きやれ。

トまた突かうとする。奥より善幸出て来り

善幸 ア、コレノ、又次どの、さうせまいぞく。

又次 貴様は善幸、何で邪魔する。

善幸 イヤ、此うちには少つとおれが。……イヤサ、おれが商賣のものだによつて、殺しては悪からうといふ事サ。

うらソレく、お前の言ひなさんす通り、殺すといふは、マア、止めにするがようござんす。

善幸 親仁どの、マアく、待つてやらつしやいな。

又次 エ、何にも知らずに何をぬかす。べらほうめ。

善幸 (ムツとして) ナニ、べらほうだ。唐茄子親仁め、この長持はおれがものだ。滅多な事をする料簡しないぞ、料簡しないぞ。

うら ホンニ、こりや、尤もでござんすわいなア。

善幸 エ、長持はわれが物でも、この中に。イヤサ、中の代物はおれが物だ。

又次 そんなら代物の金を寄越すか。

善幸 サア、それは
又次 金取らぬからは、矢ッ張りおれが代物だ。(ト長持へかゝる。)
うら 買ひませう。
又次 ヤ。

うら この長持、わたしに賣つて下さんせいなア。
又次 アノ、娘、われが金出して
うら どうぞ賣つて下さんせ。

善幸 いつもはおれが買ふといふこの長持、娘のお浦が

又次 買ふといふなら、賣りもしようが、値段が高い、二百兩ぢや。

うら そんなら、アノ二百兩に

又次 高いと思は、よしにせい。

うら 買ひませうわいな。

又次 エ、買はざアなるまい。併しその金は。

うら 明日ともいはず、今こゝで。(ト押し入り、手拭に包みし二百兩を出し) サア、受取つて下さんせ。

善幸 ヤア……、又次の娘が二百兩。

又次 よもやと思つたこの金は。

源六 (出て來り、金を取つて) おれが金だ。

又次 ヤア、。

うら ヤア、お前は。

源六 昨日預けた二百兩、お浦どの、大きにお世話でござりました。(ト懐へ入れる。)

うら そんならその金

源六 わしが金だによつて、又次どの、この長持はおれが買ひませう。

又次 アノ、この長持を

源六 賣つて下さい。

うら ア、コレイナア、この長持は。……イエ、減多に賣ることはならぬわいなア。

源六 ハテ、お浦どの、悪い合點だ。この長持の見世物を、おれが買うたらどなたでも、指でもさませ

る事ぢやアない。

又次 オ、賣つてやらう。

善幸 それぢやアおれが

源六 いゝ見世物、二百兩で値段が出来たら、ソレ、金よ。

又次 受取つた。

源六 サア、これからはこの中の化物を、おれが。(トすらりと抜いて突かうとする。)

善幸 ドッコイ、滅多にさうはならぬ。(ト長持の上へ乗り) たとへ賣つてもこの中には、見世物師の商

賣道具の引ッ張りもの、中へ入れたは徳利の三本足、蛇、蛙の見世物まで、入れてあるのがおれが商

賣、一寸法師や三ツ目小僧は、穴からのぞくか、目鏡で見ると、見世物屋の善幸は、男でござんす。

又次 エ、何をぬかす。(ト引退ける。)

源六 エ、面倒な。(ト長持をグツと突く。)

うら (驚き) ヤア、、長持を。……ハア、。

ト泣き伏す。この時源六、懐から鏡を落す。善幸取上げ

善幸 コリヤ、これ御鏡。

源六 それを。(ト寄るを振り切つて)

善幸 これで築地へ歸られる。

ト引つたくり、舞臺前の井戸へ飛び込む。源六續いて行かうとする。トこの時下の方より捕手、ばら出て取り巻き

四人 動くな。

源六 (思ひ入れあつて) こりや、何となざりまする。

政平 尊國君の仰せをうけ、大江の郡領政平が、承つて下知をなす、組子の者ども。

源六 ヤ、なんと。

ト鼓の合ひ方になり、障子引きぬくと、政平、衣裳上下にて、お栗を引き附けてゐる。

思ひがけない最前の修行者。この家の娘を擧となし、われを取り巻きその出で立ち。

政平 朝敵餘類の六郎公連が弟七郎俊連、遁れはあるまい。

源六 ムウ、覺えなき名の朝敵呼はり。斯く取り巻きしは心得ぬ。

政平 覺えないはと卑怯な俊連、淡路守頼親には、尊國君と謀叛の企て。汝味方に附かずんば、召捕つて來れとの下知サ。

又次 この家へ入込む其方こそ、公連が弟御廚七郎、政平公へ訴へて、取り圍ませし上からは、本名明かし繩かゝるか、但し政平公へお味方するか。

政平 この家の主、栗ノ木村又次も、頼親どのへ味方のしるし。今人質とせし娘、この政平が連れ行くからは違背はない。サア俊連、思案極めて返答せよ。ドヤどうだ。

源六 イヤ、どこまでも覚えなき、朝敵の名を呼び立てすれば、政平どのと諸共に、頼親公の隠れ家へ。政平 イカサマ、一應で明さぬ本名、又次が娘と諸共に、身が陣屋へ引き立て行かん。

源六 どこまでなりと勝手次第。
政平 ハテ、大丈夫なその魂ひ、味方になさば一方の旗頭。
又次 然らば大江の政平公。

捕手 お尋ねありし御厨七郎、腕まはせ。(ト源六にかゝるを突きつけ、政平、抜打ちにボンと切る。)
皆々 これは。

政平 懇望なして連れ行く俊連、家來ながらも
又次 天晴れ御賢慮。

政平 者ども、警護。
三人 ハア。(ト乗り物を持ち出し、お栗を乗せようとする。)
くり 今に始めぬ父さんの悪心、現在娘のわたしをも、人質として政平どのへ。

又次 一味の潔白、娘でも容赦はいたさぬ。(ト乗り物へ入れ) 拙者が義心。
政平 ハテ、小氣味のよい親仁めだわえ。

ト唄になり、この人数向うへ入る。又次残る。時の鐘の合ひ方になり、丹波太郎出で

太郎 今奥で様子を聞けば、今のやつめを無理無體、公連が弟にして、取り巻かせたこなたの所存は。

又次 一癖あるゆるゑに、あいつを擒に味方に附ける、手段はさまざま。娘といふも、ありや誠は、わが子にあらぬ取り替へ子。それはさうとお浦が隠した一品。(トお浦正氣を失ひ居るを引起し、活を入れる。)

コリヤ、氣が附いたか。(トお浦、太郎、又次を見て)
うら 是非に及ばぬ、お主の敵。(ト有り合ふ山刀にて切り附る。又次留めて)

又次 コリヤ、氣が違つたか。何するのぢや。
ト捨てりふにてあしらひ、立廻り。長持の蓋を取る。中より勘太、肩先きを突かれながら飛び出し

勘太 又次どの。
又次 すりや、此うちと思ひの外
勘太 俊連どのはどうにどこへか

うら ヤア、すりや、いつの間やら。……エ、忝ない。

ト言ひさうにして、脇差を太郎が鼻の先へ出す。

太郎 エ、コレ、鼻ツつらが危ない。

又次 (お浦を引据る) コリヤ娘、わりやア繫ぎ馬の旗をどこへ隠した。俊連はどこへ遁がした。
うら エ、。(ト脇差を持ったまゝこちへ来る。)

太郎 コレ、又次どの、お浦どの、あの長持を突かれたので、氣違ひになつたのだ。
勘太 氣違ひだ。

うら (思ひ入れ) オ、氣違ひぢやなくぞ。(トこれにて勘太遁げて入る。)

又次 コリヤ、娘、旗はどこへ隠した。白旗は知らぬか。(トお浦、いよく氣違ひの思ひ入れにて)
うら 何ぢや、旗とは、知らぬかとは。……………白刃ぢやなく。(ト脇差を持ったなり振り廻す)

又次 ア、危いく。

太郎 コレ、親仁どの、たうとう氣違ひになりました。

又次 白旗よりは差し當る、俊連が詮議。(ト行かうとするをお浦、留めようとする。)

太郎 コレ、われはこゝに。(ト留める、又次ツイと奥へ入る。)
ヤイ、コリヤ、氣を鎮めんか。……………
……………エ、コレ、こいつはおれが女房にしようと思つたに。(トいろくあつて) よい事があるわえ。

氣違ひの水こぼさずといつて、どのやうに氣が違つても、水に顔をうつすと、すぐ鎮まるといふ事、幸ひこゝに鹽がある。(ト有り合ふ鹽へ手桶の水を入れ) コレ、お浦、この水をヂツと持つてゐると、氣が鎮まる。(ト無理に持たせ、太郎、お浦の顔を見て) オ、やうくどうやら氣が鎮まつたやうだ。(ト笛の合ひ方になり、太郎思ひ入れあつて) さて又、これからは、又次が言ひ附けた合圖の鐵砲、ドンと打つと村中が取り圍むとの事、太鼓を打てば圍みを開く。よし。(ト有り合ふ鐵砲を持つて出で、火繩へ火をうつさうとするを、お浦、鹽の水を火繩へかける、太郎恠りして) コリヤ、氣違ひめが。

うら アノ、水こぼしたのぢや。

太郎 エ、いまくしい。(トお浦に打つてかゝる。奥より以前の猿出て来て、太郎にかき附く。猿めが邪魔を(ト殿りつける、猿は栗の木へ、ツカくと登り、太鼓を打つ、太郎恠りする。)
ヤイ、それを打つてたまるものか。(トいろくあせる。お浦見て笑ひながら)

うら ヤア、太鼓を打て。猿々。

ト太郎、木の側へ行かうとするをお浦留める。これより猿たゞ太鼓に、合ひ方を入れたる詔の鳴り物になり、兩人をかき立廻りよろしく、ト鳴居にかけたるお札箱を敲き落す。中より白旗出る。太

郎取り上げ

一一六

太郎 こりや、コレ白旗、政平公へ、さうだ。

ト引ッたくる真中へ又次出で、旗を引ッとり、太郎をボンと切る。お浦、猿を抱きうつかりしてゐる。又次 この宮の中に隠しあつたは、疑ひもなき相馬の白旗、娘が狂氣を、旗の威徳で。

トお浦のつむりへ騎すと、お浦正氣になりし思ひ入れ。

うら ヤア、お前は父さま。

又次 娘、正氣になつたか。

うら 正氣になつたかとは。

又次 其方が隠せし御旗の威徳。

うら ヤア、そんならいつの間に。

又次 わが手に入りしは、今はからず丹波太郎と争ひに、思はず落せし箱の中、親子もこれまで包みしは、娘ながらも古主を思ふ其方が貞心。われも今まで悪事と見せしも、政平を計らん今のこしらへ事。大事を知つたる丹波太郎、手に掛けたれば氣遣ひなし。うら そんならわたしが狂氣して、その白旗の威徳で直つたかいなア。

勘太 (後へ出て) さては又次は二心、この通り政平公へ。さうだ。

ト駈け出す。舞臺前の井戸より白刃を出し、勘太をグツと突く。勘太苦しむ。パツタリ、詠への鳴り物になり、井戸より俊連、抜刀にて鏡を口に銜へ、ズツト出る、お浦見て

うら ヤ、あなたは七郎俊連様。

俊連 かねて知つたるこの抜け道、刑部が本心疑はしく、心惑ひしそれがしが、疑ひ晴れしその白旗。

又次 すりや、それがしが忠義の心底、賢察あつてこれまでの

俊連 不忠は却つて忠義の刑部、今より味方を集むるわが存念。

又次 ハア、有り難きお詞。年寄つたれど刑部太郎、これまで悪事と見せたるも、敵を欺くわが本心。

イデ、これよりは味方の手筈。

俊連 お家の重寶その白旗、又この御鏡まで手に入りしは、大望成就の吉瑞ならん。

ト二種を又次に渡す。

又次 この二いろさへ手に入らば、この刑部が心の安堵。丹波太郎、大儀であつた。

ト太郎むつくりと起きて二いろを取つて

太郎 この二品、政平とのへ。(トツイと奥へ入る。)

一一七

うら ヤア、丹波太郎も

又次 死んだと見せたも皆嘘、口車にのせて、一杯喰つた上からは、最早叶はぬ網代の魚だ。サア、尋常に覺悟召され。

俊連 計ごとは一旦の利潤、汝を計るものは又汝に計らるゝ。かねて知つたる悪事の刑部、さこそあらんと思ひしゆゑ、今奪はれしは皆似せ物。

又次 ヤア。
うら お前の忠心知つたゆゑ、狂氣となつて偽りの、旗を誠の白旗と、正氣になつてのこしらへ事。親を騙した不孝の罪、お主へ立てる忠義ぢやわいなア。

又次 さては、うぬらがこしらへ事。この上は俊連、うぬを。
ト俊連に切つてかゝるを、お浦、後より又次を一刀切ると、どろ／＼になり、前舞臺石の下より繋ぎ駒の白旗、あらはれ出で栗の木へかゝる。舞臺前より水氣立ち、どろ／＼、早めの合ひ方。

うら 血汐の穢れに立ち昇る、水氣と共に飛び去りしは
俊連 これまで行くへ知れざりし、まさに相馬の繋ぎ馬。
うら 今目前にあり／＼と

俊連 不淨を禁じて、あの梢に、

うら かゝる不思議も、御旗の威徳。

俊連 實に争はれぬ有様ぢやナア。(トどろ／＼打ちあげ、水氣止む。お浦、白旗を俊連に渡す。) エ、忝けない。これも刑部の悪心悟り、裏の裏行く浦邊が働き。オ、出来した／＼。

又次 (苦しみながら) たとへ此儘死するとも、七郎うぬは
ト行くを奥より、源六出で來り、又次の首を打つ。

源六 朝敵餘類の張本たる、刑部太郎は、斯くの如く、討ちたる上は御厨七郎、兄は忠義の六郎公連、性は善なり、速かに、今より源家に隨はれよ。

俊連 ホウ、元より兄は忠義に死し、名は朽ちやらぬ忠義の魂ひ、われも源家に仕ふる心。
うら そんならお前は、今日より源家へ。

俊連 仕へるしるしは、白旗を、鏡もろとも頼光公へ。(ト源六へ渡す。)
源六 政平が擒にせしは、常俊が娘鶴の前、彼れが巧みにかねてより、入込み置きしを人質と、送りやつたる組子を退ぞけ、連れ歸つたる二ノ瀬の源六。

くり (奥より出て) 様子を聞きしみづからが身の上。小さい時より入れ替へ子と、知らず暮らせしこの

月日、二ノ瀬の源六が物語り、

うら それも矢ッ張り、わが親の、巧みと知らず、これまでも
くり 姉よ妹と親子の因み。

源六 忠義にかへつて親を討つ、これぞ丹波の父討栗。

俊連 この白旗は頼光公へ、イザ、二ノ瀬どの。

源六 雄龍の印は藤原家へ、鶴の前が家土産に、送るは即ち頼光公より、仰せを受けたる、二ノ瀬の源六。

俊連 武に逞ましき頼光公へ、随ふわが名もゆかりある、浦邊の次郎季武と、今に改む忠義の一人。

うら 悪人ながらも現在の、親を殺した、この身の罪科。(ト自害する。後へ太郎出かけて)

太郎 あの白旗を。(ト取りに行く。俊連引き廻す。)

俊連 出来した浦邊。

うら サア、その浦邊は忠義の果て。

源六 子に報うたる刑部が悪事。

太郎 うぬも一緒に。(ト俊連にかゝる。突き廻し、源六、太郎が首を切る。)

源六 出世の門出。

うら どうぞ未来は。(ト拜む。)

俊連 女房。

ト言ひさうにして、首をボンと切る、木の頭、兩人顔見合せ、よろしく拍子

幕。

第壹番目

五立目

市原野の場

役名。

女乞食、お芳。乞食頭、つゞれの次郎。大宅太郎光任。三度飛脚。雲助。乞食四人。

本舞臺三間の間、二重舞臺、草土手、東西蒲鉾乞食小屋、うしろ藪曇み。幕のうちより野伏り四人、
火を焚く。ある。時の鐘、山おろしにて幕明く。

乞一 もう日が暮れて、餘ッ程過ぎたが、いゝ鳥がかゝりさうなものだな。

乞二 物貰ひの乞食をして、往來の鳥のかゝるのを、待つ事はないぢやアねえか。

乞三 イヤサ、この市原野に野伏りをしてゐて、島原や祇園近所へ、お剩りを貰ひに行くは大儀なもの
ぢや。

乞四 そこで往來の鳥を待つのは、ひるてんではなくて、盗人と野伏りの兩天だ。(ト向うを見て) アレ

見や、向うへあかりが見ゆるぞよ。
乞一 何だか知らないが、大方鳥であらう。
四人 隠れてるろく。

ト東西へ別れて小隠れる、ト時の鐘、合ひ方になり、三度飛脚、半纏、手甲、股引、大小、飛脚の形にて、状箱を持ち、飛脚提灯を持ち出て来て

飛脚 丹波の田邊から、京都のあたりの館まで、日着きといふは大抵の道ではない。併し、もう市原野へ来れば今少しぢや。(ト本舞臺へ来り) オ、乞食どもが焚き火をした燃えさしと見える。あんまり寒い。一服のんで、あたつて行かう。

トあたりを見て筵の上へ登り、刀を抜いてそこへ置き、煙草呑みながら火にあたつてゐる。向う、バタバタにて、胴六、四立目の形にて、蜘蛛切り丸を持ち、走り出て来て、飛脚に突き當り

胴六 アイタ、、、、。赦さつしやい〜。飛脚 どうつぢや〜、何をするのぢや。胴六 イヤ〜、わしはちつと追手のかゝるを、やう〜と逃けて来た者。それで突き當つたのぢや、料簡さつしやい〜。

飛脚 さう言ふ事なら料簡もしようが、一人では薄氣味の悪いこの丹波口、それで悔りした。胴六 もう追手もかゝるまい。ドレ〜、わしも一服のみながら、あたりませう。

ト飛脚の側へ行き、蜘蛛切り丸をそこへ置いて火にあたる。此うち、後へ四人出て来て

四人 その火にあたるなら、酒手を置いてゆきやれな。
飛脚 ヤア、、、。(ト始終時の鐘の合ひ方。)

乞一 おいらは、こゝにゐる乞食だが、奈良の般若坂の、かつたい石と同じことだ。

乞二 その火にあたるなら、おいらが仲間だ。
乞三 それだによつて、仲間入りの酒手をば

乞四 まつ裸になつて
四人 置いて行けといふのだ。

飛脚 そんなら、わいらは盗人ぢやな。
四人 盗人ぢやアない、お乞食さまだ。
胴六 でも、まつ裸になれといふからは
飛脚 追剥ぎぢやな。

飛脚 こいつは、只は置かれぬといつてどうする。オ、切るか。切られべい。取り違へ取つて立ち上り

乞一 只は置かれぬといつてどうする。オ、切るか。切られべい。ト飛脚の側へ行く。

乞二 オ、おいらも切られべい。ト同じく摺り寄る。

飛脚 身共を何と思ふ。

乞三 知れた事、飛脚だから金があらうと思つて

四人 それで酒手を貰はうといふのだ。

胴六 そんならその飛脚どのばかりで、おれは構ひはないか。

乞四 われも小附けた、をかしな野郎、何ぞ持つてるであらう。

乞一 今聞きやア、ものしたものがあると言つたぞえ。

胴六 ヤア、ト恠りして刀を隠す。

飛脚 身は頼光公の足輕分の者で、丹後までお飛脚に参つたものぢや。嘘でないといふ證據は、首にかけるこの状態の中、お墨附があるぞや。

四人 お墨附とは何の事だ。

飛脚

源家の大將頼光公、御病氣、れど、謀叛の者を、討手の役を蒙りたまひ、それで諸國の源家へ下知觸れのお墨附。鎮守府の印鑑のすわつた書附。まだそればかりでない、臣下は元より、源家へ因みの者へ渡されて、顔見知らぬとても、幕下の證據になる墨附ぢや。それより外に金はない、道中の遣ひ残りの、端た錢より外はない。

四人 そんなら金は持たないな。

乞一 さうして二才野郎、わりやア何だ。

胴六 おれは何を隠さう、丹波で物した物があつて、それで逃げて來たが、追手が來るからこゝへ隠れて、寒いから焚き火にあたつてるたが、なんだ。

乞二 何だもすさまじい。その物した物を此方へ寄越せ。

胴六 イ、ヤ、知らない。ト袖にて隠す。

乞三 何だか隠すが、寄越しやアがれ。

胴六 知らないわえ。ト逃げようとする。

乞四 飛脚、われを引ッ剥いで。

ト飛脚をとらへる立廻り。乞食の一と二は胴六を叩きまはす。禪の勤めになり、飛脚は刀を抜いて切

りまくり乞食の三四を下座へ追ひ駈けて入る。
乞一 うぬ、小泥坊と見たからは
乞二 只は遣らない、持つてるる刀を寄越せ。
胴六 イ、ヤ、知らない。

ト三人立廻りにて、乞食の一胴六の持つてるる刀をひつたくり下座へ入る。後より追駈けて入る。引き違へて乞食の三と四を、飛脚追駈け出て来て

飛脚 うぬら、一々生けて置かうか。
兩人 何を。

ト縫ぐるみにて打つてかゝる、ちよつと鳴り物になり。三人タテあつて、飛脚、兩人を下座へ追ひ込む。思ひ入れあつて

飛脚 この市原野での盗人、不屈きなやつら、追ッ附け召捕らして一々拷問。併し身は大切なるお墨附があれば、道を替へて（ト思ひ入れあつて、刀を納めようとして驚き） コリヤコレ、身共が刀が違つた。なんほ足軽でも、魂ひが取り替つてはひよんなもの。（ト刀を納めて） 併し、鞘も立派なれば、悪いのよりは増しか。ア、儘よ。（ト時の鐘になり、飛脚東の花道へ入る。）

ト乞食四人、出て来り

四人 お頭、今のを聞かしたか。

ト時の鐘にて、上の小屋より次郎、つゞれ、野伏りの形にて出で

次郎 わいらもこれから頼光が館へ、かねて入込む用意の手筈。……………早く。

四人 心得ました。

ト時の鐘にて向うへ入る、下の小屋よりお芳、女乞食、つゞれ、煙草をのみながら出て

よし つゞれの次郎さん。

次郎 お芳ばうか。

よし 今のは何ぞになりさうな事。

次郎 かねて望みの今の墨附。

よし そんならわつちが追つ駈けて。（ト行かうとする。）

次郎 イ、ヤ、大事な。頼光の館へ忍んで墨附を

よし 盗むは手間ひまいらねえが

次郎 忍び入るにはその形ぢやア

よし ハテ、知れた事、何になりと。

次郎 そんならこれから

よし ソレ、行きがけに駄賃場の

次郎 三條あたりで一仕事。

よし なりたけ働らき

次郎 墨附を

よし 首尾よく盗んで

ト思ひ入れ。三味線入りの禪の勤め、雨車になりて、お芳、風呂敷を肩にあふり、花道へかゝる。次郎見送る。向うより大宅太郎、ぶっさき羽織、野袴、下駄がけにて、傘をさし出て来て、花道にて行き合ひすれ違ふ。互ひに思ひ入れあつて、大宅太郎「さてこそ」といふ思ひ入れにて振り返る。お芳、風呂敷をかぶり、向うへ入る。太郎、本舞臺へ來り次郎と渡り合ひ、次郎仕込みにて切りかゝらうとする。太郎、傘にて受け留め立廻りよろしく

幕

第壹番目

攝津介頼光館の場

六立目

同 二人上使の場

同 姉弟名乗の場

役名。

上使、三田源太廣國實は將軍太郎良門。煙草賣り、お芳。上使、三田源太廣國實は平井保輔。家老、大宅太郎光任。尊國君實は泰ノ次郎正文。鯨坊主、猪ノ熊入道雷雲。頼光奥方、園生の前貫は能勢判官娘、三崎。頼光弟、美女丸實は保昌娘、小式部。田舎娘お岩實は將門娘、七綾姫。

本舞臺、三間の間、高足の二重、舞臺下の方、釘隠し、とも鍍金の金物、見附金襖、欄間とも残らず樹の模様。一面に簾上げ下し、東西紅白の梅の大樹、吊り枝、手洗鉢、すべて鎮守府將軍の館、住吉の神事の體。幕のうちより上の方二重屋體に、尊國君、褐式壺折の衣にて、床几にかゝり、雷雲、鯨坊主にて、錦の衣裳を着たる抱子を懐へ入れ、片手に錫の瓶子を三方を載せて持つてゐる。侍女三人、着流しにて、三方に大杯を乗せて、長柄の銚子を持ち、侍ひ四人、上下衣裳にて、三方に三つ組の樹を持つてゐる。皆々立ちかゝりある見得。下り葉にて幕明く。

侍一 承はれば、今日は吉日によつて、攝津介頼光公には、鎮守府に御任官あつて、津の國の大社たる侍二 住吉大明神は氏神のことなれば、九月十三日は例年住吉寶の市、則ち樹の神事にて、多くの樹を商ふ。

侍三 この程は、わが君の、御所勞重らせたまふに依つて、今日御祈念のため、即ち樹の神事。

侍四 さるによつて、お館の襖張り付けは、三樹の模様、その御祝儀によつて

四人 斯くの如く、銘々三樹を、献上仕つてござりまする。

尊國 如何にも聞き及んだが、先達てより頼光が病氣とあれば

雷雲 それに、珍らしき住吉樹の神事あれば、その式を御上覽とあつて、勿體なくもこれまで御入り。

猶も我が君御持參の神酒を供へ、頼光どのへ進ぜられんとの御説。

尊國 別て、今日園生の前が招待は、定めて一子のことならん。

雷雲 入道がほつほに入れて參つたこの子は、當京極通り藪の下を、君には夜分御通行の節、御不便と

あつて拾はれたまひ、御養育なされしが、聞けば頼光が一子にて、捨てしとの事。

女一 それをこなたへ、お貰ひ返しなされんと、北の方の思召し。

女二 それゆる今日、樹の神事を幸ひに、御招待申しましたのでござります。何はともあれ、我が君様には

兩人 イザ、九獻召しあがられませう。

尊國 イ、ヤ、不馳走のその酒、呑みたくない。磨を呼び寄せ、園生にも光任にも、出迎ひもなき無禮の者ども。ドレ、立歸らうか。

皆々 アイヤ、それでは。

園生 (向う揚幕にて) 先づく、お待ち下さりませう。

ト三味線入りの亂れになり、向うより園生の前、裃袴衣裳にて菊の花を持ち、跡より咲平、花平、繻子奴にて、竹筒へ菊の花の生けたるを持ち出て来て、直ぐに舞臺へ來り

これは、尊國様には、これにお出で遊ばされましたか。

尊國 磨を招待いたして置いて、なぜ出迎ひ致さぬのぢや。

園生 成る程、恐れ入りましたる御説ではござりますれど、菊亭よりのお入りと存じ、お出迎ひいたして、それゆる失禮、お赦し下されませう。

花平 わけて北の御方には、尊國様の御覽に入れんと、菊亭のお庭にて、お手折りなされた菊を、これ

なる花筒へ。

咲平 菊とはいへど花はさまざま、黄金、平白、今出川、亂菊、猩々、風車、有栖川に禿菊。

兩人 イザ、御覽あそばされませう。(ト尊國の前へ出す。)

尊國 成る程、菊見もよからうが、樹の神事の見ものといひ、殊に源家の重寶、蜘蛛切り、鬼切り二振りのうち、蜘蛛を退治せし蜘蛛切り丸。さればこそ、その毒蟲残つて、劍を所持なす者に恨みあ